

富山県婦中町

千坊山遺跡群試掘調査 報告書

2002年3月

婦中町教育委員会

序

千坊山遺跡群が営まれた婦中町は、水と緑に恵まれた美しい町です。

その豊かな自然環境は、古くから人々を惹きつけ、県内でも有数の遺跡の宝庫となっています。

なかでも弥生時代から古墳時代にかけて営まれた本遺跡群は、全国に誇るべき遺跡であり、先人が遺した偉大な遺産であります。独特な地域性をもったこの遺跡群に触れる時、遙か1700年の時を超え、強い信念をもって生きていた先人達との繋がりを感じます。自然と共存した彼らの暮らしには、同郷に暮らす現代の我々が学ぶべき点が多くあります。

遙か昔から現代まで脈々と受け継がれてきた美しい自然と先人達が育んできた歴史を大切に守っていき、刻々と移り変わる時代の中で、この誇るべき財産を未来へと確実に残していくことが、現代に生きる私達の大切な役目でもあります。

そこで本遺跡群の基礎的調査を終了した今、その第一歩として、調査の成果を皆様と広く共有致したく本報告書を作成致しました。この報告書が、本遺跡群のみならず、地域の歴史と文化の理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、調査に御協力頂きました皆様方に、心から感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導を賜りますよう、お願い致します。

平成14年3月

婦中町教育委員会

教育長 宮 島 信 一

例 言

- 1 本書は、富山県婦負郡婦中町長沢・新町・外輪野・千里・富崎地区における千坊山遺跡群の試掘調査報告である。
- 2 調査は、国庫補助金及び県費補助金の交付を受け、婦中町教育委員会が行った。
- 3 現場調査、遺物整理、報告書作成業務の体制は以下の通りである。

調査事務局：婦中町教育委員会生涯学習課 平成11年度 見波重尊(課長)、山田茂信(文化振興係長)
平成12・13年度 見波重尊(課長)、矢部幸子(文化係長)

現場調査・整理業務担当者：大野美子(主任)

現場調査・整理業務参加者：小島あずさ(嘱託職員)、生田寿美子(整理作業員)、村上千春(整理作業員)、富山大学考古学研究室学生(補助員)

整理業務参加者：堀内大介(文化財保護主事)、細辻嘉門(主事)、守田 睦(嘱託職員)、河竹明子(嘱託職員)、土田澄子(整理作業員)

- 4 本文の編集・執筆は、大野が行った。全ての文責は大野にある。
- 5 遺物写真撮影については、撮影スタジオ・器材などを福岡町教育委員会に借り、同教委の栗山雅夫氏のご指導を得た。また、現場調査・資料整理にあたっては、次の方々から有益な御教示と御助言を得た。記して深い謝意を表したい。

宇野隆夫、久々忠義、藤田富士夫、高橋浩二、亀田正夫、安念幹倫、河西健二、荒木宗男(敬称略)

- 6 調査にあたっては、地権者の方々に多大な御協力を得た。また、富山県畜産課には、敷地内にて長きに渡り調査を実施することを快諾していただき、便宜をはかって頂いた。記して厚く感謝申し上げたい。
- 7 出土・採集遺物及び記録資料は婦中町教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 図で使用する方位は真北、水平基準は海拔高である。
- 2 各トレンチの表記はT番号とした。
- 3 遺構の表記は、ピットをSP、土坑をSK、溝はSD、住居跡はSIとした。
- 4 平面図及び写真図版中の遺物番号は、出土遺物実測図の番号と一致する。
- 5 断面図に記した砂礫の大きさの表記は、径2~5mm程度の場合を小、径5~10mm程度の中、径10mm以上を大、径7~8cm以上を極大とした。
- 6 土色、土器胎土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖2001年版による。
- 7 遺物観察表は以下のとおりである。
「実測番号」欄は、出土遺物実測図の番号と一致する。
「口径遺存」「底径遺存」欄は、口縁部・底部の残存率を、12分割した同心円で読み取った数値で表示してある。
「胎土」欄は、「密・やや密・やや粗・粗」の4段階で示してある。
「焼成」欄は、「良好・やや良好・やや不良・不良」の4段階で示してある。

本 文 目 次

I 序 章	1
第1節 遺跡の立地と歴史的環境	1
第2節 調査に至る経緯と経過	3
第1項 調査に至る経緯	3
第2項 調査の経過	3
II 調査概要	4
第1節 調査の方法	4
第2節 遺跡の時期決定と土器編年	4
第3節 調査結果	5
第1項 六治古塚	5
第2項 向野塚	11
第3項 鏡坂墳墓群	17
第4項 五ツ塚古墳群	18
第5項 富崎墳墓群	29
第6項 富崎赤坂遺跡、難山砦遺跡	45
第7項 富崎千里古墳群	54
第4節 千坊山遺跡群に含まれるその他の遺跡	77
第1項 千坊山遺跡	77
第2項 添ノ山古墳	77
第3項 富崎遺跡	77
第4項 王塚古墳	82
第5項 勅使塚古墳	82
第6項 鍛冶町遺跡	82
第7項 南部I遺跡	84
第8項 墳丘墓・古墳の可能性のある遺跡	86
III ま と め	87
第1節 千坊山遺跡群の変遷と様相	87
第1項 弥生時代	87
第2項 古墳時代	90
第2節 出土遺物	94
第1項 器種細別型式分類	94
第2項 考察	97
第3節 四隅突出型墳丘墓の地域性	101
第1項 数量分析	101
第2項 北陸の四隅突出型墳丘墓	109
第4節 千坊山遺跡群における在地勢力の成立と衰退	110
おわりに	111
参考文献	111
附章1 富崎千里古墳群における地中レーダー探査	127
附章2 ミニシンボジウム「車弥呼の時代を生きた人々」概要	132
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡分布図(1/30,000).....	2
第2図	六治古塚 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、主な遺物の出土位置(1/8).....	6-7
第3図	六治古塚 土層断面図T1~T5・T9~T11(1/80).....	8
第4図	六治古塚 土層断面図T6~T8・T12・T13(1/80)及び遺物出土状況図T8・T12(1/50).....	9
第5図	六治古塚 出土遺物(1/3).....	10
第6図	向野塚 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、主な遺物の出土位置(1/8).....	12-13
第7図	向野塚 土層断面図及び平面図T1・T2・T4・T11(1/80)、遺物出土状況図T1(1/50).....	14
第8図	向野塚 土層断面図T3・T5~T10・T12~T15(1/80)及び平面図T3・T5・T7~T10・T12・T13(1/80)、 遺物出土状況図T15(1/50).....	15
第9図	向野塚・鏡坂墳墓群1号墓 出土遺物(1/3).....	16
第10図	鏡坂墳墓群2号墓 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、主な遺物の出土位置(1/8).....	19
第11図	鏡坂墳墓群2号墓 土層断面図T1・T2・T5・T6(1/80)及び遺物出土状況図T1・T2・T5(1/50).....	20
第12図	鏡坂墳墓群2号墓 土層断面図及び平面図T3・T4・T7(1/80)、遺物出土状況図T3(1/20).....	21
第13図	鏡坂墳墓群1号墓 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、主な遺物の出土位置(1/8).....	22-23
第14図	鏡坂墳墓群1号墓 土層断面図T1・T2・T8~T11(1/80)及び平面図T8~T11(1/80).....	24
第15図	鏡坂墳墓群1号墓 土層断面図T3~T7(1/80)及び平面図T4(1/80)、遺物出土状況図T3(1/50).....	25
第16図	五ツ塚古墳群 調査概要図及びエレベーション図(1/500).....	26-27
第17図	鏡坂墳墓群2号墓 出土遺物(1/3).....	28
第18図	富崎1・2号墓周辺における採集土器(1/4).....	30
第19図	富崎墳墓群1号墓・2号墓 調査概要図及びエレベーション図(1/250).....	32-33
第20図	富崎墳墓群2号墓 土層断面図T1~T7(1/80)及び平面図T3・T4・T7(1/80).....	34
第21図	富崎墳墓群3号墓 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、 主な遺物の出土位置(1/5)、(1/8)、(1/13).....	35
第22図	富崎墳墓群3号墓 土層断面図T1・T10~T12(1/80)及び平面図T10~T12(1/80)、 遺物出土状況図T1・T11・T12(1/50)、SK02断面図(1/50).....	36
第23図	富崎墳墓群3号墓 土層断面図T2・T8・T13(1/80)及び平面図T8・T13(1/80)、遺物出土状況図T2(1/50).....	37
第24図	富崎墳墓群3号墓 土層断面図T3~T7・T9(1/80)及び平面図T3・T5・T6・T9(1/80)、 遺物出土状況図T4・T5・T9(1/50).....	38
第25図	富崎墳墓群3号墓 出土遺物(1/3).....	39
第26図	富崎墳墓群3号墓 出土遺物(1/3).....	40
第27図	富崎墳墓群3号墓 出土遺物(1/3).....	41
第28図	富崎墳墓群3号墓 出土遺物(1/3).....	42
第29図	富崎墳墓群3号墓 出土遺物(1/3).....	43
第30図	富崎墳墓群3号墓 T10SK02 出土遺物(1/3).....	44
第31図	富崎赤坂遺跡・離山岩遺跡 調査概要図(1/2,000)、主な遺物の出土位置(1/10)、(1/12).....	46
第32図	富崎赤坂遺跡 土層断面図T3~T7・T11~T14延長(1/400)、レベル(1/80) 及び平面図T4~T7・T11・T13・T14(1/400)、離山岩遺跡 土層断面図(1/80)及び調査概要図(1/200).....	47
第33図	富崎赤坂遺跡 出土遺物(1/3).....	48
第34図	富崎赤坂遺跡 出土遺物(1/3).....	49
第35図	富崎赤坂遺跡 出土遺物(1/3).....	50
第36図	離山岩遺跡 出土遺物(1/3).....	51
第37図	離山岩遺跡 出土遺物(1/3).....	52
第38図	離山岩遺跡 出土遺物(1/3).....	53
第39図	富崎千里古墳群 南群測量図(1/1,200).....	56
第40図	富崎千里古墳群2号墳 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、主な遺物の出土位置(1/8).....	59
第41図	富崎千里古墳群2号墳 土層断面図T1~T7(1/80).....	60
第42図	富崎千里古墳群6号墳 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、主な遺物の出土位置(1/8).....	61
第43図	富崎千里古墳群6号墳 土層断面図T1~T8(1/80)及び平面図T2・T7(1/80)、遺物出土状況図T3・T5(1/50).....	62
第44図	富崎千里古墳群9号墳 土層断面図T1・T2・T5~T9(1/80)及び遺物出土状況図T2・T9(1/50).....	63
第45図	富崎千里古墳群9号墳 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、主な遺物の出土位置(1/8).....	64-65
第46図	富崎千里古墳群9号墳 土層断面図T3・T4・T10(1/80)及び平面図T4(1/80)、遺物出土状況図T3・T4(1/50).....	66
第47図	富崎千里古墳群10号墳 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、主な遺物の出土位置(1/8).....	67
第48図	富崎千里古墳群10号墳 土層断面図T1~T4(1/80)及び遺物出土状況図T2(1/50).....	68

第49図	富崎千里古墳群12号墳推定地	調査概要図及びエレベーション図(1/200)	69
第50図	富崎千里古墳群12号墳推定地	土層断面図T1~T11(1/80)	70
第51図	富崎千里古墳群16号墳・17号墳	土層断面図T1~T5(1/80)及び遺物出土状況図T2(1/50)	71
第52図	富崎千里古墳群16号墳・18号墳	調査概要図及びエレベーション図(1/300)、 主な遺物の出土位置(1/8)	72~73
第53図	富崎千里古墳群18号墳	土層断面図T1~T6(1/80)及びT6SK01平面図(1/50)	74
第54図	富崎千里古墳群2号墳・6号墳・9号墳	出土遺物(1/3)	75
第55図	富崎千里古墳群10号墳・16号墳・18号墳	出土遺物(1/3)	76
第56図	千坊山遺跡概要図(1/2,500)		78
第57図	千坊山遺跡	出土遺物の一部(1/3)	79
第58図	千坊山遺跡	出土遺物の一部(1/3)	80
第59図	添ノ山古墳測量図(1/300)		81
第60図	富崎遺跡	出土遺物の一部(1/4)	81
第61図	王塚古墳及び勅使塚古墳測量・復元図(1/700)、勅使塚古墳の遺物実測図(1/8)		83
第62図	南部I遺跡	平成9年度調査 竪穴住居跡(1/140)	84
第63図	南部I遺跡	平成11年度調査 竪穴住居跡(1/100)	84
第64図	南部I遺跡	主な出土遺物(1/8)	84
第65図	南部I遺跡	主な出土遺物(1/8)	85
第66図	新町大塚古墳測量・復元図(1/180)		86
第67図	千坊山遺跡群における弥生時代終末期の遺跡分布図(1/20,000)		89
第68図	千坊山遺跡群における古墳時代初期の遺跡分布図(1/20,000)		91
第69図	〈参考〉県内の関連遺跡		93
第70図	器種分類図(1/6)		95
第71図	器種分類図(1/6)		96
第72図	遺跡別器種構成比率		98
第73図	形態別器種構成比率(壺口縁部)		99
第74図	遺跡別赤彩比率		100
第75図	台状部の形態		102
第76図	台状部の規模		102
第77図	台状部に対する突出部の規模		103
第78図	突出部の形態①(長さとの比率)		103
第79図	突出部の形態②(基部からの拉がり具合)		104
第80図	突出部の形態③(最大幅までの長さの比率)		104
第81図	四隅突出型墳丘墓の時期別分布(1)		105
第82図	四隅突出型墳丘墓の時期別分布(2)		106
第83図	羽根・新町・長沢・外輪野地区における千坊山遺跡群分布図(1/7,500)及び墳丘墓・古墳測量図(1/1,000)		114~115
第84図	富崎・千里丘陵における千坊山遺跡群分布図(1/7,500)及び墳丘墓・古墳測量図(1/1,000)		116~117

表 目 次

表1	周辺の遺跡一覧	1
表2	千坊山遺跡群調査一覧(H6~H13)	3
表3	福年対応の目安	4
表4	千坊山遺跡群の消長	87
表5	婦負丘陵における弥生時代後期~終末期のグループ別遺跡一覧	88
表6	婦負丘陵における古墳時代前期の遺跡一覧	92
表7	四隅突出型墳丘墓一覧	107
表8	四隅突出型墳丘墓一覧	108
表9	遺物観察表①	118
表10	遺物観察表②	119
表11	遺物観察表③	120
表12	遺物観察表④	121
表13	遺物観察表⑤	122
表14	遺物観察表⑥	123
表15	遺物観察表⑦	124
表16	遺物観察表⑧	125
表17	遺物観察表⑨	126

I 序 章

第1節 遺跡の立地と歴史的環境

本書で報告する千坊山遺跡群は、富山県中町に分布する弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡の総称である。

富山県は北陸の北東端に位置し、「日本書紀」に記された“越”のうち、後に越中に区分された地域である。北は日本海に面し、東南部には立山連峰が連なる。中央部には呉羽丘陵が南北に連なり、それを境として県東部と県西部に分かれる。呉羽丘陵の南方は、射水丘陵を経て標高987mの牛岳へと連なる。牛岳を水源とする山田川は、山谷を曲流して越中平野に流れ出して、井田川に合流する。井田川は越中平野の中央を流れ、県の三大河川である神通川へと注ぎ、やがて富山湾へと流れ出す。

越中町は県中央部に位置し、北端は県庁所在地の富山市と接する。地勢は、おおまかには西の丘陵部と東の平野部に二分される。丘陵部は、呉羽丘陵の南に連なり、丘陵裾部は一部が河岸段丘となる。平野部は、町城東端で北流する神通川とその支流の井田川によって形成された扇状地である。

呉羽丘陵から越中丘陵にかけては、旧石器時代から中近世に至るまでの数多くの遺跡が分布し、県内有数の遺跡密集地帯を形成している。千坊山遺跡群はその南端に位置し、富山湾から12km内陸に入った井田川・山田川合流域に集中して分布する。水田耕作や水運を利用しやすい環境であったものと思われる。本遺跡群に含まれる遺跡の立地は、弥生時代には集落が河岸段丘・丘陵上もしくは平野に、葛城が河岸段丘・丘陵上に位置し、古墳時代には集落が平野に、古墳が丘陵上に位置する。遺跡群内には、県東部最大規模の前方後方墳である国指定史跡の王塚古墳や県指定史跡の勅使塚古墳が含まれる。町内の前後する時代の遺跡には、弥生時代中期の千里C遺跡や、古墳時代後期から終末期の下邑東遺跡、砂子田I遺跡、中名VI遺跡などがある。なお、北接する富山市の呉羽丘陵上には、杉谷古墳群、杉谷A遺跡をはじめとした、本遺跡群と関連のある遺跡の存在が多数確認されている。

また、この一帯は、富山平野から砺波・飛騨に抜ける交通の要所として、中世には射水・婦負二郡の守護代である神保氏の重要拠点となり山城が多く築かれた地域でもある。

No.	遺跡名称	種 別	時 代	No.	遺跡名称	種 別	時 代	No.	遺跡名称	種 別	時 代
1	王塚古墳	前方後方墳	古墳	29	平岡遺跡	散石地	縄文	57	蓮花寺遺跡	寺院	中世
2	勅使塚古墳	前方後方墳	古墳	30	小長谷古墳群	古墳	縄文	58	外輪帯遺跡	集落	縄文・中世・近世
3	五ヶ塚古墳群	円墳	古墳	31	穴ノ高古墳群	散石地	縄文	59	岩手遺跡	集落	中世・近世
4	内野城	前方後方墳丘陵墓	弥生・古代・中世	32	小長谷I遺跡	散石地	縄文・古代・中世・近世	60	外北入遺跡	散石地	不明
5	六箇古塚	円墳	弥生・古代・中世	33	二木塚遺跡	散石地	縄文・中世?	61	外北北遺跡	散石地	不明
6	千坊山遺跡	弥生・古墳・縄文・飛騨	弥生・古墳・縄文・飛騨	34	二木塚II遺跡	散石地	縄文・古代・近世	62	外北西遺跡	散石地	縄文
7	鏡原古墳群	古墳	古墳	35	二木塚III遺跡	古墳	中世・近世	63	富崎西遺跡	散石地	縄文
8	越中町遺跡	集落	弥生・古墳・古代・中世・近世	36	新町I遺跡	散石地	古代	64	富崎南遺跡	集落	縄文・古代・中世
9	藤山遺跡	集落・山城	弥生・中世	37	下塚古墳化遺跡	散石地	縄文	65	上川川I遺跡	集落	弥生・古代・中世
10	富崎赤坂遺跡	集落	弥生	38	宮北北遺跡	散石地	不明	66	下塚山遺跡	散石地	不明
11	石崎城遺跡	集落・山城・四隅突出型集落	弥生・古墳・古代・中世	39	新町II遺跡	散石地	古代	67	下塚遺跡	山城	中世
12	富崎遺跡	集落・散石地	弥生・古代・中世・近世	40	新町大塚古墳	古墳	中世?	68	赤坂集落	山城	中世
13	宮崎千里古墳群	前方後方墳・方墳・円墳	古墳	41	新町II遺跡	集落	縄文・古代・中世・近世	69	森田山遺跡	山城	中世
14	南野I遺跡	集落	弥生・古墳・古代・中世・近世	42	新町北遺跡	穴穴	古墳?	70	千里片後遺跡	集落	不明
15	南野II遺跡	方型墳丘陵墓	弥生?	43	藤上遺跡	城址	中世	71	コダノ塚	その他	中世
16	安川城遺跡	山城	中世・近世	44	下邑遺跡	散石地	縄文・古代・中世・近世	72	下塚遺跡	散石地	不明
17	上野平津遺跡	平野	縄文・古代	45	春野中平遺跡	集落	縄文・古代・中世・近世	73	新飯田	山城	中世
18	砂子田遺跡	古墳	古墳	46	下邑東遺跡	集落	弥生・古代	74	藤原正遺跡	集落	中世
19	友和遺跡	集落・城址	縄文・古代・中世・近世	47	若狭後藤前遺跡	散石地	縄文・弥生?	75	小倉中月遺跡	集落	中世
20	砂子田I遺跡	散石地	不明	48	栗谷遺跡	城址	中世	76	小倉中月遺跡	集落	古代・中世・近世
21	砂子田II遺跡	散石地	不明	49	栗谷東遺跡	山城	中世	77	下塚山遺跡	山城	古代・中世・近世
22	砂子田III遺跡	散石地	縄文	50	栗谷西遺跡	山城	中世	78	千里I遺跡	散石地・集落?	古代・中世・近世
23	砂子田IV遺跡	散石地	縄文・古墳	51	藤原東遺跡	山城・その他	中世	79	千里西遺跡	散石地	古代・中世・近世
24	砂子田V遺跡	集落・散石地	縄文・古墳・古代	52	砂子田I遺跡	集落	縄文・古代・中世	80	千里北遺跡	集落・散石地	弥生・古代
25	砂子田VI遺跡	散石地	縄文	53	砂子田II遺跡	散石地	縄文	81	千里南遺跡	散石地	中世
26	人瀬I遺跡	散石地	不明	54	藤原西遺跡	散石地	中世	82	人瀬南遺跡	城址	中世
27	小長谷北遺跡	散石地?	不明	55	藤原東遺跡	集落	縄文	83	藤原北遺跡	城址	中世
28	小長谷II遺跡	集落	古代・中世(推定)	56	藤原西遺跡	集落	縄文・古代	84	山田南麓	山城	中世

表1 周辺の遺跡一覧



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/30,000)

第2節 調査に至る経緯と経過

第1項 調査に至る経緯

本遺跡群における一連の調査は、その名称の由来となった千坊山遺跡の調査に端を発する。平成6年度に実施した本遺跡の学術試掘調査では、県下有数の弥生時代終末期の集落が存在したことが判明した（Ⅱ第4節第1項参照）。遺跡北西には、県下最大級の前方後方墳である王塚古墳や勅使塚古墳が存在することからも、北陸の古墳出現期の様相を知る上で重要な地域であることが推測された。そのため、平成10年度より地域一帯の調査を実施し、千坊山遺跡を取り巻く歴史的環境を総体的に調べることとなった。

調査の結果、それまで殆ど把握されていなかった、この地域における当時の集落と墓地のあり方や社会の変遷が明らかになり、考えていた以上に特徴的な文化が存在したことが分かってきた。

第2項 調査の経過

千坊山遺跡群としての総体的な調査は、千坊山遺跡単体の4年間に渡る試掘調査が終了した翌年の平成10年度から着手した。まずは地域史に詳しい方々への聞き取り調査から開始し、それに基づく踏査を行った結果、墳丘墓・古墳である可能性のある高まりをいくつも確認した。同年に地形測量を行い、平成11・12年度には2年間に渡る試掘調査を実施した。平成6年度から平成13年度にかけての本遺跡群における調査の詳細は、表2の通りである。

調査年度	調査期間	遺跡名	調査種別	対象面積(m ²)	発掘面積(m ²)	調査内容	調査原因	参考文献	
平成6年度	4/22～12/22	千坊山遺跡	試掘調査	72,000	6,080	防牛溝南、中世前期遺跡を確認	遺跡発掘等研究助成金申請に係る学術調査	『千坊山遺跡(1)』1995	
平成7年度	10/1～11/26	千坊山遺跡	試掘調査	7,000	1,412	中世前期部を確認	遺跡の範囲確認調査	『千坊山遺跡(2)』1997	
平成8年度	11/28～12/26	千坊山遺跡	試掘調査	5,000	212	テラス状遺構の調査	縄文文化財緊急調査事業に係る学術調査	『千坊山遺跡(3)』1998	
平成9年度	11/11～11/28	千坊山遺跡	試掘調査	660	70	縄文遺物確認	縄文文化財緊急調査事業に係る学術調査	『千坊山遺跡(3)』1998	
	5/12～8/11	南部1遺跡	本調査	410	410	弥生集落を確認	個人使電施設	『富山県中町南部1遺跡発掘調査報告』1998	
平成10年度	8/29 9/7 11/20	六治古塚、内野塚 権田原古塚 五ツ塚古墳群 富崎寺富塚群 富崎寺古墳群	踏査	—	—	参加者 荒木清男氏、亀川正光氏、 久々忠義氏、西田知氏、 片岡真子、堀内大介	千坊山遺跡群に関する事業調査	本報告書	
	12/18～3/25	六治古塚 内野塚 富崎寺古墳群 (16-18号墳) 高塚墓群 (1-2・3号墓) 権田原墓群 (1-2号墓)	測量調査	—	—	墳丘墓・古墳の地形測量	縄文文化財緊急調査事業に係る学術調査	本報告書	
	12/2～12/14	蓮山遺跡	本調査	138	138	弥生1層南東部を確認	山土地理院工事	本報告書	
平成11年度	6月～10月	勅使塚古墳	文化財調査団 試掘調査	—	—	前方後方墳を確認	縄文文化財緊急調査事業に係る学術調査	富山県文化財調査団『勅使塚古墳発掘調査レポート』1999	
	7/12～8/20	六治古塚	試掘調査	1,383	145	四隅突出型墳丘墓を確認	縄文文化財緊急調査事業に係る学術調査	本報告書	
	11/10～12/4	3/16～3/22	内野塚	試掘調査	709	70 77	前方後方型墳丘墓を確認	縄文文化財緊急調査事業に係る学術調査	本報告書
	2/25～3/27	富崎寺古墳群 (6・9・10号墳)	測量調査	—	—	古墳の地形測量	縄文文化財緊急調査事業に係る学術調査	本報告書	
	6/12～7/28	南部1遺跡	本調査	637	637	弥生、古墳、古代、中世の集落を確認	県営はせ場整備事業	『富山県中町南部1遺跡発掘調査報告Ⅱ』2000	
平成12年度	6/1～3/17	富崎寺古墳群 (2・6・9・10・12・ 16-17・18号墳)	試掘調査	8,200	489	四隅突出型墳丘墓を確認	縄文文化財緊急調査事業に係る学術調査	本報告書	
平成13年度	9/25～3/30	富崎寺古墳群 (1・2・3号墓)	試掘調査	2,800	224	四隅突出型墳丘墓を確認	縄文文化財緊急調査事業に係る学術調査	本報告書	
	9/6～9/21	富崎寺古墳群	試掘調査	8,000	334	弥生集落を確認	縄文文化財緊急調査事業に係る学術調査	本報告書	
	12/14～3/31	富崎寺古墳群 (1・2号墓)	試掘調査	1,800	158	四隅突出型墳丘墓を確認	縄文文化財緊急調査事業に係る学術調査	本報告書	
	12/4～2/9	富崎寺古墳群 (2号墳)	測量調査	—	—	古墳の地形測量	縄文文化財緊急調査事業に係る学術調査	本報告書	
	2/15～3/27	五ツ塚古墳群	測量調査	—	—	古墳の地形測量	縄文文化財緊急調査事業に係る学術調査	本報告書	
	5/11～3/9	勅使塚古墳	本調査	3,250	2,600	弥生、古墳、古代、中世の集落を確認	国道309号線道路拡充改良工事	『富山県中町南部1遺跡発掘調査報告』2003発行予定	
平成13年度	5/30～3/8	勅使塚古墳	本調査	2,714	1,900	弥生、古墳、古代、中世の集落を確認	国道309号線道路拡充改良工事	『富山県中町南部1遺跡発掘調査報告』2003発行予定	

表2 千坊山遺跡群調査一覧(H6～H13)

II 調査概要

第1節 調査の方法

今回の調査は、千坊山遺跡群に含まれることが推測された遺跡において、年代や内容、性格、形態、遺存状況などを大まかに捉える為の地形測量及び試掘調査である。

調査対象遺跡は、六治古塚、向野塚、鏡板墳墓群（1・2号墓）、富崎墳墓群（1・2・3号墓）、富崎千里古墳群（2・6・9・10・12・16・17・18号墳）、富崎赤坂遺跡、五ツ塚古墳群の7遺跡（墳丘墓7基、古墳8基、集落1箇所）であり、五ツ塚古墳群は地形測量のみ、その他の遺跡は地形測量及び試掘調査を行なった。

調査では、はじめに最小限の立ち木の伐採を行った。試掘トレンチは、立ち木をなるべく避けながら必要最低限に設定し、掘削幅は1～2mを基本的として必要に応じて拡張した。また墳丘墓・古墳の調査では、サブトレンチを入れて土の堆積状況を確認しつつ作業を進めた。掘削作業の方法は、富崎赤坂遺跡のみ重機による機械掘削で、その他の遺跡は全て人力掘削で行った。

発掘総面積は、1,498㎡である。

第2節 遺跡の時期決定と土器編年

本遺跡群の年代決定の根拠となる土器編年については、石川県の土器様式を基礎として設定された北陸の土器編年に従う。他地域の土器編年との対応関係はおおよそ下表のように理解している。本遺跡群の年代は、北陸の土器編年という法仏式期、月影Ⅰ・Ⅱ式期、白江式期、古府クルビ式期、高島式期となる。なお、出土土器の器種分類と様相については、Ⅲ第2節に記載した。

	北陸土器様式	加賀編年・漆町田島(1986)	畿内大和編年 寺沢(1986)	山陰編年・青木遺跡(1978)	東海編年 赤塚(1990)
弥生後期前半	壺橋	漆町1群		青木Ⅱ	山中
弥生後期後半	法仏	漆町2群	Ⅵ-3	青木Ⅲ古	
弥生終末期	月影Ⅰ	漆町3群	庄内0	青木Ⅲ新	廻間Ⅰ
	月影Ⅱ	漆町4群	庄内1	青木Ⅳ	
古墳前期前半	白江	漆町5群	庄内2	青木Ⅴ・Ⅵ	廻間Ⅱ
		漆町6群	庄内3		
	古府クルビ	漆町7群	布留0	青木Ⅵ古	廻間Ⅲ
	高島	漆町8群	布留1		

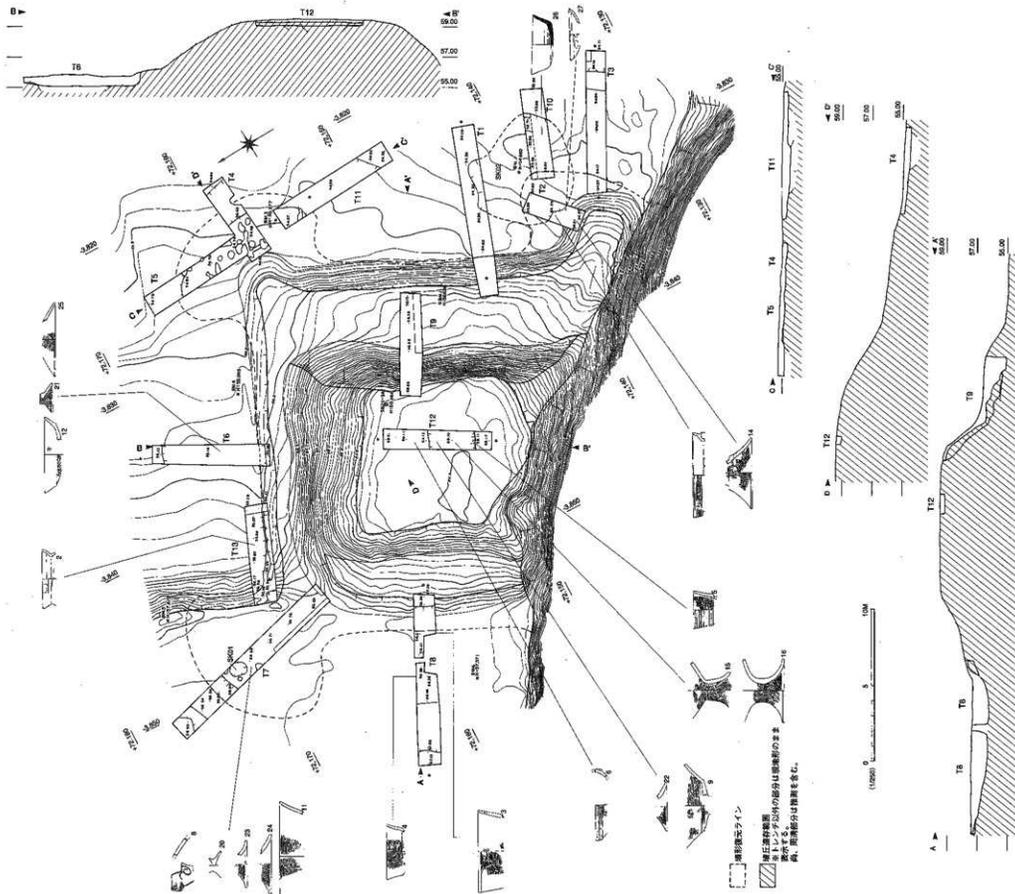
表3 編年対応の目安

第3節 調査結果

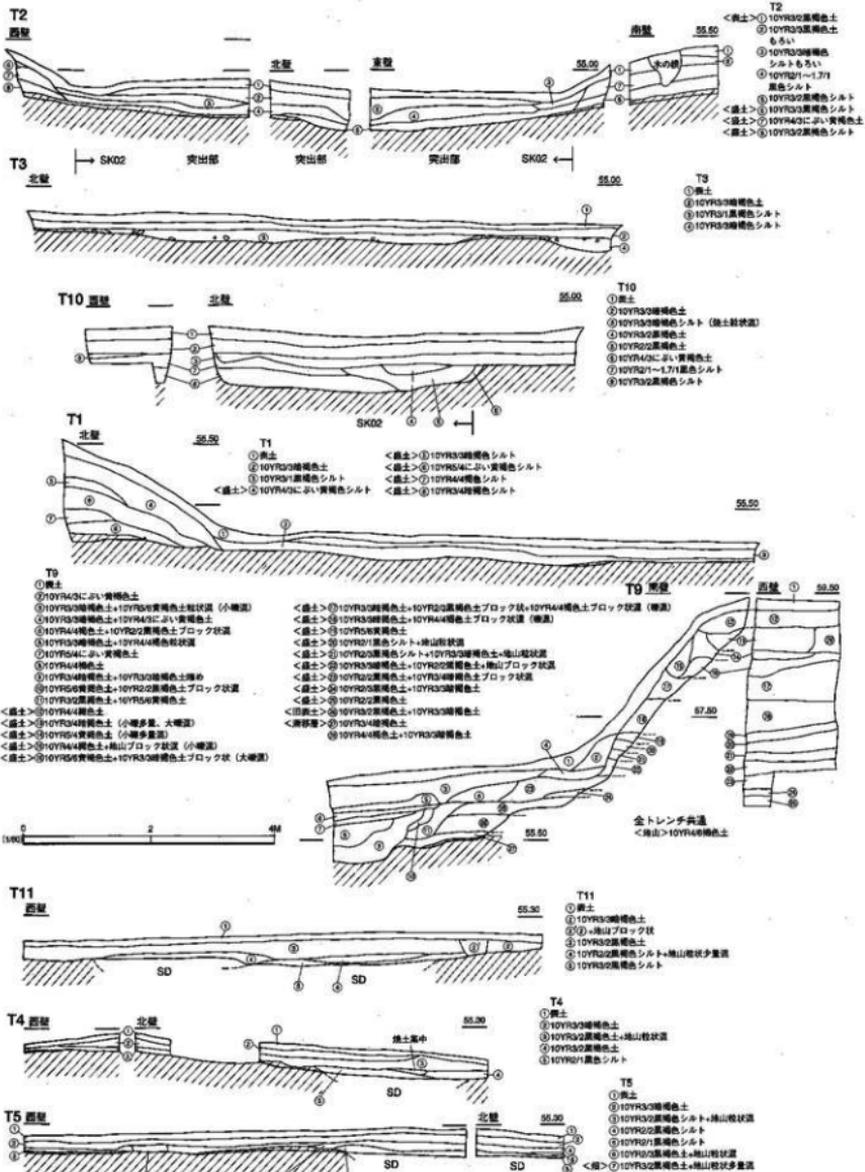
以下、調査の結果を遺跡ごとに記述する。なお、実測図を掲載した個々の遺物のデータについては巻末の観察表にまとめているので、それをご参照されたい。

第1項 ひろこみか 六治古塚 (第2図～第5図、観察表①)

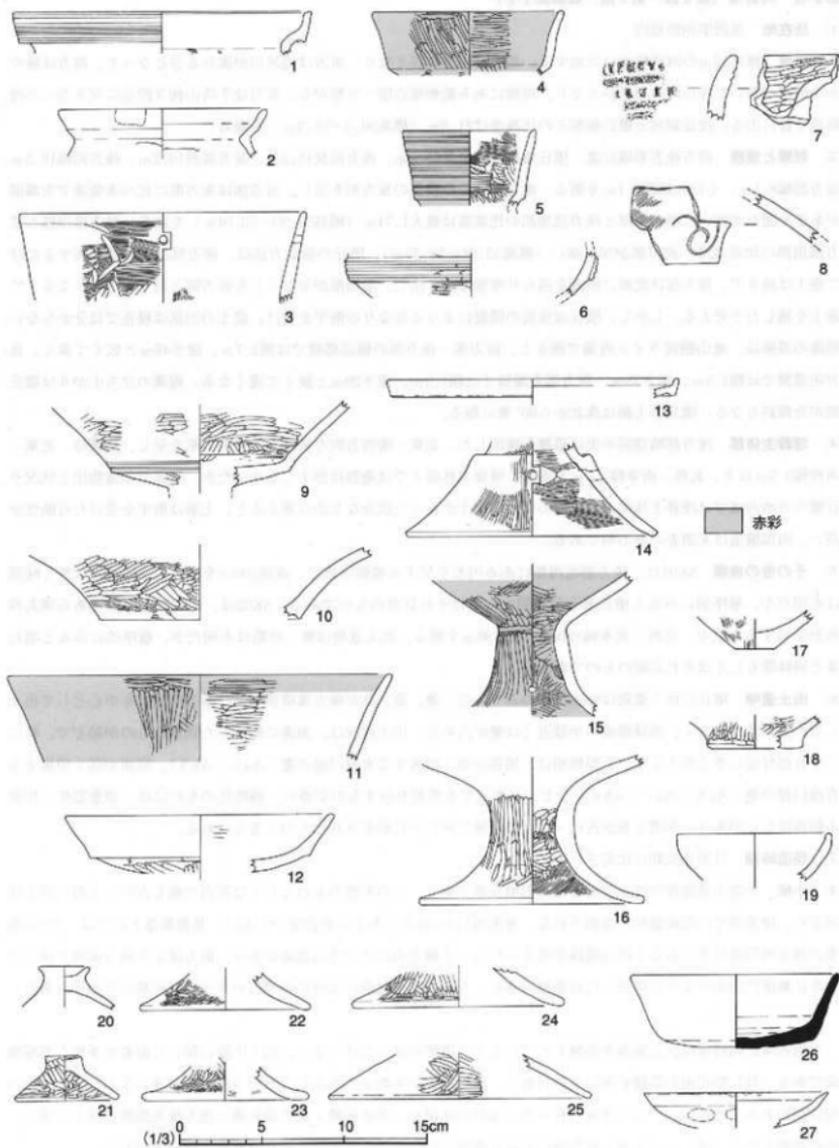
- (1) 所在地 長沢字向野地内
- (2) 立地 標高57mの河岸段丘南縁辺部に立地し、南方は谷となって辺呂川が流れ、東方は千坊山独立段丘に突き当たった後、扇状野に出る。北西方は、緩やかな斜面が続いた後丘陵の急傾斜となり、頂部にある勅使塚古墳へと繋がる。段丘裾部と墳丘裾部との比高差は24.2m (標高30.0～54.2m) を測る。
- (3) 形態と規模 四隅突出型墳丘墓。西南の崖側は土砂崩落の為消失している。墳丘は、北東・南西側辺部掘で一辺24.5mを測り、台状部はほぼ方形を呈すると推測される。突出部は、平均で長さ7.2m、最大幅(推定)10.6m、基部幅(推定)6.7mを測り、平面形が楕円形を呈する。墳丘裾部と頂部の比高差は最大5.1m (標高54.2～59.3m) を測り、墳頂部と遺存状況の良好な南突出部の比高差は約4.1m、南突出部と墳丘裾部の比高差は約1mを測る。台状部及び突出部の造成方法は、丘陵側を中心に周溝を巡らせ、平野側は地山を削り出し、盛土を施して整形する。台状部には最大3.8mの厚い盛土を施す。墳丘北西側斜面は頂部付近で傾斜が急になる特徴があるが、北東では傾斜の変化はなく、南東は後世の植林によって削平されて旧状は分からない。周溝の規模は、地山掘削ライン両端で測ると、側辺部側では最大幅10.5m、深さ110cmと広く深く、突出部側では最大幅4.1m、深さ30cmと狭く浅くなる。周溝の立ち上がりは墳丘間が急傾斜となる。墳丘の主軸は真北から24°東に振る。
- (4) 埋葬主体部 墳丘頂部中央に墓壇を検出した。向野塚を参考に推測すると、北東・南西方向を長軸とした長方形を呈し、主軸は真北から30°東に振るものと考えられる。確認した規模は、北東・南西幅2.9m、北西・南東幅1.3m以上である。内部構造は未調査の為不明である。墓壇上部には弥生土器(壺・高杯・器台・蓋)が集中して出土した。
- (5) その他の遺構 SK01は、北突出部上にある隅丸四角形を呈する土坑で、長軸115cm、短軸90cmを測る。出土遺物は無く時期は不明だが、墳丘墓築造以前のものか。SK02は、南突出部北東にある不定形の土坑で、南北幅7m、東西幅7m、深さ45cmを測る。覆土より須恵器杯が出土しており、古代に帰属するものと考えられる。
- (6) 出土遺物 墳丘に伴う遺物としては、弥生土器の壺、甕、高杯、器台、蓋が出土した。殆どが祭祀用の器種である。出土状況は、墳頂部埋葬主体部上部に集中するものや周溝に転落した状態のもの、他、周溝の外側斜面に出土するものがあった。土器様相は、X状に開く器台(受部C、脚部D)や屈曲が強く伸展する有段口縁の甕(Aa5)、屈曲が弱く伸展する有段口縁の甕(Ab6)、丸い胴部をもつ小型装飾壺(C1)など、月形式でも新形を示すものが多い。また図示し得なかったが、壺Ba1もある。特筆すべき土器には、甕で唐草のような文様を描いた器種不明の破片がある。おそらくは甕胴部破片で、文様は竜などを意味するか。他時代のものには、縄文土器、須恵器杯、中世土器器皿、珠洲焼甕などがあり、本墳丘墓が古代・中世の段階で何らかに転用されたものと考えられる。
- (7) 築造時期 月影Ⅱ式期に比定される。
- (8) 小結 土器の出土状況から、墳頂部での祭祀儀礼が推測される。極端に肥大化した突出部が特徴的であり、本遺跡跡にある大型の四隅突出型墳丘墓のなかでは、唯一突出部先端に周溝が巡るタイプである。基盤集落としては、北北東110m地点にある向野塚とともに、350m北東の独立河岸段丘上にある千坊山遺跡が考えられる。千坊山遺跡は、南西・北東突出部を結んだ方向にあり、北東突出部を集落に向けて築造した可能性がある。



第2図 六治古塚 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、主な遺物の出土位置(1/8)



第3図 六治古塚 土層断面図T1~T5・T9~T11 (1/80)



第5図 六治古塚 出土遺物(1/3)

第2項 向野塚(第6図～第9図、観察表①②)

(1) 所在地 長沢字向野地内

(2) 立地 標高52mの河岸段丘に立地する。北方は小さな谷となり、南方は辺呂川が流れる谷となって、西方は緩やかな斜面が続いた後丘陵の急傾斜となり、頂部にある動使塚古墳へと繋がる。東方は千坊山独立段丘に突き当たった後、越負平野に出る。段丘裾部と墳丘裾部との比高差は21.3m(標高30.0～51.3m)を測る。

(3) 形態と規模 前方後方形墳丘墓。墳丘規模は、全長25.2m、後方部長15.2m、前方部長10.2m、後方部幅16.5m、前方部幅8.1m、くびれ部幅5.1mを測る。後方部はやや横長の長方形を呈し、前方部は後方部に比べ未発達で先端部があまり開かず細い。墳丘裾部と後方部頂部の比高差は最大1.74m(標高51.30～53.04m)を測る。後方部頂部と前方部頂部の比高差は、前方部が26cm高い(標高53.04～53.30m)。墳丘の造成方法は、前方部は周溝で区画するだけで盛土は施さず、後方部は北側に周溝を巡らせ南側は削り出し、墳頂部が少なくとも前方部と同じレベルになるまで盛土を施したと考える。しかし、墳丘は後世の開墾によってかなりの削平を受け、盛土の旧状は現在では分からない。周溝の規模は、地山掘削ライン両端で測ると、前方部・後方部の側辺部側では幅3.7m、深さ48cmと広く深く、後方先端側では幅1.5m、深さ35cm、前方部先端側では幅1.3m、深さ20cmと狭くて浅くなる。周溝の立ち上がりは墳丘側が急傾斜となる。墳丘の主軸は真北から60°東に振る。

(4) 埋葬主体部 後方部墳頂部中央に墓壇を検出した。北東・南西方向を長軸とした長方形を呈し、規模は、北東・南西幅3.5m以上、北西・南東幅1.7mを測る。埋葬主体部上では遺物は出土しなかったが、裾部での遺物出土状況や、近隣の六治古塚では埋葬主体部上に土器の集中的出土があった状況などから考えると、上層は削平を受けた可能性が高い。内部構造は未調査の為不明である。

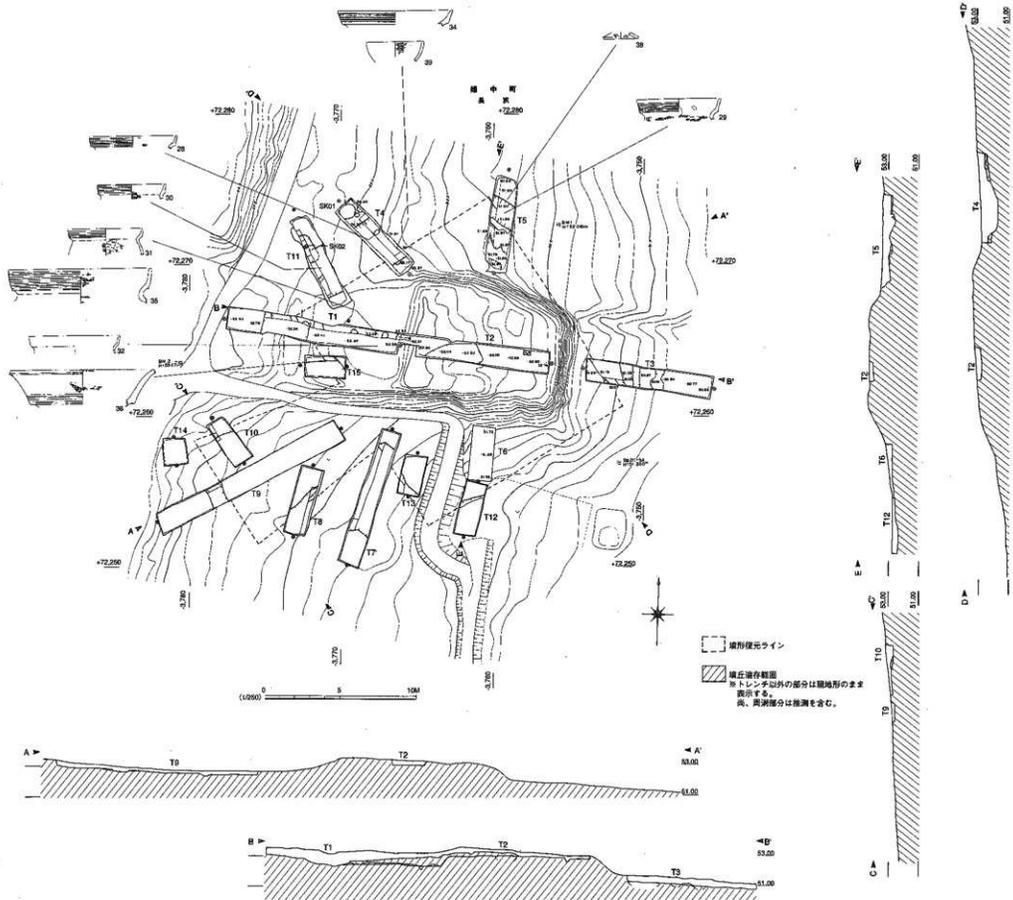
(5) その他の遺構 SK01は、後方部北西側にある円形を呈する焼土層で、直径100cmを測る。出土遺物は無く時期は不明だが、層序的にみると墳丘墓と同時期もしくはそれ以前のものである。SK02は、後方部北西側にある隅丸四角形を呈する土坑で、北西・南東幅190cm、深さ30cmを測る。出土遺物は無く時期は不明だが、層序的にみると墳丘墓と同時期もしくはそれ以前のものである。

(6) 出土遺物 墳丘に伴う遺物は弥生土器のみで、壺、甕、甕、鉢が後方部墳頂部及び後方部裾部を中心として出土した。出土量は少なく、器種構成の半数近くは甕が占める。出土状況は、周溝に転落した状態のものが殆どで、特にくびれ部付近に多く出土する。土器様相は、屈曲が強く伸展する有段口縁の甕(Aa5・Ab5)、屈曲が弱く伸展する有段口縁の甕(Aa6・Aa7・Ab6)など、月形式でも新相を示すものが多い。他時代のものには、須恵器杯、中世土師器皿などがあり、本墳丘墓が古代・中世の段階で何らかに転用されたものと考えられる。

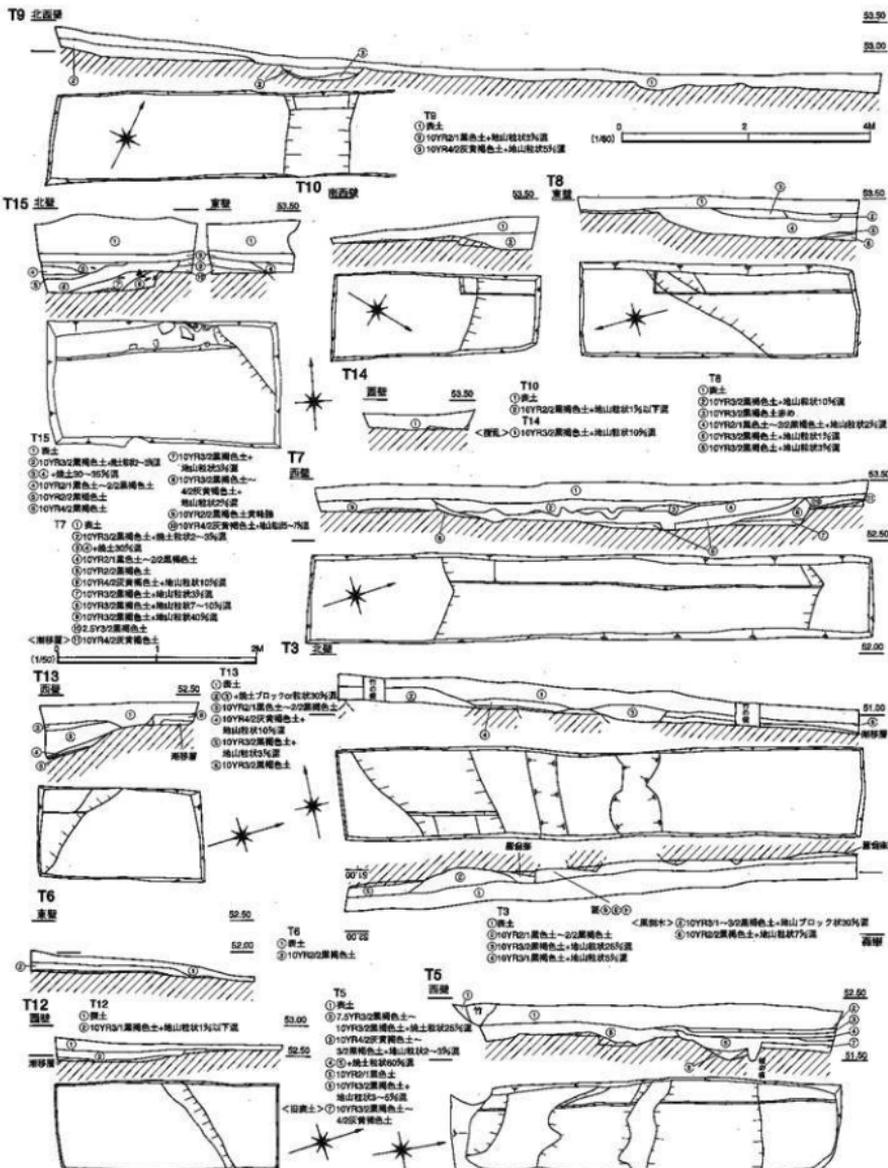
(7) 築造時期 月影Ⅱ式期に比定される。

(8) 小結 千坊山遺跡群で唯一の前方後方形墳丘墓であり、この形態のものとしては県内で最も古い。土器の出土状況から、墳頂部での祭祀儀礼が推測される。南南西110m地点にある六治古塚とともに、基盤集落としては、270m北東の独立河岸段丘上にある千坊山遺跡が考えられる。主軸方向には千坊山遺跡があり、前方部から後方部側を挿したときに集落に向かうように築造した可能性もある。なお、すぐ北西には台状の地形があり、墳丘墓の可能性もある。

六治古塚と向野塚は同じ集落を基盤としているが、墳形の違いだけでなく、出土土器に関して前者が多様な器種構成である(特に祭祀用の器種が多い)のに対し、後者は甕が半数を占めるといった土器様相の違いなど、いくつかの相違点がある。しかし、一方で周溝の在り方(傾斜の状況や、突出部側・前方部先端と後方部先端側が狭くて浅く、側辺部側が広くて深い)や主軸・対角線の方向を集落方向に向けるなどの共通点もあり、継続性がある。

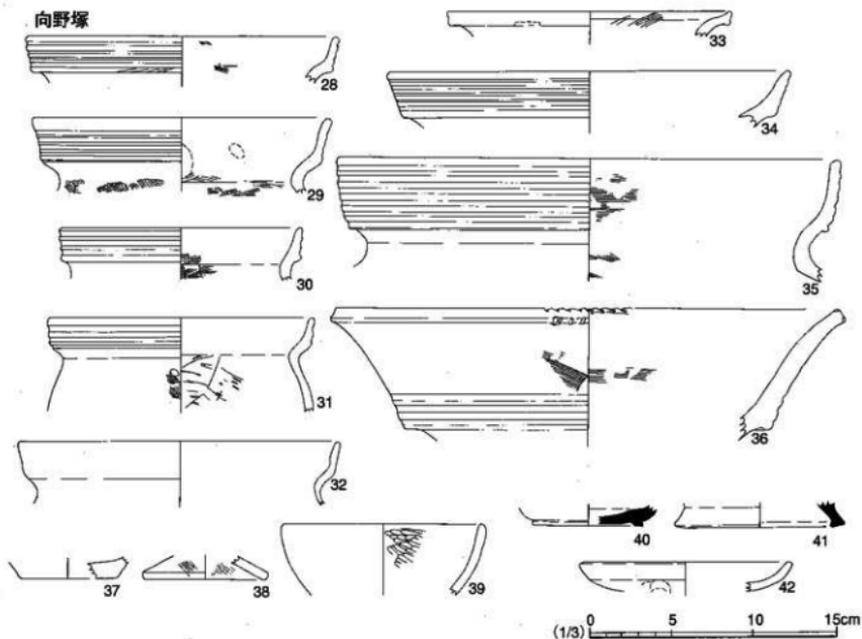


第6図 向野塚 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、主な遺物の出土位置(1/8)

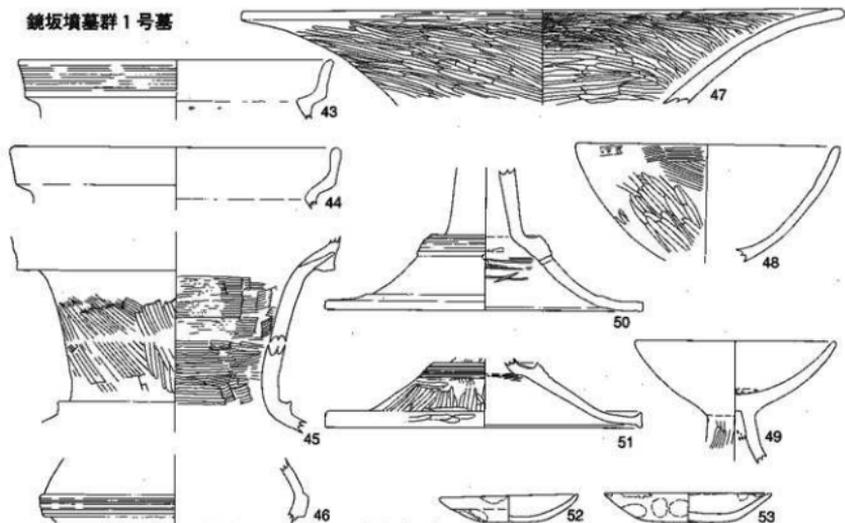


第8図 向野塚 土層断面図T3-T5~T10-T12~T15 (1/80) 及び平面図T3-T5-T7~T10-T12-T13 (1/80)、遺物出土状況図T15 (1/50)

向野塚



鏡坂墳墓群1号墓



第9図 向野塚・鏡坂墳墓群1号墓 出土遺物(1/3)

第3項 鏡板墳墓群

本墳墓群は、2基の四隅突出型墳丘墓で構成される。以下、それぞれに記述する。

1号墓（第9図、第13図～第15図、観察表②）

(1) 所在地 長沢字山ノ下地内

(2) 立地 標高63mの山田川左岸河段丘南縁部に立地する。北方は辺呂川が流れる谷となり、前述の六治古塚・向野塚が対岸にある。北西方は、緩やかな斜面が続いた後、谷を挟んで丘陵の急傾斜となり、頂部にある勅使塚古墳へと繋がる。東方には婦負平野が広がる。段丘裾部と墳丘裾部との比高差は27.6m（標高33.9～61.5m）を測る。

(3) 形態と規模 四隅突出型墳丘墓。崖側は土砂崩落及び神社造成の為消失している。墳丘は、南北側面裾で一辺24.1mを測り、台状部はほぼ方形を呈すると推測される。突出部は、周溝を四隅のみ掘り残すことによって形成されており、長さ4m以上、最大幅(上場)12m程度、基部幅7.0mを測る。墳丘裾部と頂部の比高差は最大4.8m（標高61.5～66.3m）を測り、墳頂部と南西突出部の比高差は約3.6m、南西突出部と墳丘裾部の比高差は約1.2mを測る。造成方法は、周溝を側面部だけに掘削し、台状部に盛土を施して整形する。側面部の周溝の規模は、地山掘削ライン両端で最大幅8m、深さ155cmを測る。周溝の立ち上がりは墳丘側の方が急傾斜となる。墳丘の主軸は真北から7°東に振る。

(4) 埋葬主体部 未調査の為不明である。

(5) 出土遺物 おもな遺物は弥生土器で、墳丘裾部に転落した状態で出土した。器種は、壺、甕、高杯、器台、鉢がある。土器様相は、屈曲が強く伸展する有段口縁の甕（Aa5・Ab5）や高杯・器台の棒状有段脚（脚部A）の他、屈曲する胴部の突帯に棒状浮文を施す小型裝飾壺（C1）など、月形式でも古相を示すものである。また、図示し得なかったが、壺A2もある。他時代のものには、墳丘北端から中世土師器皿が3個体出土しており、本墳丘墓が中世の段階で何らかに転用されたものと考えられる。

(6) 築造時期 月影I式期に比定される。

(7) 小結 土器の出土状況から、墳頂部での祭祀儀礼が推測される。本遺跡群のなかでは、1号墓より築造時期がやや古い富崎墳墓群3号墓とともに四隅を掘り残すタイプの四隅突出型墳丘墓であり、側面部に幅広い溝を掘り、突出部が肥大した状態になるように掘り残すのが特徴である。北東150m地点にある2号墓とともに、基盤集落としては、350m北東の平野にある鍛冶町遺跡が考えられる。鍛冶町遺跡は、南西・北東突出部を結んだ方角にあり、北東突出部を集落に向けて築造した可能性がある。

2号墓（第10図～第12図、第17図、観察表②）

(1) 所在地 外輪野字鏡板地内

(2) 立地 標高57mの山田川北側河段丘南縁部に立地する。北西方は緩やかな斜面が続いた後、谷を挟んで丘陵の急傾斜となり、頂部にある勅使塚古墳へと繋がる。東方には婦負平野が広がる。段丘裾部と墳丘裾部との比高差は22.9m（標高33.5～56.4m）を測る。

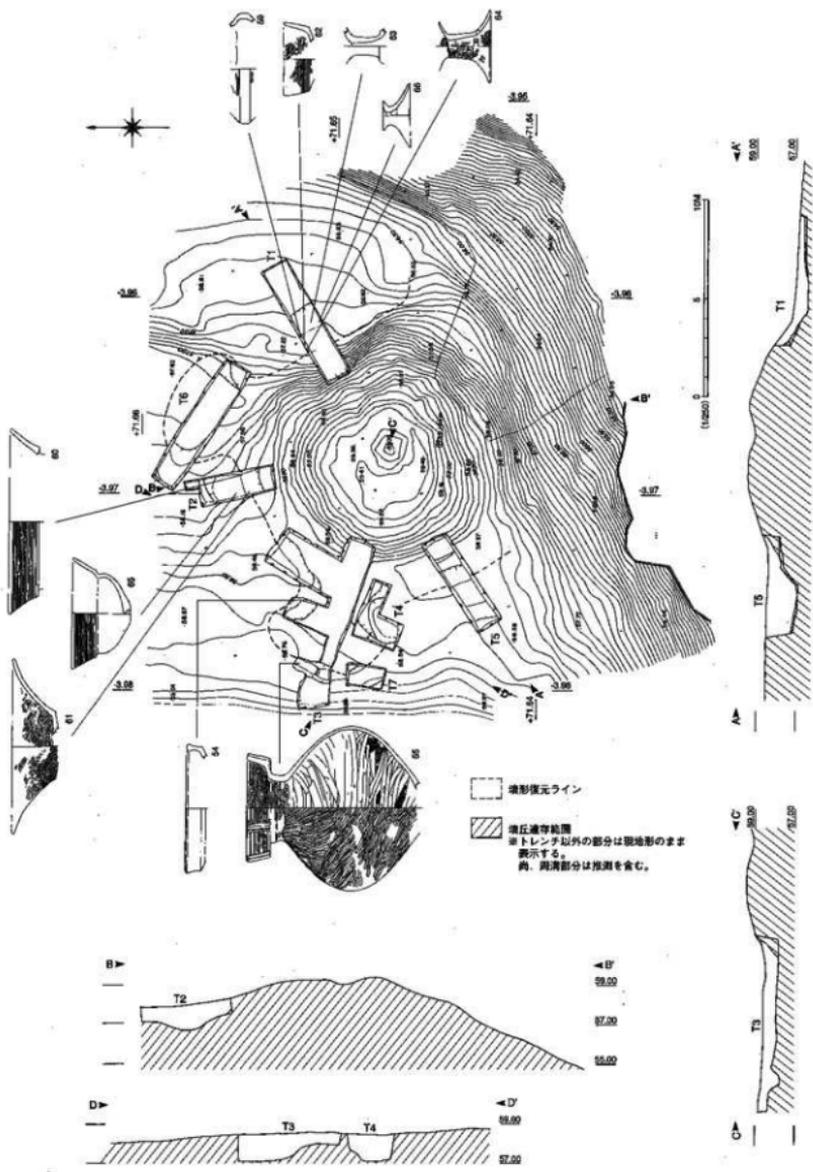
(3) 形態と規模 四隅突出型墳丘墓。崖側は土砂崩落の為消失している。墳丘は、北東・南西側面裾で一辺13.7mを測り、台状部はほぼ方形を呈すると推測される。突出部は、平均で長さ3.75m、最大幅6m、基部幅4.1mを測り、平面形が楕円形を呈する。墳丘裾部と頂部の比高差は最大3m（標高56.4～59.4m）を測り、墳頂部と突出部の比高差は1.25m、突出部と墳丘裾部の比高差は1.75mを測る。造成方法は、四隅を掘り残す1号墓とは異なり、周溝を全周させて、台状部に盛土を施すものである。突出部の盛土の有無は不明である。周溝の規模は、地山掘削ライン両端で測ると、平均で側面部側で最大幅4.4m、深さ93cmと広くて深く、突出部側では最大幅1.3m、深さ50cmと狭くて浅くなる。周溝の立ち上がりは墳丘側の方が急傾斜となる。墳丘の主軸は真北から62°東に振る。

- (4) 埋葬主体部 未調査の為不明である。
- (5) 出土遺物 おもな遺物は弥生土器で、殆どは墳丘裾部の周溝に転落した状態で出土した。器種は、壺、高杯、器台、鉢、甕がある。土器様相は、擬凹線を施す有段口縁の器台受部(B1)や棒状有段の器台脚部(脚部A)の他、屈曲する胴部をもつ小型裝飾壺(C1)、摘みに孔を穿つ蓋(A)など、月影式でも古相を示すものである。また、図示し得なかったが、高杯受部Dや壺Fもある。特筆すべきものには、西突出部先端の周溝底部に押しつぶされたような状態で一括出土した壺(55)がある。これは、有段口縁の外面に凹線文を施し、2本組の棒状浮文を6箇所に貼付けるもので、東海系の壺が在地化したものと思われる。完形に近いものであるが底部は無く、故意に打ち欠いた可能性もある。また、図示し得なかったが、肩の張る体部から短い口縁部が直立する壺Eもあった。
- (6) 築造時期 月影I式期に比定される。
- (7) 小結 千坊山遺跡群のなかでは最も小さい四隅突出型墳丘墓である。土器の出土状況から、墳頂部での祭祀儀礼の他、周溝での祭祀が推測される。また、極端に肥大化した突出部が特徴的である。基盤集落としては、南西150m地点にある1号墓とともに、25m東方の平野にある鍛冶町遺跡が考えられる。鍛冶町遺跡は、西・東突出部を結んだ方角にあり、東突出部を集落に向けて築造した可能性がある。

鏡坂墳墓群の2基の四隅突出型墳丘墓は同じ集落を基盤としているが、突出部の形成方法とそれに伴う周溝の巡り方に違いがある他、規模も全く異なる。その一方で、周溝の立ち上がりの傾斜状況や、対角線を集落方向に向けることなどの共通点がある。

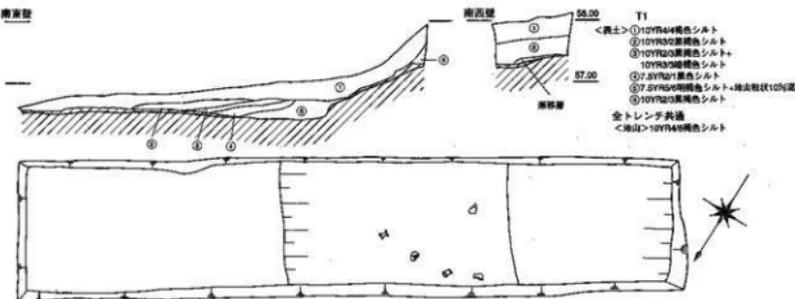
第4項 五ツ塚古墳群(第16図)

- (1) 所在地 羽根字下平地内
- (2) 立地 標高127mの丘陵尾根上に立地する。同じ丘陵尾根上の北東約150mには動使塚古墳があり、南方は谷を挟んで外輪野の河岸段丘となる。東方は河岸段丘となった後、棚負平野が広がる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は約96.5m(標高30.0~126.5m)を測る。
- (3) 形態と規模 北東・南西約137mの間に、円墳と推測される古墳が5基並んで築造される。墳丘規模は、現状で、1号墳が東西軸17m、南北軸17m、高さ3.2m、2号墳が東西軸15m、南北軸13m、高さ2.7m、3号墳が東西軸19m、南北軸19m、高さ3m、4号墳が東西軸17m、南北軸16m、高さ3.3m、5号墳が東西軸22m、南北軸18m、高さ4.5mを測り、全てに周溝状の窪んだ地形が認められる。崖側は土砂崩落により削平されており、現状では平面形が東西に長い不整形を呈するように見える。円墳として復元した場合、1号墳が直径17m、2号墳が直径15m、3号墳が直径20m、4号墳が直径17m、5号墳が直径22mの規模と推測する。
- (4) 埋葬主体部・出土遺物・築造時期 未調査の為不明。
- (5) 小結 千坊山遺跡群で、唯一円墳だけで構成されることが推測される古墳群である。ただし発掘調査は実施していない為、詳細は不明である。なお、同じく円墳である富崎千里古墳群10号墳は直径20m、高さ4.3mを測り、本古墳群の3号墳や5号墳の規模と類似する。

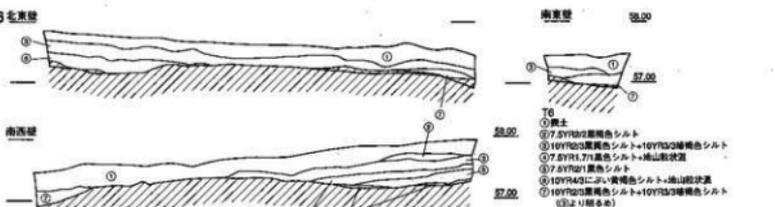


第10図 鏡板墳基群2号基 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、主な遺物の出土位置(1/8)

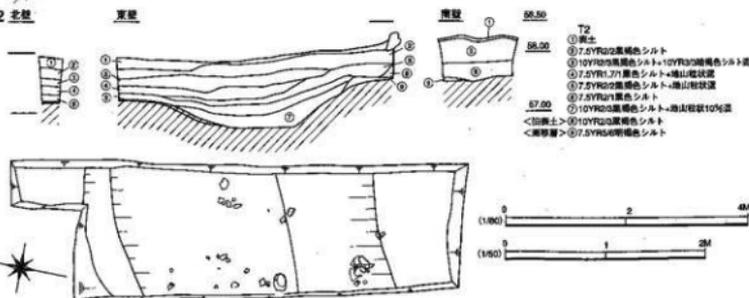
T1 南東壁



T6 北東壁



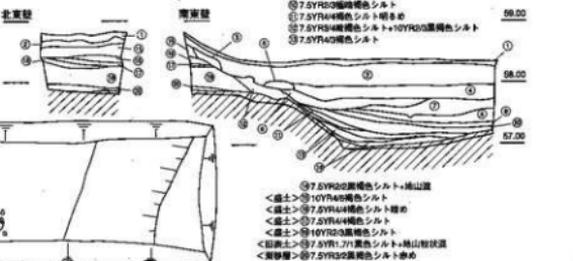
T2 北壁



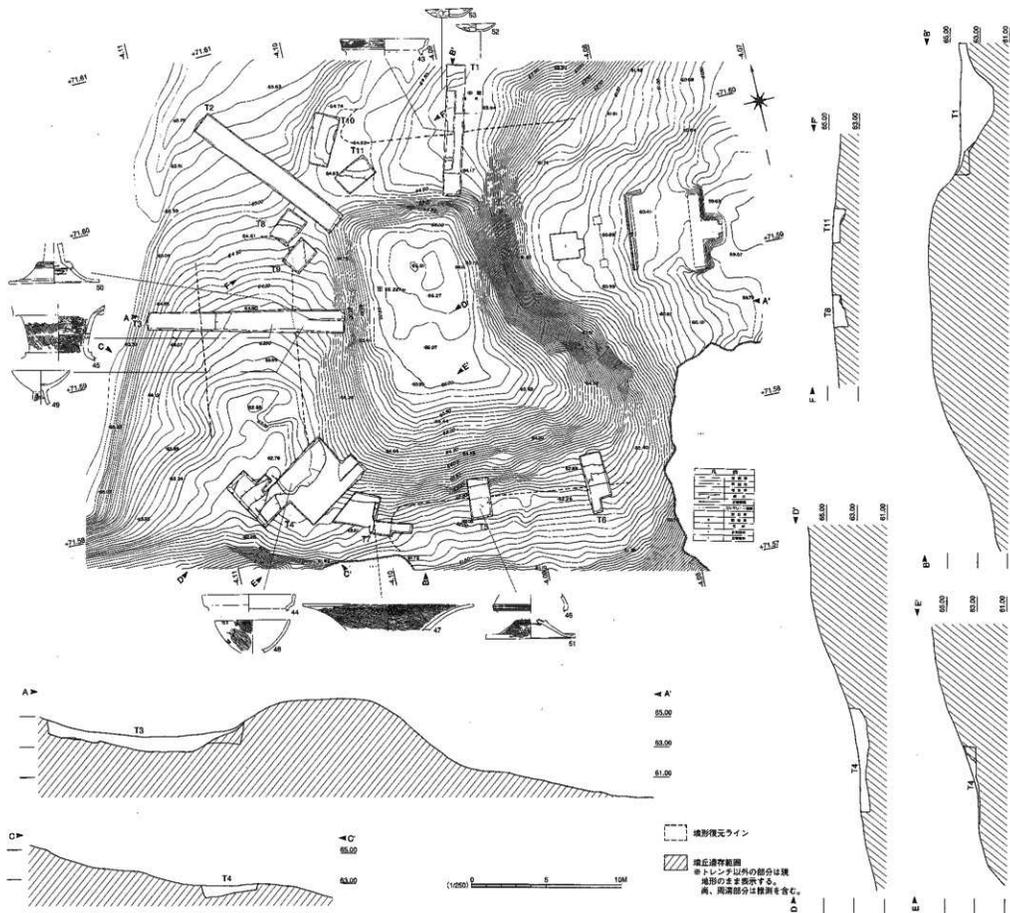
T5

- ① 盛土
- ② 10YR4/4褐色シルト層
- ③ 10YR2/3暗褐色シルト
- ④ 10YR2/3暗褐色シルト
- ⑤ 10YR2/3暗褐色シルト層
- ⑥ 7.5YR2/3暗褐色シルト
- ⑦ 10YR2/3暗褐色シルト層
- ⑧ 10YR2/1黒色シルト

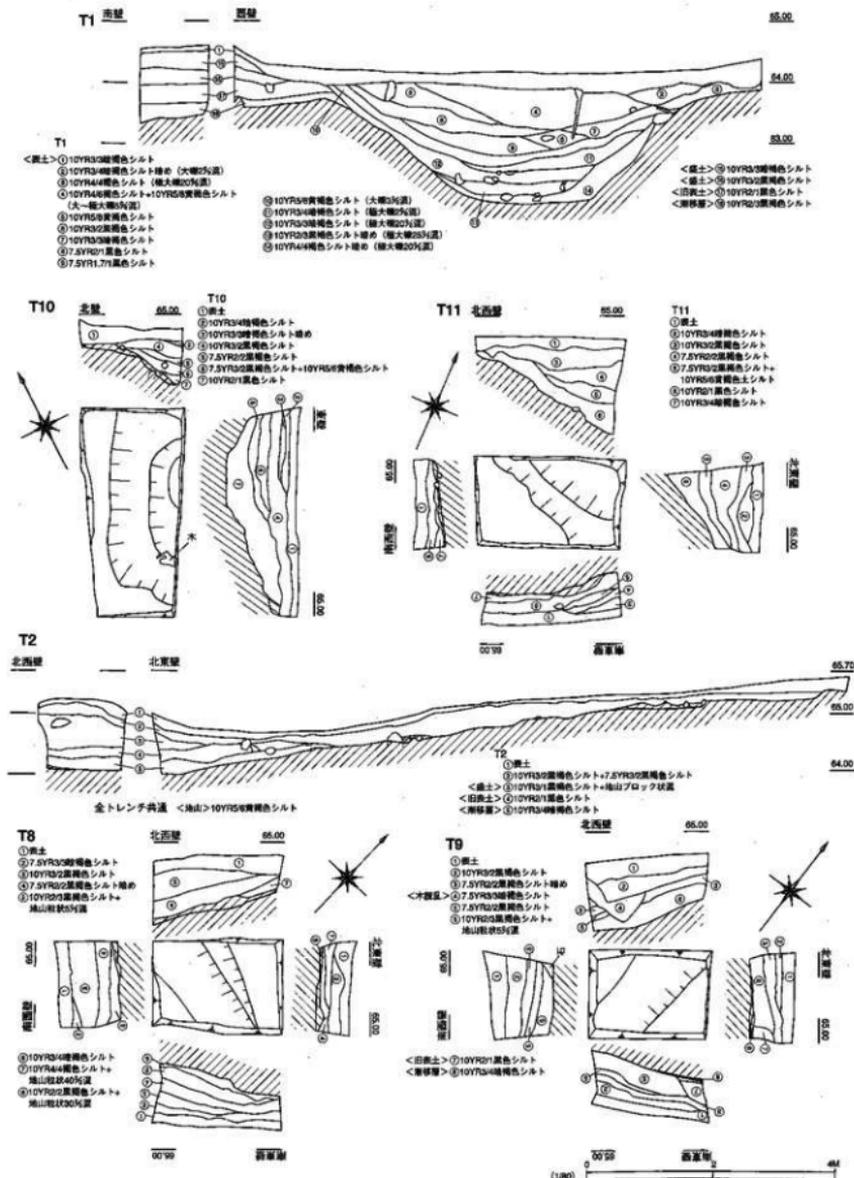
T5 北東壁



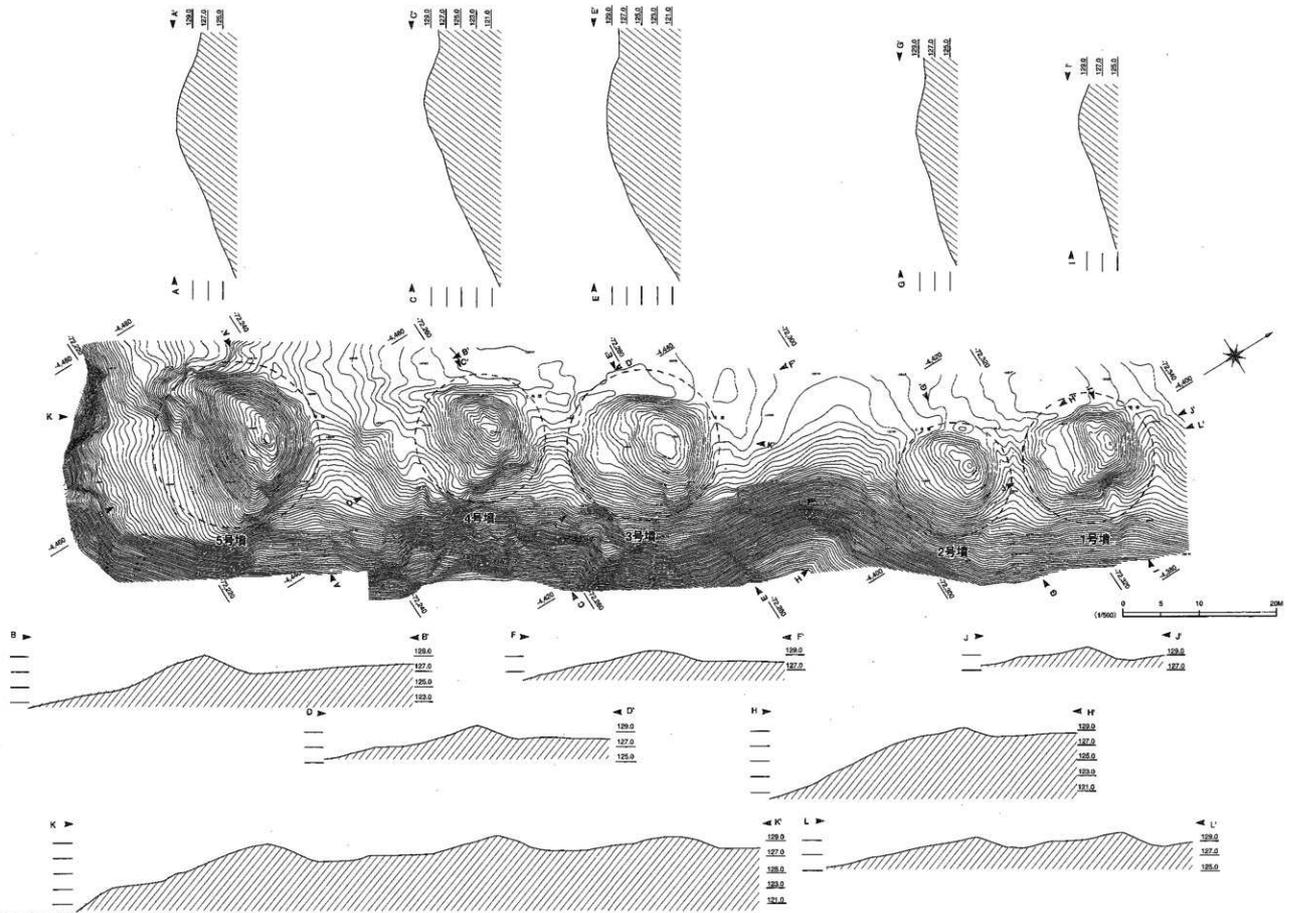
第11図 鏡坂墳墓群2号墓 土層断面図T1・T2・T5・T6 (1/80) 及び遺物出土状況図T1・T2・T5 (1/50)



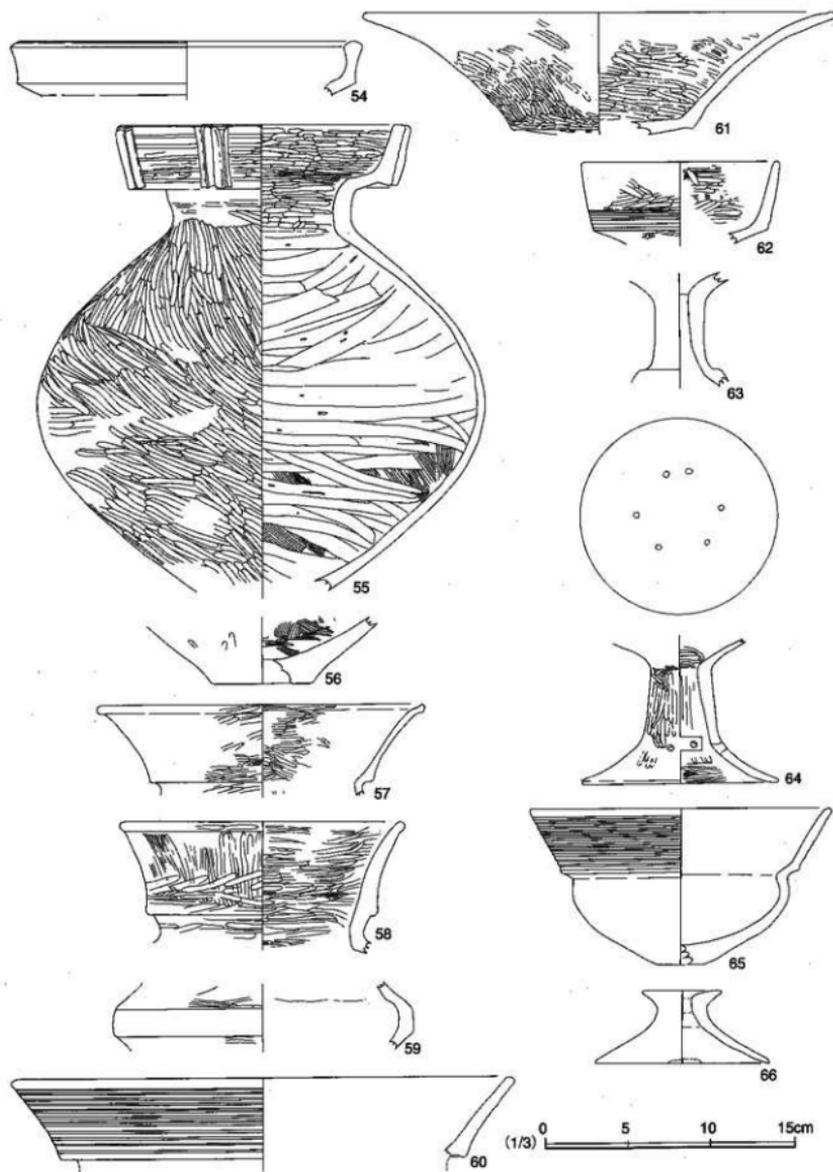
第13図 鏡坂墳墓群1号墓 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、主な遺物の出土位置(1/8)



第14図 鏡坂墳墓群1号墓 土層断面図T1・T2・T8～T11 (1/80) 及び平面図T8～T11 (1/80)



第16図 五ツ塚古墳群 調査概要図及びエレベーション図(1/500)



第17图 鏡板墳墓群2号墓 出土遺物(1/3)

第5項 富崎墳墓群

本墳墓群は、3基の四隅突出型墳墓で構成される。1・2号墓と3号墓は、小さな谷を挟んで形成される。現在は遺跡範囲の殆どが富山県畜産試験場・県営肉牛センター丘の夢牧場の敷地内にある。以下、それぞれに記述する。

1号墓 (第18図、第19図)

(1) 所在地 富崎字館ノ内地内

(2) 立地 標高70mの山田川右岸、富崎丘陵北東縁辺部に立地する。北方が谷となり、東方には緩負平野が広がる。南西方は、緩やかな傾斜となり尾根へと繋がる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は38.4m (標高31.3~69.7m) を測る。

(3) 形態と規模 四隅突出型墳墓。以下、今回の調査と平成元年度に実施した試掘調査の結果を合わせて考える。台状部は、側面裾部で一辺約21.7mを測る方形を呈する。突出部は、長さ約6m、最大幅約9m、基部幅約6mを測り、平面形が楕円形を呈する。墳丘裾部と頂部の比高差は最大3m (標高69.7~72.7m) を測り、墳頂部と突出部の比高差は2m、突出部と墳丘裾部の比高差は1mを測る。造成方法は、周溝を全周させ台状部に盛土を施して整形する。突出部の盛土の有無は不明。周溝の規模は、突出部側で最大幅約1.5m、深さ約22cmと狭くて浅く、側面側は最大幅7.5m、深さ110cmと広い。周溝の立ち上がりは墳丘側が急傾斜となる。墳丘の主軸は真北から8°東に振る。

(4) 埋葬主体部 未調査の為不明である。

(5) 出土遺物 墳丘に伴う遺物は現在のところ確認されていないが、牧場造成の際、1・2号墓周辺から壺・甕・高杯・器台が採集されている (2号墓7参照)。

(6) 築造時期 周辺で採集された遺物から推測すると、法仏式~月影Ⅱ式期か。

(7) 小結 極端に肥大化した突出部が特徴的であり、本遺跡群の四隅突出型墳墓のなかでは隣接する2号墓とともに中型タイプである。基盤集落としては、2号墓と南東150m地点にある3号墓とともに、380m東の平野にある富崎遺跡、もしくは580m南西の富崎丘陵尾根上にある富崎赤坂遺跡・離山岩遺跡が考えられる。

2号墓 (第18図~第20図)

(1) 所在地 富崎字館ノ内地内

(2) 立地 標高70mの山田川右岸、富崎丘陵北東縁辺部に立地し、北方が谷となり東方に緩負平野が広がる。南西方は、緩やかな傾斜となり、丘陵北西縁辺部尾根にある富崎赤坂遺跡・離山岩遺跡へと繋がる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は37.2m (標高31.3~68.5m) を測る。

(3) 形態と規模 四隅突出型墳墓。崖側は土砂崩落、東側は牧場造営の為に削平されている。墳丘は、南北側面裾部で15m以上、東西側面裾部で17m以上を測り、1号墓から判断すると台状部はほぼ方形を呈すると推測される。唯一遺存している南西突出部は、長さ6.3m、最大幅9.5m、基部幅6mを測り、平面形が楕円形を呈する。墳丘裾部と頂部の比高差は最大2.8m (標高68.5~71.3m) を測り、墳頂部と突出部の比高差は1.1m、突出部と墳丘裾部の比高差は1.7mを測る。造成方法は、周溝を全周させ、台状部に盛土を施して整形する。突出部の盛土の有無は不明である。周溝の規模は、地山掘削ライン両端で測ると、突出部側で最大幅2m、深さ22cmと狭くて浅く、側面側は平成元年度調査で最大幅6m、深さ150cmと広くて深いことが分かっている。周溝の立ち上がりは墳丘側が急傾斜となる。墳丘の主軸は真北から4°東に振る。

(4) 埋葬主体部 未調査の為不明である。

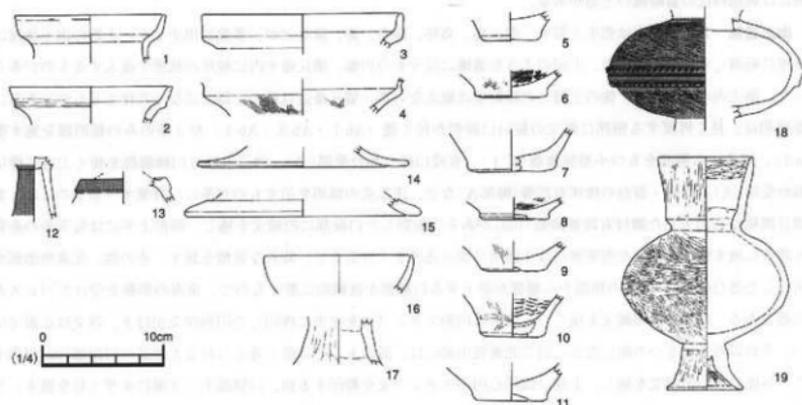
(5) 出土遺物 出土遺物は殆ど無く、器形が分かるものは平成元年度調査で周溝から出土した器台脚部のみである。

(6) 築造時期 法仏式~月影Ⅰ式期に比定される。

(7) 小結 極端に肥大化した突出部が特徴的であり、本遺跡群の四隅突出型墳墓のなかでは隣接する1号墓とともに

に中型タイプである。基盤集落としては、1号墓と南東150m地点にある3号墓とともに、380m東の平野にある富崎遺跡、もしくは580m南西の富崎丘陵尾根上にある富崎赤坂遺跡・雄山岩遺跡が考えられる。

なお、牧場造成工事の際、工事関係者によって1・2号墓周辺で採集された不時発見の遺物に、小型台付裝飾壺2個体がある(下図18、19)。詳細な出土地点は不明であるが、当地の弥生時代後期から終末期に特徴的な祭祀土器であり、遺存状態の良いものとして貴重である。また、その他の採集遺物としては、甕、壺、高杯、器台(下図1~17)などもある。これらの採集遺物から、周辺には、後述する富崎3号墓(法仏式期)よりやや新しい時代(月影I・II式期)の墳丘墓の存在が推定できる。



第18図 富崎1・2号墓周辺における採集土器(1/4)

岡本淳一郎1991「姉中町富崎地内採集の遺物」『大境』第13号 富山考古学会より転載

3号墓(第21図～第30図、観察表②～⑤)

- (1) 所在地 富崎字北平・家ノ高地内
- (2) 立地 標高67.50mの山田川右岸、富崎丘陵北東端から北に派生する小支脈の瘦尾根基部に立地する。西方と北方が谷となり、東方には緑負平野が広がる。南西方は、緩やかな傾斜となり、富崎丘陵尾根へと伸びる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は36.1m(標高30.0～66.1m)を測る。
- (3) 形態と規模 四隅突出型墳丘墓。北西・北東の崖側は土砂崩落の為、突出部の一部が消失している。墳丘は、規模が南北側辺部裾で22.0m、東西側辺部裾で21.0mを測り、台状部はほぼ方形を呈する。突出部は、周溝を四隅のみ掘り残すことによって形成されており、平均で、長さ4m以上、最大幅(上場)12m程度、基部幅6.2mを測る。墳丘裾部と頂部の比高差は最大3.9m(標高66.1～70.0m)を測り、墳頂部と突出部の比高差は約2.5m、突出部と墳丘裾部の比高差は約1.4mを測る。造成方法は、周囲を広く削り出し、北・南側では更に周溝を巡らせ、台状部に盛土を施して整形する。側辺部側の周溝の規模は、地山掘削ライン両端の平均で、最大幅6.20m、深さ92cmを測る。周溝の立ち上がりは墳丘側が急傾斜となる。墳丘の主軸はほぼ真北に向かう。
- (4) 埋葬主体部 未調査の為不明である。
- (5) その他の遺構 SK01は、南西突出部の東側基部上に掘り込まれた土壇墓と考えられる土坑で、規模は上場で長軸2.5m以上、短軸1m、下場で長軸1.8m以上、短軸45cmを測る。基部を掘り込んで埋葬した後埋め戻し、仕上げに

地山の土で丁寧に整地して堅く締めたものと考えられる。一見して土壌の痕跡は見えず、突出部の景観は崩れない。また埋め戻し後、東側の一箇所に小石をいくつか置いた上に壺を据えている。覆土は、内部の有機物が腐食した為か、レンズ状に落ち込む。木棺を埋葬した可能性もあるが、土層や壁面には痕跡が確認できず、また、底部の幅が狭く側面の壁の立ち上がりも直線的でないなど、不明確である。内部に副葬品などは無かった。SK02は、南西突出部の南西延長線上にある円形の土坑で、直径1.3m、深さ70cmを測る。底部では3、4箇所において、小石を幾つか置いた上に壺4個体、甕1個体(157~161)が据えてあった。これらは壺1個体を除いて全てに煤が付着する。他時代のものとしては、墳丘西斜面中腹にある平坦面で地山直上に須恵器が出土しており、古代に改変したものと思われる他、南側には戦国時代の富崎城の土塁がある。

(6) 出土遺物 おもな遺物は弥生土器で、壺、甕、高杯、器台、蓋、鉢などが、多量に出土した。土器の出土状況は、墳丘裾に転落した状態のものや、上記のような遺構に伴うもの他、墳丘盛土内に破片の状態で混入するものも多くあった。盛土内の土器には、他の土器との時期差は窺えない為、墳丘築造以前の土器ではなく共存するものである。土器様相は、長く外反する頸部に無文の短い口縁部が付く甕(Ab1・Ab2・Ab3)や2条のみの擬凹線を施す甕(Aa3)、屈曲する胴部をもつ小型裝飾壺(C1)、有段口縁の器台受部(B)、強く外反し口縁端部を短く上方に伸ばす器台受部(A)、高杯・器台の棒状有段脚(脚部A)など、法仏式の様相を示すものが多い。特筆すべきものには、まず墳丘西裾から出土した脚付有段裝飾壺(102)がある。赤彩した口縁部に凹線文を施し、胴部上半には勾玉形の赤彩を6箇所に施す他、赤彩した突帯部には4箇所に切り込みを入れるなど、特殊な装飾を施す。その他、北東突出部から出土した壺(103)は、筒状の頸部から端部が垂下する口縁部が直線的に開くもので、東海の影響を受けたバレス系広口壺である。口縁部に凹線文を施し、5箇所に円形スタンプ文を中央に押し印した円形浮文が付き、浮文は正面では4つ、それ以外では2つの組になる。同じ北東突出部には、器台もしくは壺と考えられる大型品の口縁部(99)が出土した。外面に粗い凹線文を施し、上端には同心円のスタンプ文を押し印する他、口唇部上・下端にキザミ目を施す。その他平行横線文の間に外円が波状になる同心円のスタンプ文(124)や鋸歯文のスタンプ文(125・126)を押し印したり、局部的に赤彩を施すものなど、様々な装飾のものがある。他時代のものには磨製石斧、古代須恵器杯、古代土師器碗・甕、中世土師器皿、古銭、越中瀬戸丸碗があり、墳丘墓が戦国時代の土塁の他にも、何らかに転用された可能性がある。

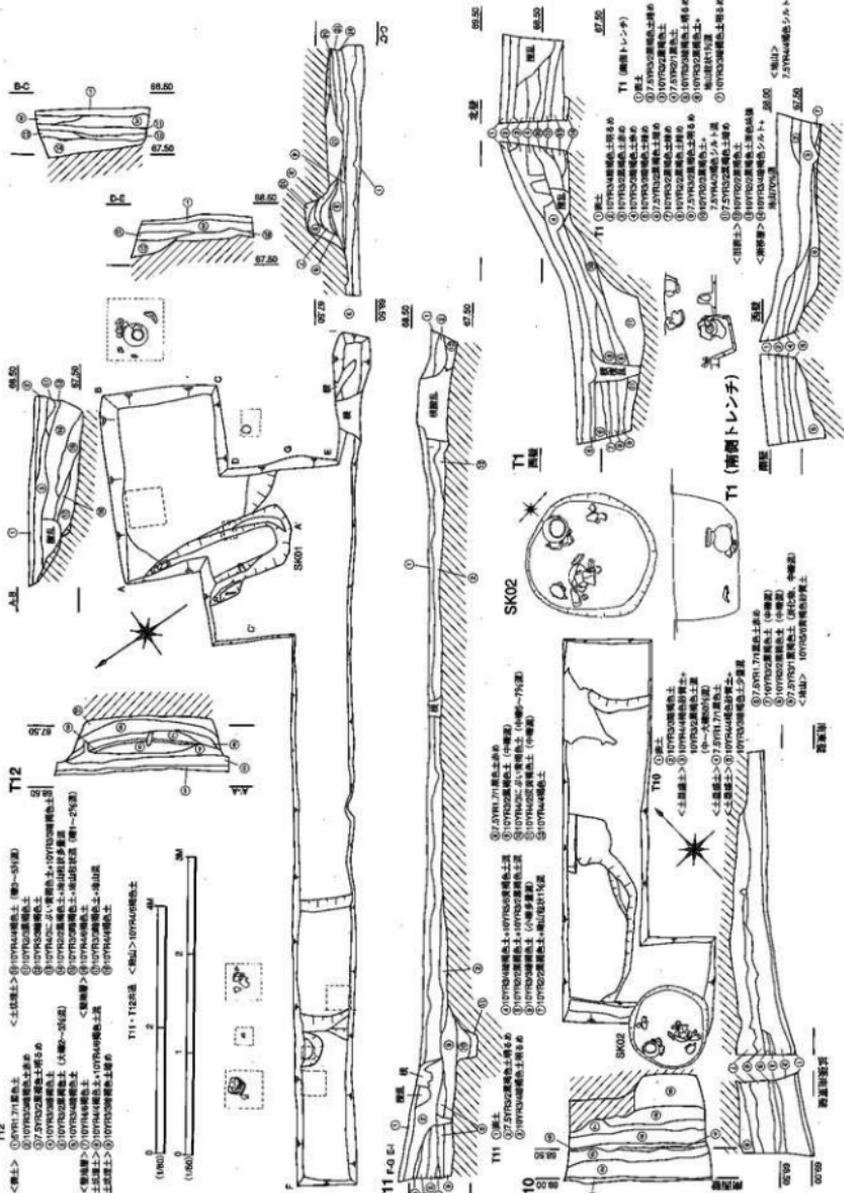
(7) 築造時期 法仏式期に比定される。

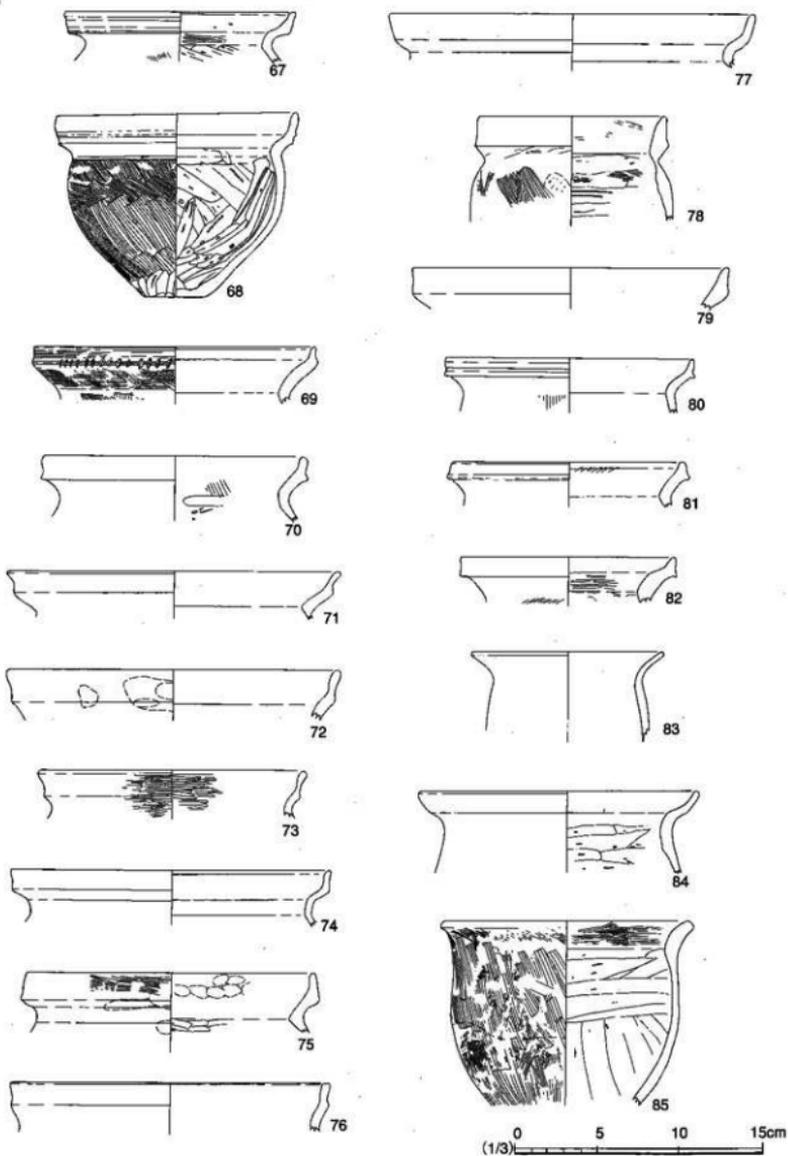
(8) 小結 富崎3号墓は、県内で最も古い四隅突出型墳丘墓であり、主な特徴としては、①遺物出土量が非常に多い、②多様な葬送・祭祀儀礼を行う、③四隅を掘り残して突出部を形成する、などが挙げられ、①②は本遺跡群ではこの遺跡にのみ顕著にみられる特徴である。①については、(6)で述べたように様々な形態や装飾のものがあり、②については、墳頂部での祭祀儀礼の他、墳丘築造過程における盛土への土器片の混入、複数の土器を据えた土坑、突出部基部への埋葬など、様々な儀礼パターンがあることが推測できる。③については、側面部に幅広の溝を掘り、突出部が肥大化した状態になるように掘り残すのが特徴で、本墳墓より築造時期が少し下る鏡坂1号墓とともに四隅掘り残しタイプの四隅突出型墳丘墓である。釜蓋集落としては、北西150m地点にある1・2号墓とともに、170m東の平野にある富崎遺跡、もしくは670m南西の富崎丘陵尾根上にある富崎赤坂遺跡・難山岩遺跡が考えられる。

富崎墳墓群においては、1・2号墓は規模・形態ともにほぼ同じであるが、3号墓は規模や突出部の形成方法、土器出土量の圧倒的な差、葬送・祭祀儀礼の多様性など、時期差や身分格差などによって前者2基とは大きな差が生じている。主軸方向は3基とも似ており、釜蓋集落も共通する。3基ともに、平野の集落である富崎遺跡は北西・南東突出部を結んだ方向にあり、丘陵の集落である富崎赤坂遺跡・難山岩遺跡は北東・南西突出部を結んだ方向にあることから、突出部を集落に向けて築造した可能性がある。その他、周溝の立ち上がりの傾斜状況も共通する。

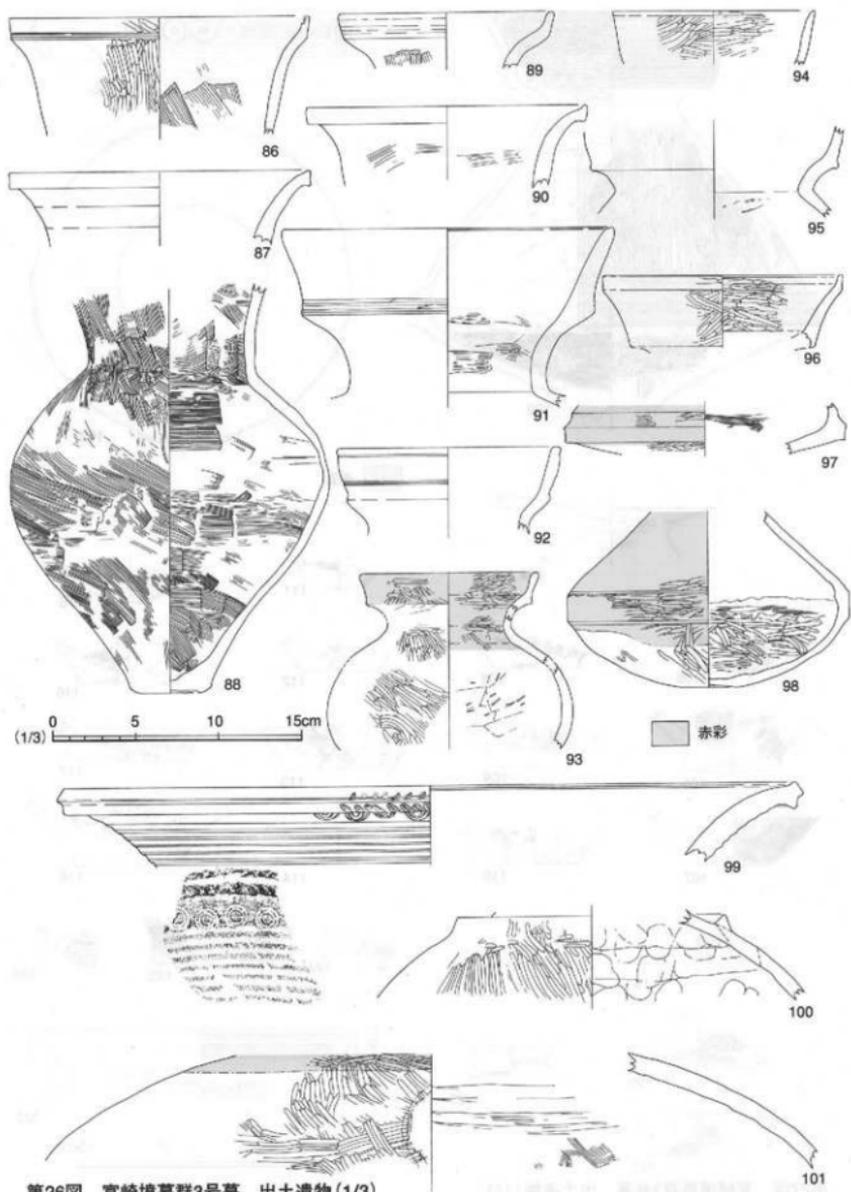
- T12**
- <壁土> ①07P12.71黄粘土
 ②07P12.72黄粘土
 ③07P12.73黄粘土
 ④07P12.74黄粘土
 ⑤07P12.75黄粘土
 ⑥07P12.76黄粘土
 ⑦07P12.77黄粘土
 ⑧07P12.78黄粘土
 ⑨07P12.79黄粘土
 ⑩07P12.80黄粘土
 ⑪07P12.81黄粘土
 ⑫07P12.82黄粘土
 ⑬07P12.83黄粘土
 ⑭07P12.84黄粘土
 ⑮07P12.85黄粘土
 ⑯07P12.86黄粘土
 ⑰07P12.87黄粘土
 ⑱07P12.88黄粘土
 ⑲07P12.89黄粘土
 ⑳07P12.90黄粘土
- <土柱土> ①07P14.64黄粘土 (壁土-50cm)
 ②07P14.65黄粘土 (壁土-50cm)
 ③07P14.66黄粘土 (壁土-50cm)
 ④07P14.67黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑤07P14.68黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑥07P14.69黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑦07P14.70黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑧07P14.71黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑨07P14.72黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑩07P14.73黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑪07P14.74黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑫07P14.75黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑬07P14.76黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑭07P14.77黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑮07P14.78黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑯07P14.79黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑰07P14.80黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑱07P14.81黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑲07P14.82黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑳07P14.83黄粘土 (壁土-50cm)
- <土柱土> ①07P14.84黄粘土 (壁土-50cm)
 ②07P14.85黄粘土 (壁土-50cm)
 ③07P14.86黄粘土 (壁土-50cm)
 ④07P14.87黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑤07P14.88黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑥07P14.89黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑦07P14.90黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑧07P14.91黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑨07P14.92黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑩07P14.93黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑪07P14.94黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑫07P14.95黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑬07P14.96黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑭07P14.97黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑮07P14.98黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑯07P14.99黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑰07P15.00黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑱07P15.01黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑲07P15.02黄粘土 (壁土-50cm)
 ⑳07P15.03黄粘土 (壁土-50cm)
- T11・T12共通 <土柱土> ①07P14.94黄粘土
 ②07P14.95黄粘土
 ③07P14.96黄粘土
 ④07P14.97黄粘土
 ⑤07P14.98黄粘土
 ⑥07P14.99黄粘土
 ⑦07P15.00黄粘土
 ⑧07P15.01黄粘土
 ⑨07P15.02黄粘土
 ⑩07P15.03黄粘土
 ⑪07P15.04黄粘土
 ⑫07P15.05黄粘土
 ⑬07P15.06黄粘土
 ⑭07P15.07黄粘土
 ⑮07P15.08黄粘土
 ⑯07P15.09黄粘土
 ⑰07P15.10黄粘土
 ⑱07P15.11黄粘土
 ⑲07P15.12黄粘土
 ⑳07P15.13黄粘土
 ㉑07P15.14黄粘土
 ㉒07P15.15黄粘土
 ㉓07P15.16黄粘土
 ㉔07P15.17黄粘土
 ㉕07P15.18黄粘土
 ㉖07P15.19黄粘土
 ㉗07P15.20黄粘土
 ㉘07P15.21黄粘土
 ㉙07P15.22黄粘土
 ㉚07P15.23黄粘土
 ㉛07P15.24黄粘土
 ㉜07P15.25黄粘土
 ㉝07P15.26黄粘土
 ㉞07P15.27黄粘土
 ㉟07P15.28黄粘土
 ㊱07P15.29黄粘土
 ㊲07P15.30黄粘土
 ㊳07P15.31黄粘土
 ㊴07P15.32黄粘土
 ㊵07P15.33黄粘土
 ㊶07P15.34黄粘土
 ㊷07P15.35黄粘土
 ㊸07P15.36黄粘土
 ㊹07P15.37黄粘土
 ㊺07P15.38黄粘土
 ㊻07P15.39黄粘土
 ㊼07P15.40黄粘土
 ㊽07P15.41黄粘土
 ㊾07P15.42黄粘土
 ㊿07P15.43黄粘土

第22図 吉崎墳墓群3号墓 土層断面図T1・T10~T12 (1/80) 及び平面図T10~T12 (1/80)、遺物出土状況図T1・T11・T12 (1/50)、SK02平断面図 (1/50)

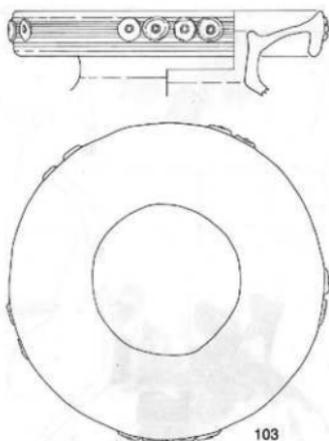
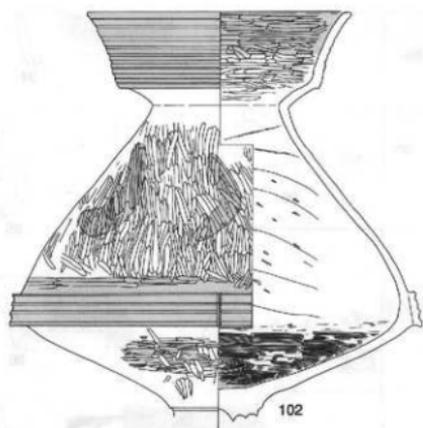




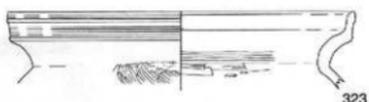
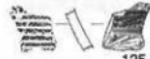
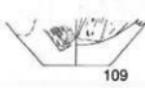
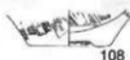
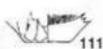
第25図 富崎墳墓群3号墓 出土遺物(1/3)



第26图 富崎墳墓群3号墓 出土遺物(1/3)

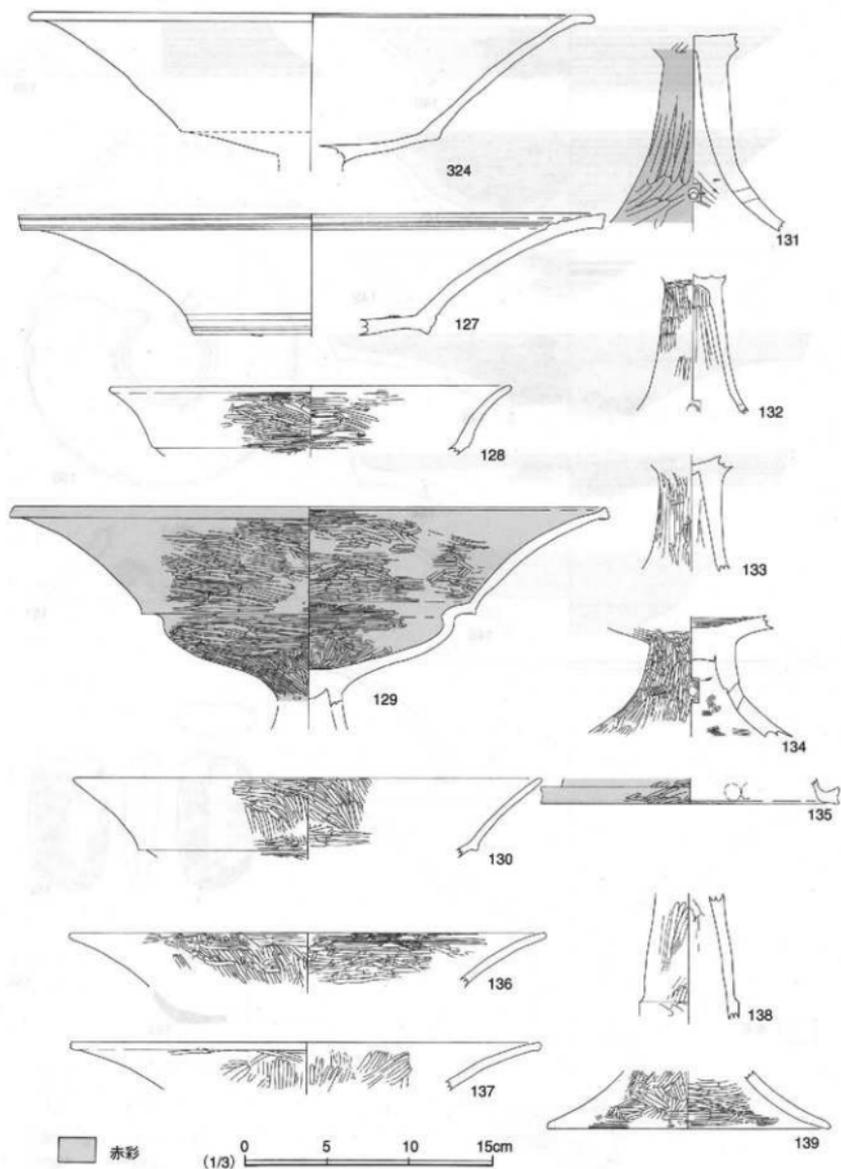


赤彩

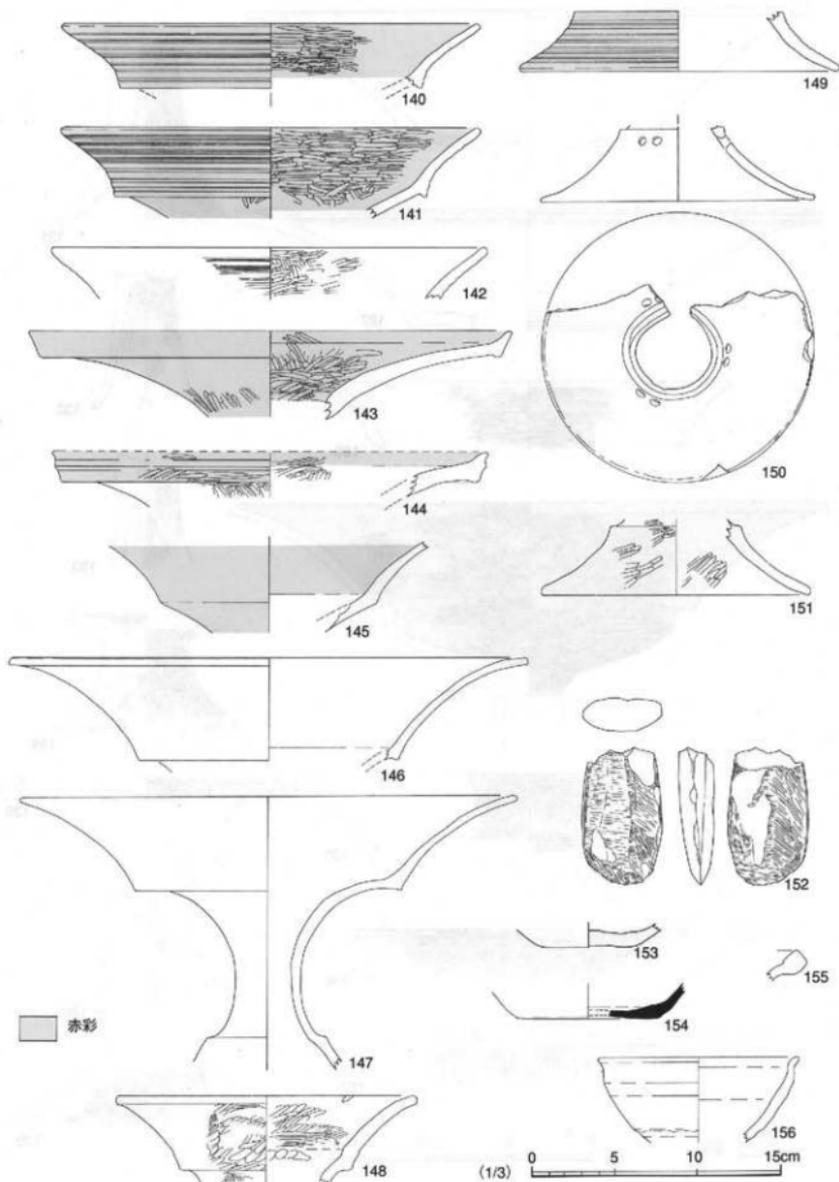


0 5 10 15cm

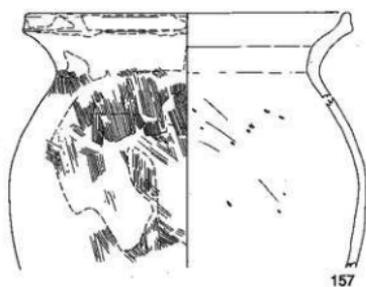
第27图 富崎墳墓群3号墓 出土遺物(1/3)



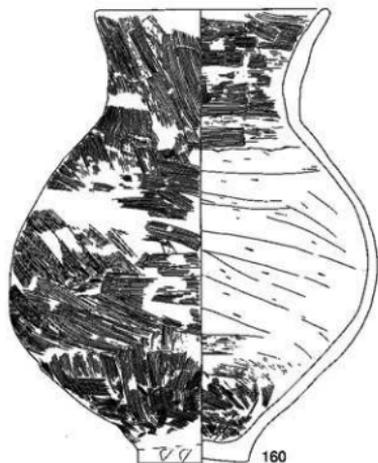
第28図 富崎墳墓群3号墓 出土遺物(1/3)



第29图 富崎墳墓群3号墓 出土遺物(1/3)



157



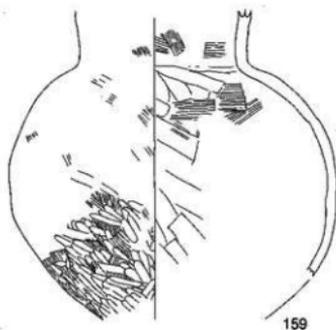
160



158



161



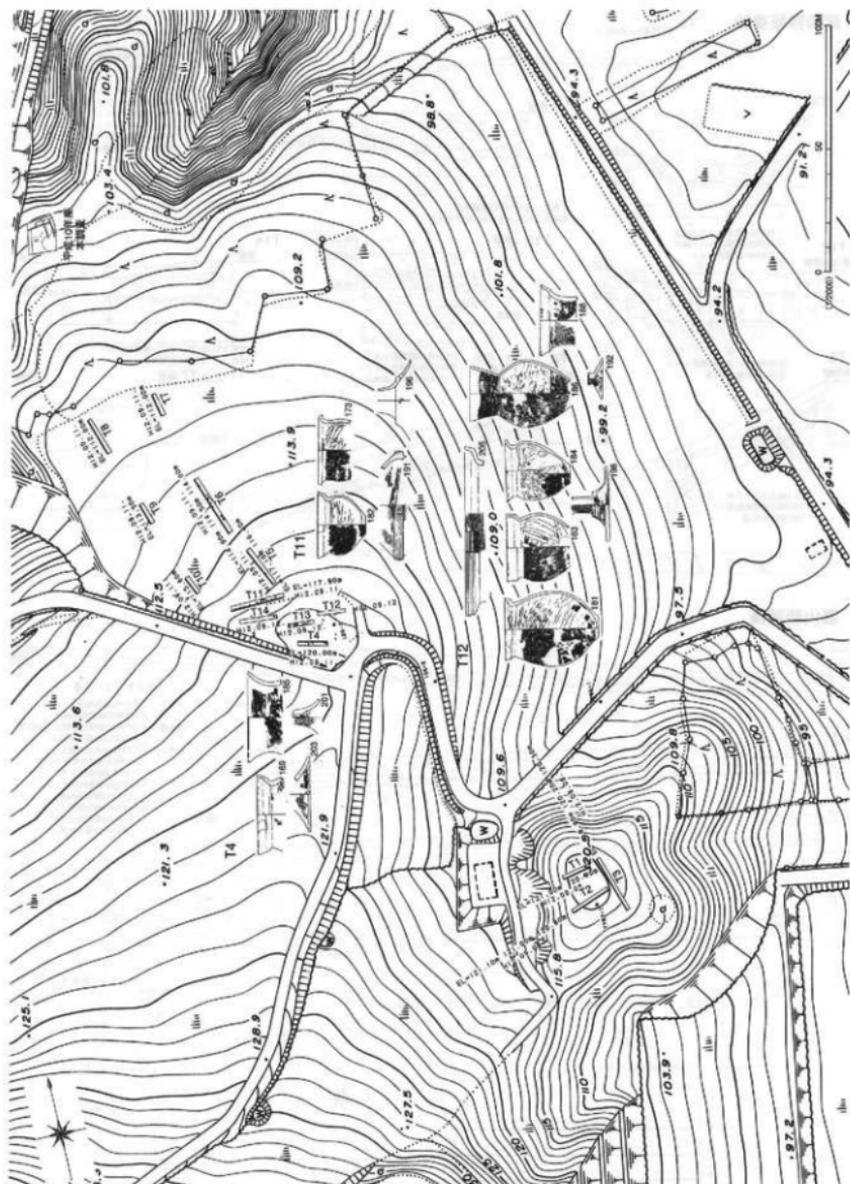
159

0 5 10 15cm
(1/3)

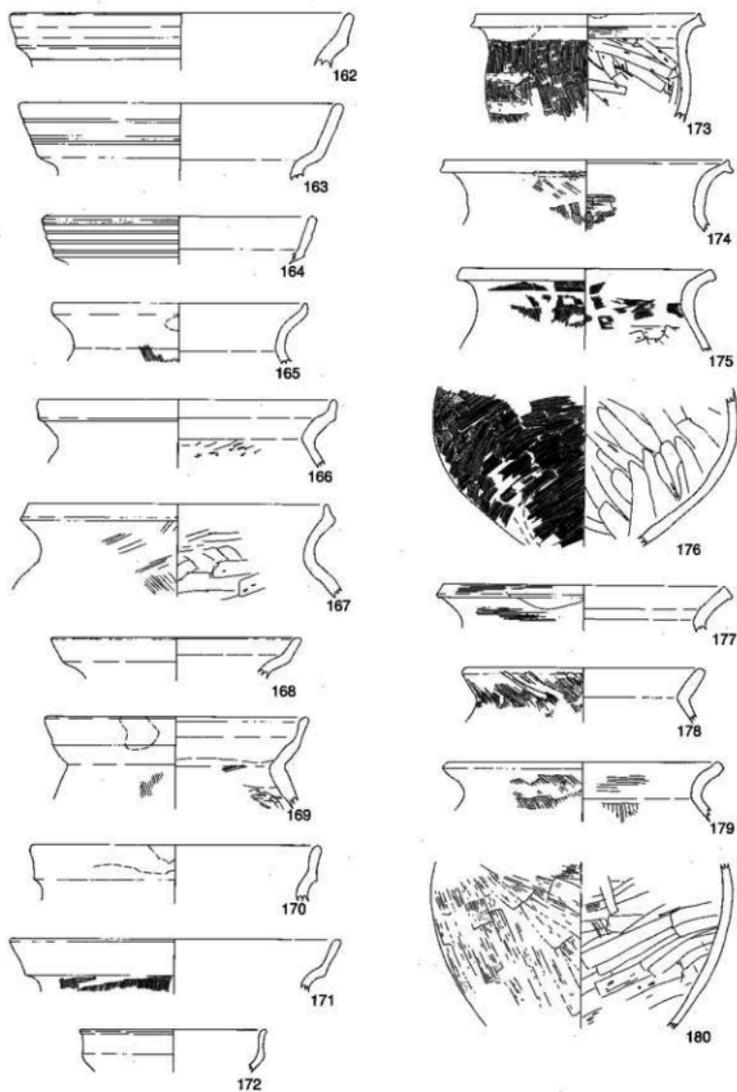
第30図 富崎墳墓群3号墓 T10SK02 出土遺物 (1/3)

第6項 富崎赤坂遺跡、離山砦遺跡（第31図～第38図、観察表⑤～⑧）

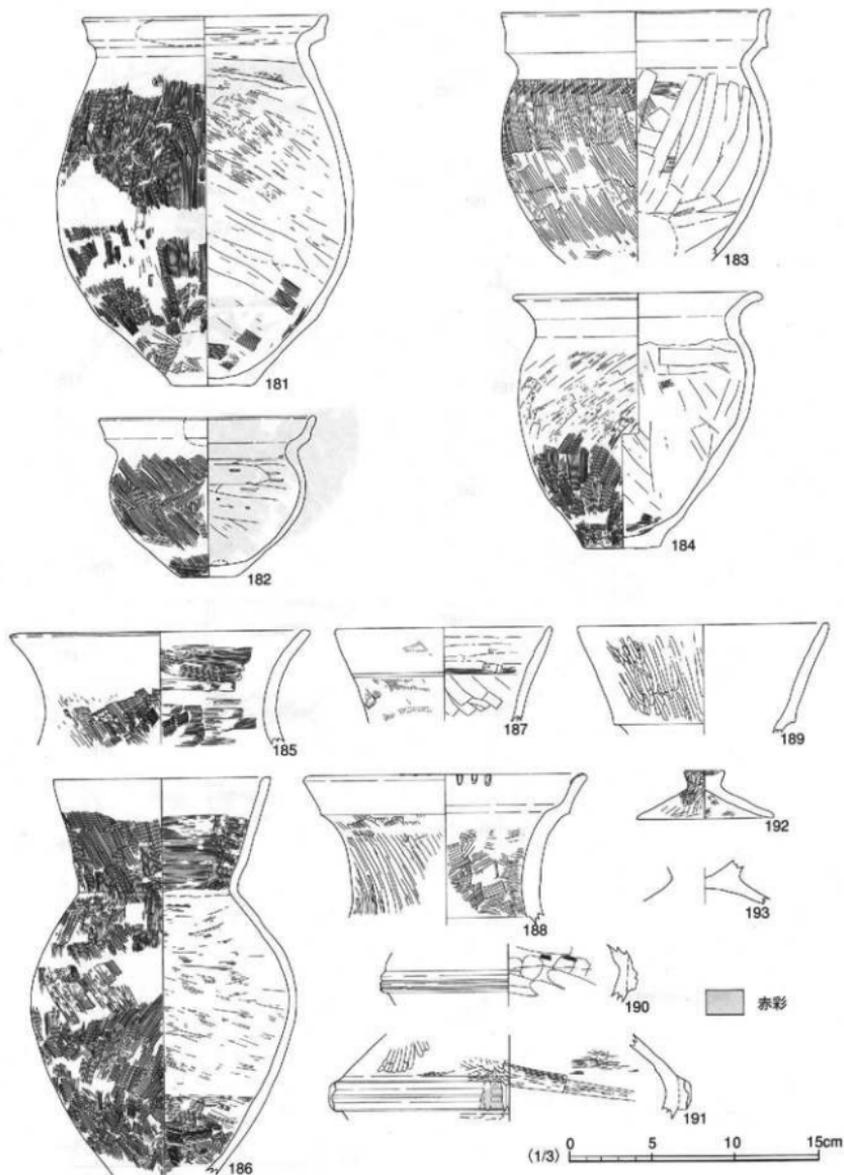
- (1) 所在地 富崎赤坂遺跡：富崎字寺山内、離山砦遺跡：富崎字向山内
- (2) 立地 標高102mから120mの富崎丘陵尾根上から西縁辺部にかけて立地し、西方には山田川が流れる谷が、東方には扇状地が見渡せる。丘陵裾部と遺跡との比高差は66.3～84.3m（標高35.7m～標高102～120m）を測る。現在は、遺跡範囲の殆どが、富山県畜産試験場・県営肉牛センター丘の夢牧場の敷地内にある。
- (3) 性格と規模 弥生時代後期～終末期の集落跡。2つの遺跡は南北に接し、今回実施した富崎赤坂遺跡の試掘調査と平成10年度の離山砦遺跡の試掘・本調査の結果から、時期的にも重なり、同一の遺跡であることが確認できた。また、富崎赤坂遺跡の南側にあったマウンド状の高まりは、調査前は富崎城をはじめ富崎丘陵上に多数存在する中世山城の関連施設と考えられていたが、調査の結果、遺構・遺物ともに存在せず、自然地形であることが分かった。
- (4) 遺構 竪穴住居跡、柱穴、土坑、溝などを検出した。遺構・遺物は、遺跡範囲中最も標高が高い場所にある林の中で集中的に見つかり、その場所では遺構の遺存状況も良好だった。一方、それより下方の現在牧草地になっている範囲は、牧草地造成時に一部が削平されていた。
- (5) 出土遺物 弥生土器の甕、壺、高杯、器台、壺、鉢、埴型土器が出土した。土器の様相は、長く外反する頸部に無文の短い口縁部がつく有段口縁壺（Ab1・Ab2・Ab3）や、外反する頸部に無文のやや短めの口縁部が付く有段口縁壺（Ab4）、2本のみの擬凹線を施す有段口縁壺（Aa2・Aa3）、屈曲する胴部をもつ小型裝飾壺（C1）、棒状有段脚（高杯脚部A、器台脚部A）など、法仏式の様相を示すものに加え、それらの様相が薄れた月影I式のものが少量みられる。また、図示し得なかったが、甕B3、壺A4、器台受部Aもある。
- (6) 平成10年度本調査 離山砦遺跡では、土砂採集工事に先立ち、平成10年12月1日から同年12月14日にかけて、遺跡北西部丘陵西斜面で試掘・本調査を行った（第32図参照）。試掘調査対象面積は1,200㎡、本調査発掘面積は138㎡である。この調査では遺構は確認されず、斜面上方より転落してきたと考えられる弥生土器が堆積していた。斜面上方にある平坦面上には前述の試掘調査で確認した集落がある。集落のある平坦面と斜面の境には現在中世の空堀とされている遺構があり、概ね、それより南東にある富崎赤坂遺跡の範囲には集落があり、それより北西にある離山砦遺跡の範囲は土器捨て場になっていたと推測される。そう考えると、空堀は環濠である可能性もあるかもしれないが、昭和59年4月の分布調査では空堀より崖側のエリアで「土取後の地層断面に住居跡の痕跡が見える」との報告がなされており（婦中町教育委員会 1986）、一考を要する。しかし、残念なことに、西斜面の大半は、新たな土砂採集工事で調査をしないまま削平されてしまい、貴重な資料を手にする機会を失ってしまった。
- (7) 帰属時期 法仏式期・月影I式期に比定される。
- (8) 小結 本遺跡は、丘陵裾部との落差が大きい急斜面に面した場所に短期間造営された集落で、千坊山遺跡群中で最も古い集落である。環濠などの確認調査は行っていないが、立地状況から防御的性格をもつ高性集落と考えられる。墓地には、670m北東の丘陵北東縁辺部にある富崎墳墓群が考えられる。また丘陵東麓の平野には、本遺跡と同じく富崎墳墓群を築いた集団の居住域として考えられる富崎遺跡がある。その集落存続期間には本遺跡よりやや新しい時期であることから、富崎赤坂・離山砦遺跡に暮らしていた集団が後に平野に移ったか、もしくは一時期並行して存在していたものが後に高地にある集落が不要になり平野のみ居住するようになった可能性がある。しかし、今回の試掘調査対象地は遺跡の一部分のみであり、遺跡範囲や内容はまだ明確ではない。



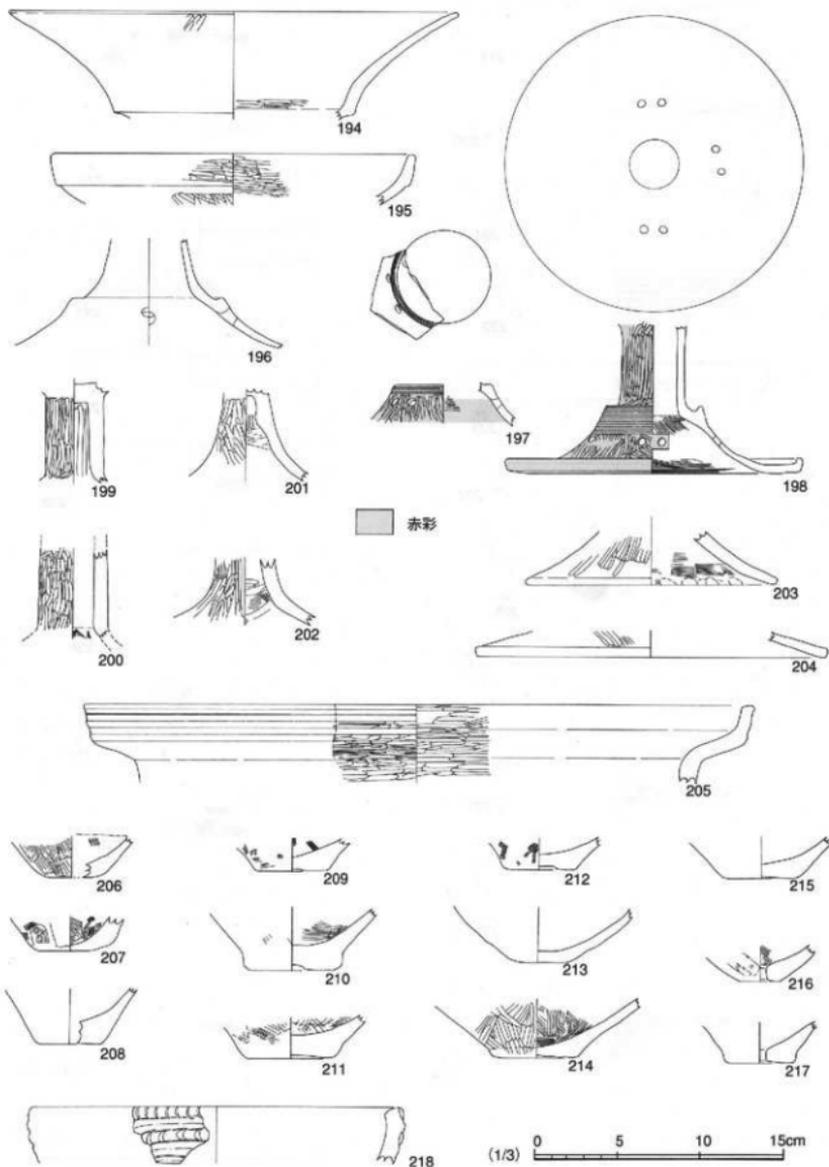
第31図 富崎赤坂遺跡・龍山砦遺跡 調査概要図 (1/2,000)、主な遺物の出土位置 169-173-182-185-191-192-196-201-203 (1/10)
181-183-184-186-188-198-205 (1/12)



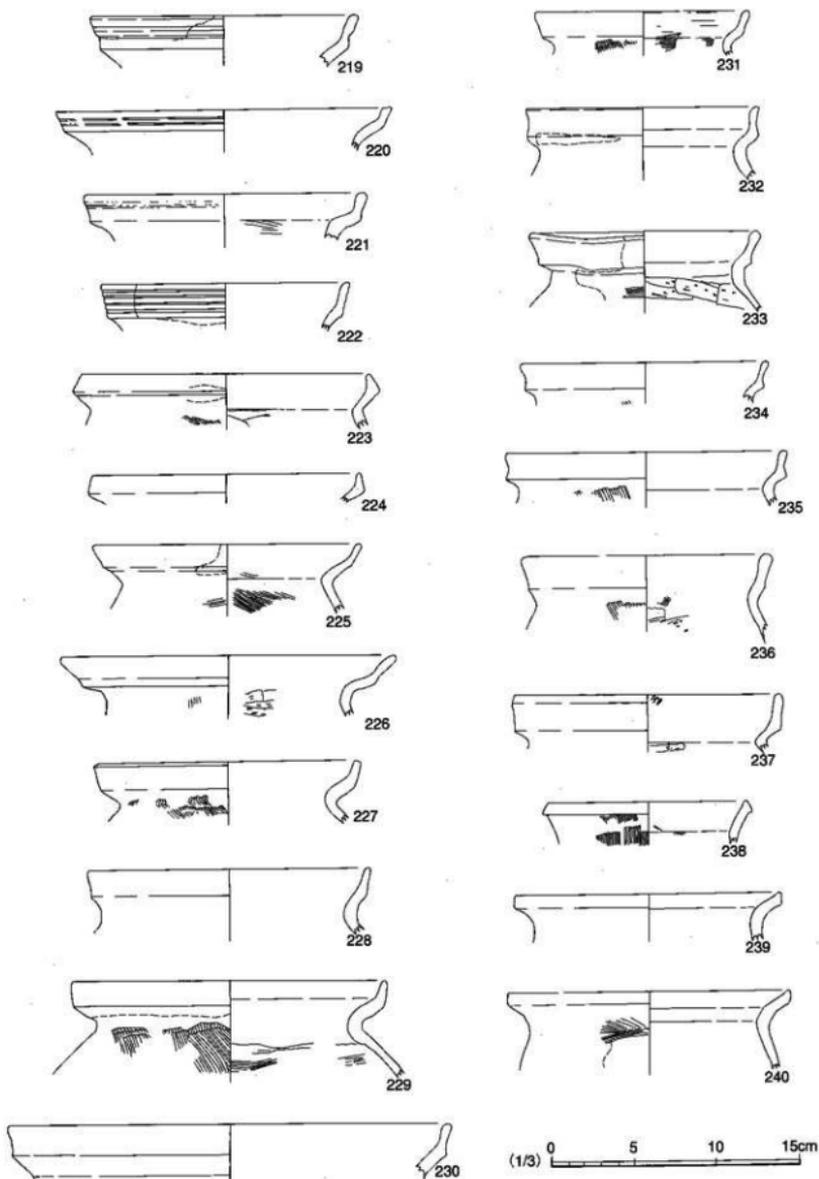
第33図 富崎赤坂遺跡 出土遺物(1/3)



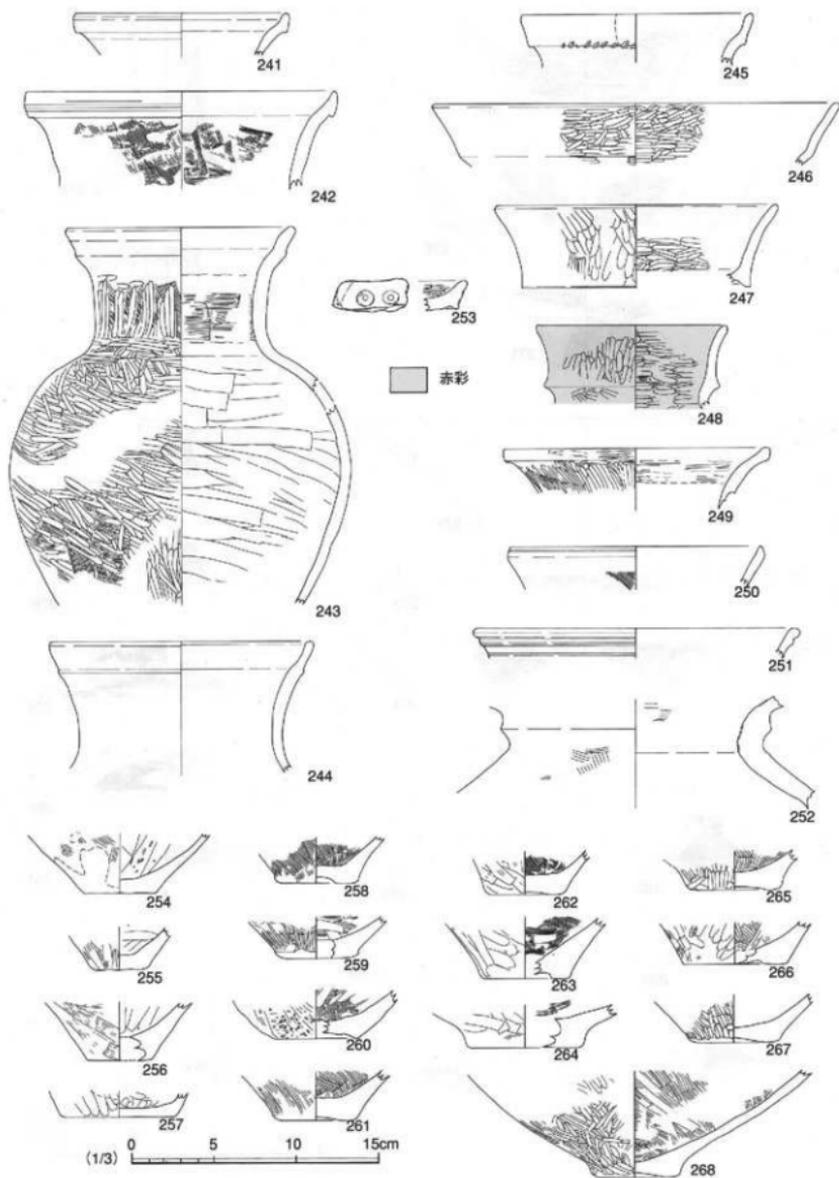
第34図 富崎赤坂遺跡 出土遺物 (1/3)



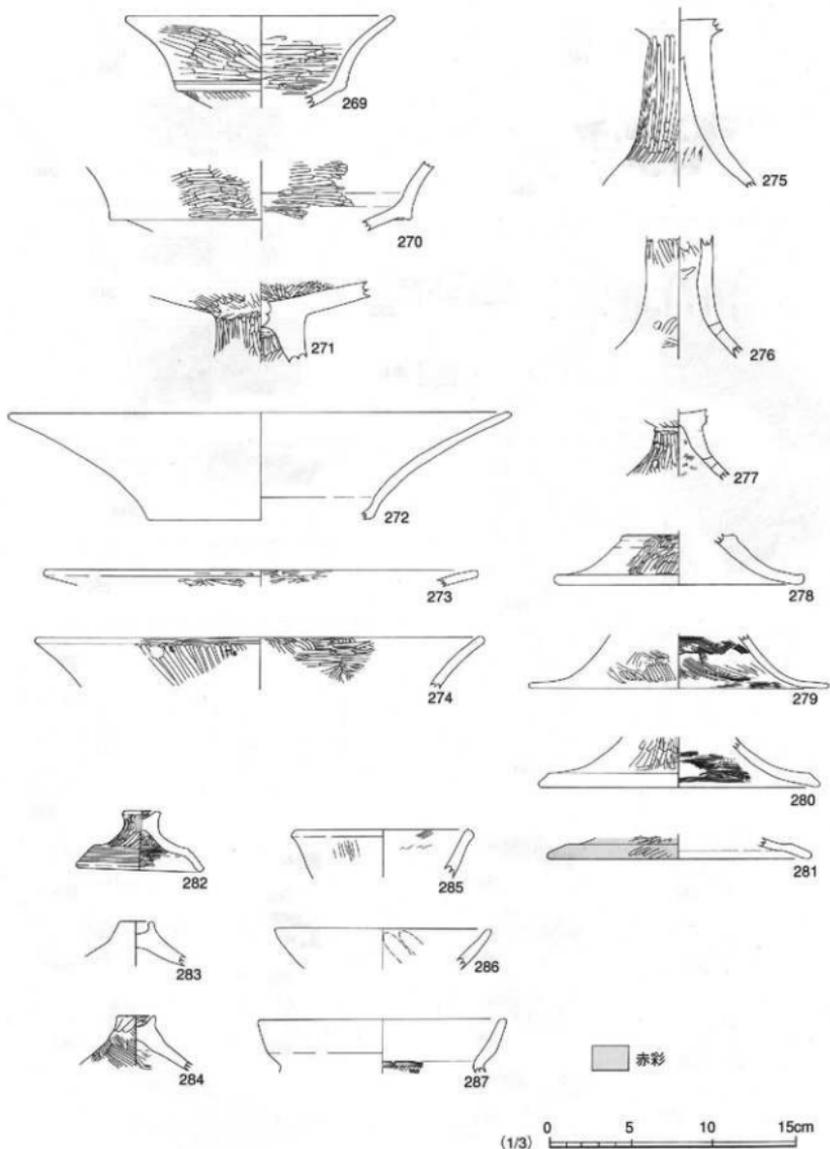
第35図 富崎赤坂遺跡 出土遺物 (1/3)



第36圖 離山砦遺跡 出土遺物(1/3)



第37図 離山砦遺跡 出土遺物 (1/3)



第38図 離山砦遺跡 出土遺物 (1/3)

第7項 富崎千里古墳群

本古墳群は、前述した富崎墳墓群の谷を挟んで南側に分布する17基の古墳である。南群と北群は小さな谷を挟んで両側に造営され、南群14基（前方後方墳1基、方墳12基、円墳1基）、北群3基（方墳3基）で構成される。現在は、遺跡範囲の殆どが、富山県畜産試験場・県営肉牛センター丘の夢牧場の敷地内にある。以下、それぞれに記述する。

＝ 南群（第39図）＝

古墳の分布状況は、平野に平行する小さな尾根の頂部に9号墳が鎮座し、その5m下の尾根北側に1号墳が配置、残りの12基は尾根頂部から約10m下の東斜面にある平坦面に位置する。これらは、分布状況から少なくとも4群に分かれる。また、それらのやや下方には、平野側に方形や円形に張り出している地形があり、周溝墓の可能性もある。

2号墳（第40図、第41図、第54図、観察表③）

(1) 所在地 富崎字館ノ内地内

(2) 立地 標高46mの富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へと繋がる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は19.6m（標高24.5～44.1m）を測る。

(3) 形態と規模 方墳。墳丘は、南北側辺部裾で14.1m、東西側辺部裾で13.1mを測り、南北にやや長い長方形を呈する。墳丘裾部と頂部の比高差は最大3.2m（標高47.3～44.1m）を測る。造成方法は、広く地山を削り出すとともに周溝を巡らせ、墳丘に盛土を施して整形し、周溝と墳丘の境目には、削り出した地山面を平均85cmの幅で緩斜面もしくは平坦面のまま掘り残す。北・西側では周溝は二重となり、その規模は上端で測ると、内溝が幅2.4m、深さ130cmで、外溝が幅1.2m、深さ57cmと、内溝の方が広くて深くなる。南・東側の周溝は一重で、規模は地山掘削面で測ると、南側は幅2.6m、深さ85cmで、東側は幅3.1m、深さ50cmを測る。周溝の立ち上がりは、墳丘側がやや緩やかな傾斜となる。墳丘の主軸は真北から15°東に振る。

(4) 埋葬主体部 未調査の為不明である。

(5) その他の遺構 T3南側では、2号墳の南に隣接する4号墳の北東隅周溝を検出した。

(6) 出土遺物 おもな遺物は土師器で、壺・甕の底部が裾部から出土した他、高杯(288・289)が4号墳周溝から出土した。土器出土量は極めて少ないが、4号墳は杯底部からハの字に開く高杯脚部(C)があるなど、古墳時代初頭の様相を示す。他時代のものには、縄文土器がある。

(7) 築造時期 白江式期（～古府クルビ式期）に比定される。

(8) 小結 現在のところ、本古墳群で唯一周溝が二重になるタイプである。南群のなかでは最も北側のグループに位置し、西側の尾根上には1号墳が、南側には3・4号墳、北側には13号墳がある。

6号墳（第42図、第43図、第54図、観察表③）

(1) 所在地 千里字田の高地内

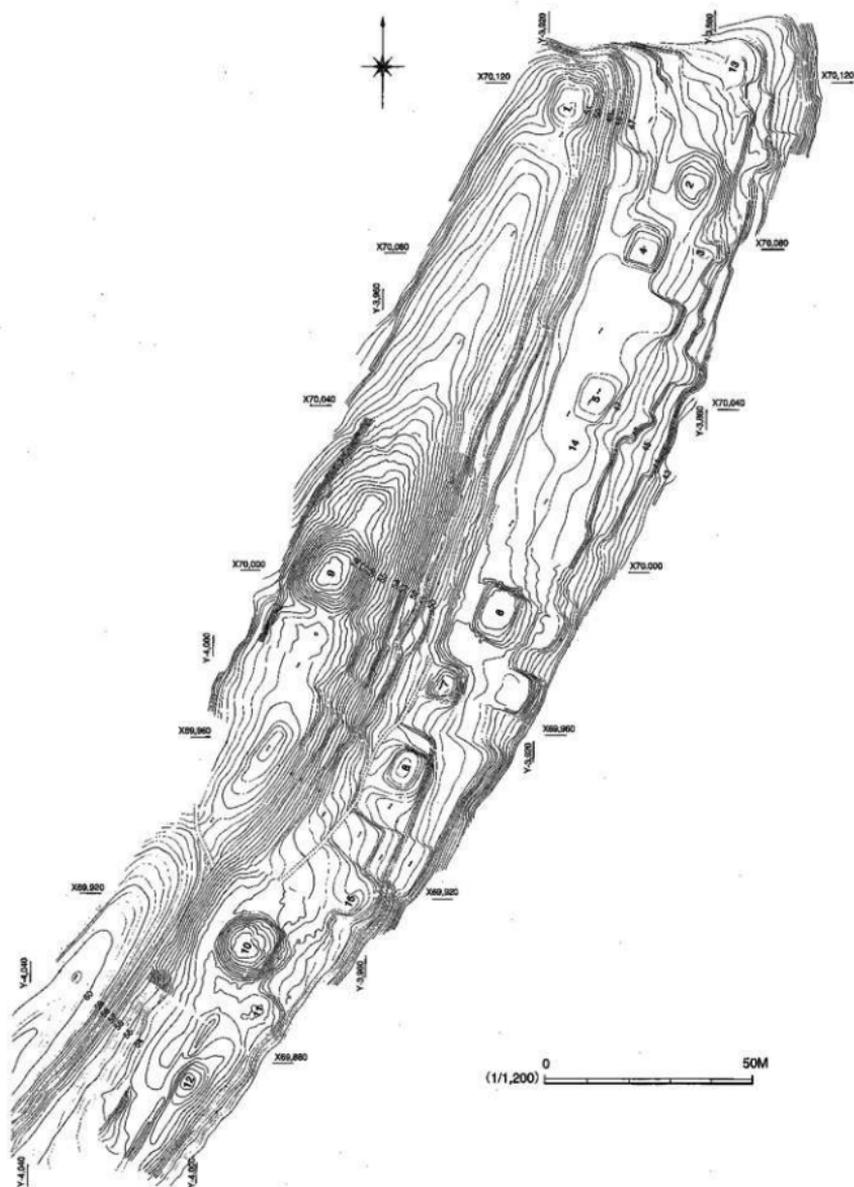
(2) 立地 標高48mの富崎丘陵東縁辺部斜面に立地し、丘陵裾部は東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へと繋がる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は21.2m（標高24.8～46.0m）を測る。

(3) 形態と規模 方墳。墳丘は、南北側辺部裾で15.4m、東西側辺部裾で12.0mを測り、南北に長い長方形を呈する。墳丘裾部と頂部の比高差は最大3.3m（標高46.0～49.3m）を測る。造成方法は、広く地山を削り出すとともに丘陵側（墳丘西半部）では周溝を巡らせ、墳丘に盛土を施して整形し、周溝が深い墳丘西側では、周溝と墳丘の境目に削り出した地山面を平均65cmの幅で緩斜面のまま掘り残す。墳丘西側の周溝は、地山掘削面で測ると、幅4.9m、深さ1.2cmを測る。周溝の立ち上がりは、墳丘側がやや緩やかな傾斜となる。墳丘の主軸は真北から22°東に振る。

- (4) 埋葬主体部 未調査の為不明である。墳頂部を地表面から25cm程度掘削したが、墓壇ラインは検出できなかった。
- (5) その他の遺構 SK01は、墳丘南西隅の周溝の底部にある焼壁土坑で、直径80cmの円形を呈する。遺物は出土していない。
- (6) 出土遺物 おもな遺物は土師器で、高杯、鉢、壺底部などが裾部から出土した。土器出土量は極めて少ないが、杯底部からハの字に開く高杯脚部(C)があるなど、古墳時代初頭の様相を示す。また、図示し得なかったが甕Ab7もあった。
- (7) 築造時期 白江式期～古府クルビ式期に比定される。
- (8) 小結 南群のなかでは中央部南側のグループに位置し、西側の尾根上には9号墳があり、南側には7・8号墳がある。墳丘東側は墳裾から平坦面及び緩斜面が2m程度続いた後、幅1.6m、深さ20cmの浅い溝があった。墳丘と溝に挟まれた範囲は、墳丘に付属する空間である可能性もあるが、周辺は植林による攪乱を受けている為、人為的な地形かどうか不明確ではない。

9号墳(第44図～第46図、観察表⑧)

- (1) 所在地 千里字田の高・前山地区
- (2) 立地 標高55.0mの富崎丘陵東縁辺部尾根上に立地し、東方に扇形野が広がる。西方は、小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、富崎丘陵尾根へと繋がる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は29.7m(標高24.8～54.5m)を測る。
- (3) 形態と規模 前方後方墳。墳丘規模は、全長34m、後方部長20m、前方部長14m、後方部幅19m、前方部幅13.7m、くびれ部幅6.8mを測り、墳丘裾部と後方部頂部の比高差は最大4.1m(標高54.5～58.6m)を測る。後方部はやや縦長の長方形を呈する。前方部は後方部に比べ小さく、くびれ部と後方部頂部の比高差は2.3m(標高56.3～58.6m)と大きいなど、出現期古墳の様相を呈する。前方部は、くびれ部から先端部に向けて傾斜して高まりながら開き、くびれ部頂部と先端部の比高差は35cmを測る(標高56.30～56.65m)。また、墳丘北裾と前方部先端との比高差は1.6m(標高55.05～56.65m)である。造成方法は、広く地山を削り出すとともに、後方部南裾及びくびれ部、前方部側面には周溝を巡らせ、墳丘に盛土を施して整形し(標混じり地山の為、盛土にも礫が多量に入る)、墳丘南東側では周溝と墳丘の境目に削り出した地山面を75cmの幅で平坦面のまま掘り残す。周溝の規模は、地山掘削ライン両端で測ると、後方部南裾部では幅3.9m、深さ80cmを測り、くびれ部及び前方部側面では幅2.2m、深さ26cmと狭く浅くなる。周溝の立ち上がりは、墳丘側がやや緩やかな傾斜となる。墳丘の主軸は真北から28°東に振る。
- (4) 埋葬主体部 未調査の為不明であるが、後方部墳頂中央部(T2南端)では、北東・南西幅1m以上、北西・南東幅60cm以上、深さ10cm以上の範囲で、破砕された赤彩土器が集中して出土した部分があり、埋葬主体部はその下に存在することが推測される。
- (5) 出土遺物 おもな遺物は土師器で、壺、甕、高杯杯部、器台脚部、蓋などが墳丘頂部及び裾部から出土した。墳丘頂部の破砕土器は26片出土した。接合出来ない為器形は分らないが、小型裝飾壺一箇体分。土器様相は、小型器台の脚(C)、高さのある逆台形の溝みもち体部が内湾する蓋(C)など、古墳時代初頭の様相を示す。また、図示し得なかったが、甕B3もあった。他時代のものとしては、縄文土器、打製石斧がある。
- (6) 築造時期 白江式期～古府クルビ式期に比定される。
- (7) 小結 本古墳群の頂上に立つ古墳であり、唯一の前方後方墳である。墳頂部における土器の出土状況から、破砕土器を埋葬主体部上に撒く祭祀を行っていたことが分かる。南群のなかでは中央部南側のグループに位置し、東斜面下方の平坦面には6号墳がある。月影Ⅱ式期の前方後方墳墳丘墓である向野塚と比較すると、前方部がまだ小さいものの、①前方部が整形に開く形状となる、②前方部がくびれ部から先端部に向けて隆起するなどの変化がある他、墳丘全体では、③大規模化、④前方部と後方部の比高差が大きくなる、⑤周溝の在り方の違い、⑥主軸方向に対する意



第39図 富崎千里古墳群 南群測量図 (1/1,200)

結中町教育委員会1986「富崎千里古墳群測量図」に加筆

識の違い（後方を南西に向け墳丘側辺部を平野に向ける）など、大きく変化している。

10号墳（第47図、第48図、第55図、観察表⑧）

(1) 所在地 千里字田の高・前山地内

(2) 立地 標高53mの富崎丘陵東縁部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へと繋がる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は24.5m（標高26.9～51.4m）を測る。

(3) 形態と規模 円墳。規模は直径20mを測る。墳丘裾部と頂部の比高差は最大4.3m（標高51.4～55.7m）を測る。造成方法は、広く地山を削り出すとともに周溝を巡らせ、墳丘に盛土を施して整形する。周溝の規模は、地山掘削面を測ると、丘陵側では幅3.8m、深さ105cm、平野側では幅2.8m、深さ70cmを測る。周溝の立ち上がりは、墳丘側がやや緩やかな傾斜となる。

(4) 埋葬主体部 未調査の為不明。墳頂部を地表面から30cm程度掘削したが、墓壇ラインは検出できなかった。

(5) 出土遺物 おもな遺物は土器で、壺が裾部から出土した。土器出土量は極めて少ないが、球形の体部に長い口縁部が付くと考えられる直口壺(E)や、器形はよく分からないが二重口縁壺的な壺の口縁部など、古墳時代初期の様相を示す。また、図示し得なかったが、埴型土器と考えられる口縁部もあった。

(6) 築造時期（白江式期）～古府ケルビ式期に比定される。

(7) 小結 本古墳群で唯一の円墳である。南群のなかでは最も南側のグループに位置し、南側には11号墳、北側には15号墳があるが、これらは円形周溝墓の可能性もある。

12号墳推定地（第49図、第50図、第54図）

(1) 所在地 千里字田の高地内

(2) 立地 標高54mの富崎丘陵東縁部斜面に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小尾根から小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、丘陵尾根へと繋がる。丘陵裾部と12号墳推定地である微高地裾部との比高差は26m（標高28.0～54.0m）を測る。

(3) 小結 調査前、本推定地は前方後円墳の可能性のある古墳と推定されていたが、トレンチ断面の土層からみると、古墳と推定されていた微高地の西側に沿って谷が伸びていたが、そこには人為的な整形は認められなかった。また、古墳であることを示す遺構や遺物もなく、自然地形であることが判明した。

＝ 北 群 ＝

古墳の分布状況は、平野に平行する小さな尾根上に16・17・18号墳が並ぶ。

16号墳（第51図、第52図、第55図、観察表⑧）

(1) 所在地 富崎字高山・昼場地内

(2) 立地 標高55mの富崎丘陵東縁部尾根上に立地し、東方に婦負平野が広がる。西方は、小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、富崎丘陵尾根へと繋がる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は27.9m（標高25.6～53.5m）を測る。

(3) 形態と規模 方墳。墳丘は、南北側辺部裾で14.7m、東西側辺部裾で14.6mを測り、ほぼ方形を呈する。墳丘裾部と頂部の比高差は最大2.7m（標高53.5～56.2m）を測る。造成方法は、広く地山を削り出すとともに北西には周溝を巡らせ、墳丘に盛土を施して整形し、北側の周溝と墳丘の境目には、削り出した地山面を平均50cmの幅で平坦面のまま掘り残す。墳丘北西側の周溝の規模は、地山掘削面を測ると、幅3.2m、深さ35cmを測る。周溝の立ち上がりは、墳丘側がやや緩やかな傾斜となる。墳丘の主軸は真北から19°東に振る。

(4) 埋葬主体部 未調査の為不明。墳頂部を地表面から15cm程度掘削したが、墓壇ラインは検出できなかった。

(5) その他の遺構 T2北側では、16号墳の北に隣接する17号墳の墳丘南側の周溝を検出した。17号墳は東西幅9m

程度高さ0.8mの小規模な方墳と推測され、周溝の規模は、幅2.1m、深さ3.4mを測る。周溝内側の区画内では、旧表土直上に遺物が出土しており上部での祭祀が考えられる。他の古墳と比較すると規模が極めて小さく、墳丘盛土もない為、方形周溝墓の可能性もある。

(6) 出土遺物 おもな遺物は土師器で、壺、高杯脚部、器台脚部、蓋などが裾部から出土した他、17号墳墳頂から甕(309)が出土した。土器様相は、直口壺(E)と考えられるものや、脚上半部がやや膨らみ、裾部が強く屈曲して開く高杯脚部(B)、小型器台の脚(C)、高さのある逆台形の摘みをもつ蓋(C)など、古墳時代初頭の様相を示す。

(7) 築造時期 古府クルビ式期に比定される。

18号墳 (第52図、第53図、第55図、観察表⑧)

(1) 所在地 富崎字高山・昼場地内

(2) 立地 標高52mの富崎丘陵東縁辺部尾根上に立地し、東方に棚谷平野が広がる。西方は、小さな谷を挟んで緩やかな傾斜となり、富崎丘陵尾根へと繋がる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は25.1m(標高25.6~50.7m)を測る。

(3) 形態と規模 方墳。墳丘は、南北側辺部裾で24.9m、東西側辺部裾で19.8mを測り、南北に長い長方形を呈する。墳丘裾部と頂部の比高差は最大3.5m(標高50.7~54.2m)を測る。造成方法は、広く地山を削り出すとともに、南北に尾根を断ち切るように周溝を巡らせ、墳丘に盛土を施して整形しており、北側の周溝と墳丘の境目には、削り出した地山面を平均90cmの幅で平坦面のまま掘り残す。周溝の規模は、地山掘前面で測ると、墳丘南側で幅6m、深さ130cm、墳丘北側で幅3.9m、深さ60cmを測る。周溝の立ち上がりは、墳丘側がやや緩やかな傾斜となる。墳丘の主軸は真北から15°東に振る。

(4) 埋葬主体部 未調査の為不明。墳頂部を地表面から20cm程度掘削したが、墓壇ラインは検出できなかった。

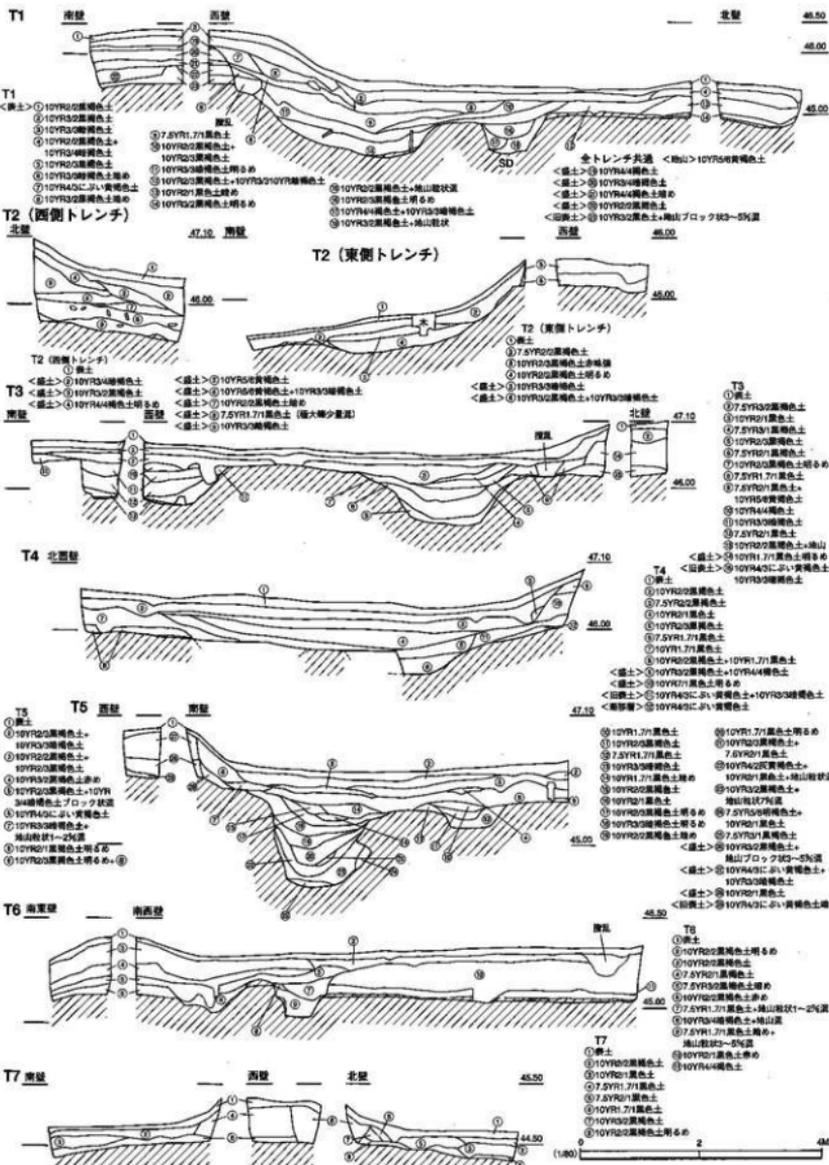
(5) その他の遺構 SK01は、墳丘北西裾にある円形の土坑である。規模は直径1.2mで深さ40cmを測る。出土遺物は無い。

(6) 出土遺物 おもな遺物は土師器で、高杯・器台杯部が裾部から出土した。土器出土量は極めて少ない。他時代の遺物には縄文土器、古代須恵器杯部、杯蓋があり、古代の段階で何らかに転用された可能性もある。

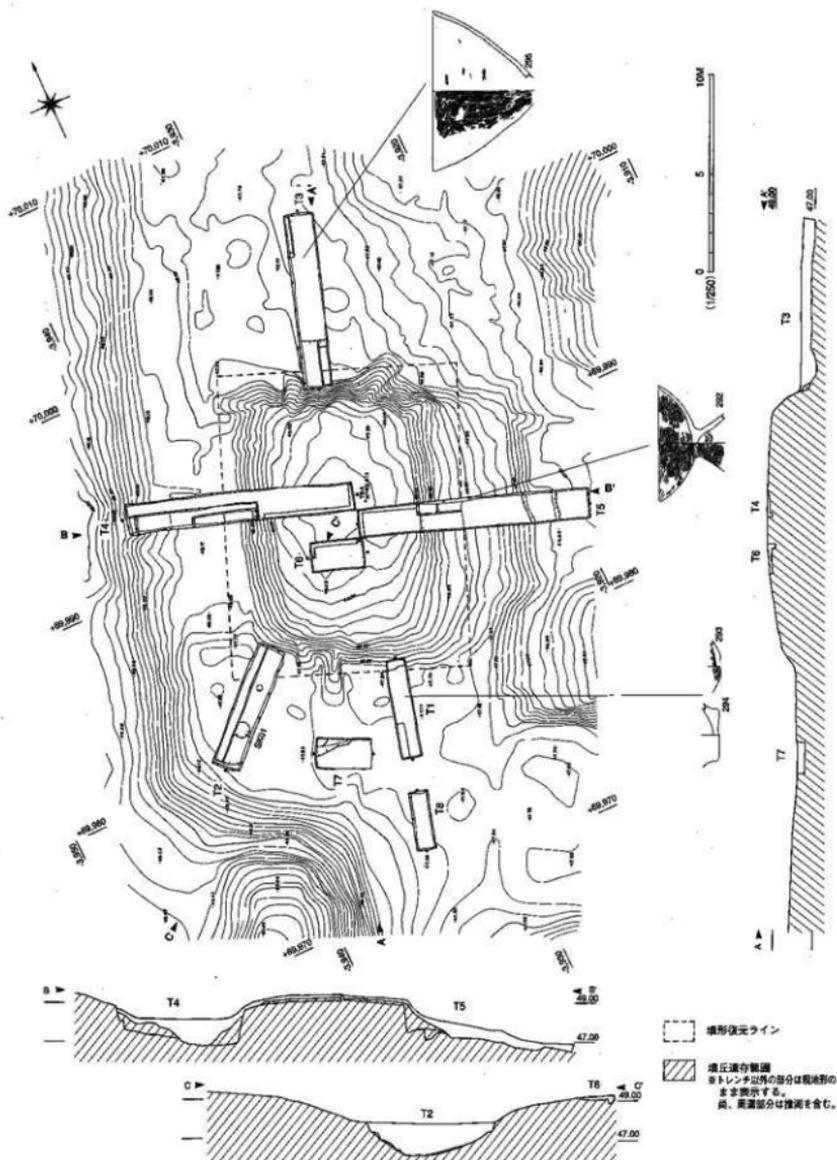
(7) 築造時期 白江式期~古府クルビ式期に比定される。

(8) 小結 本古墳群中、最も大規模な方墳である。

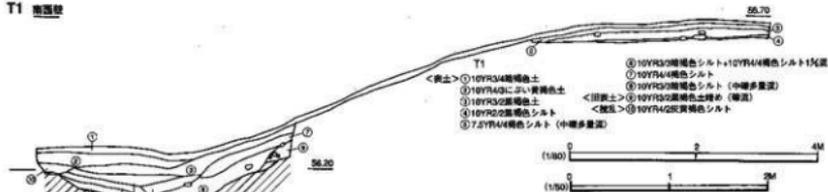
本古墳群は、古墳時代に入ってまもなく造墓を開始した墓域であり、弥生時代にはなかった特徴が現れる。全体にみられる変化には、①墳丘側面を平野に向ける、②周溝が深い場所を中心として、周溝と墳丘の境目に幅1m前後の平坦面を掘り残し、墳丘斜面の流土を受け止める機能が現れる、③周溝の在り方の違いなどがある。古墳群内は、少なくとも5群に細分でき、各々に中核的な古墳をもつようである。墳形や規模、立地の違いから、頂点に立つのが唯一の前方後方墳の9号墳であり、その下には少なくとも3段階の格差が生じていることが分かる。そして更に、本古墳群と王塚・勅使塚古墳のような巨大な前方後方墳の間には階層に大きな差がある。基盤集落は明確ではないが、1.8km東の平野にある南部I遺跡を中心として複数の集落である可能性がある。なお、富崎丘陵周辺には、まだ把握していない墳丘墓・古墳がある可能性もある。



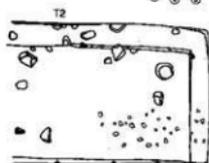
第41図 富崎千里古墳群2号墳 土層断面図T1～T7 (1/80)



T1 南西壁



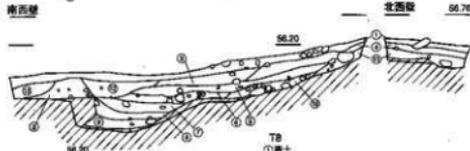
T7 南西壁



T2 北壁



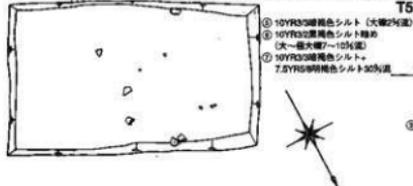
T8 南西壁



T9 北壁



T5 北東壁



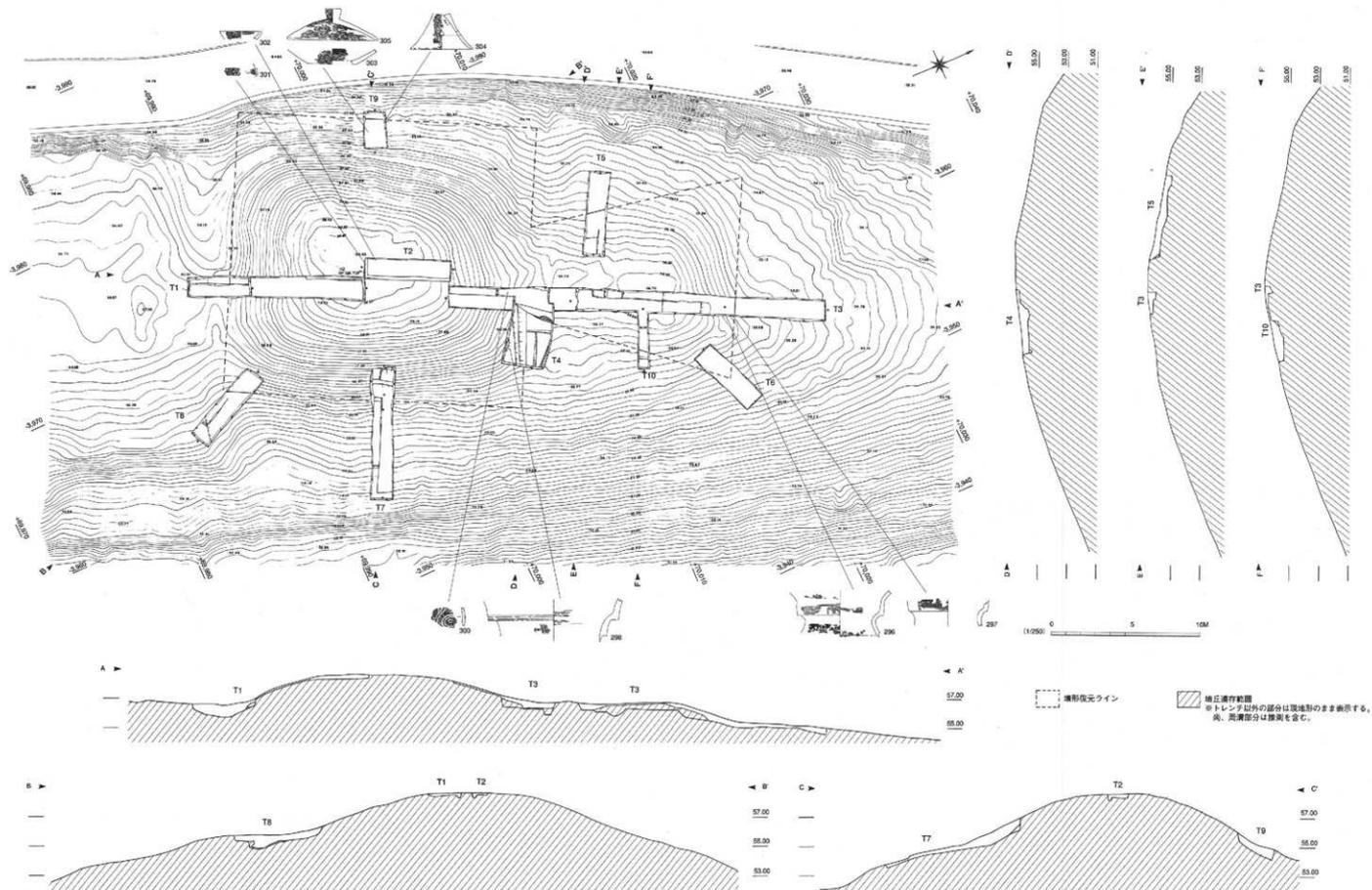
T8



T6 南壁

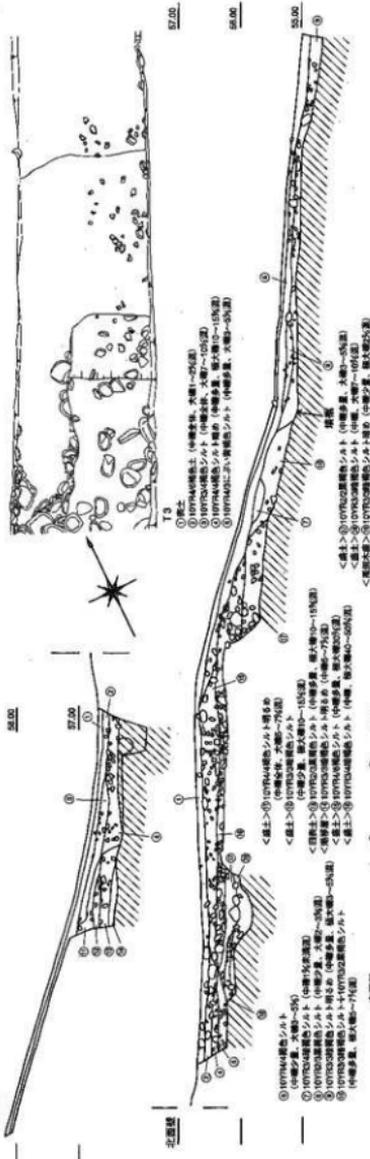


第44図 富崎千里古墳群9号墳 土層断面図T1・T2・T5~T9 (1/80) 及び遺物出土状況図T2・T9 (1/50)

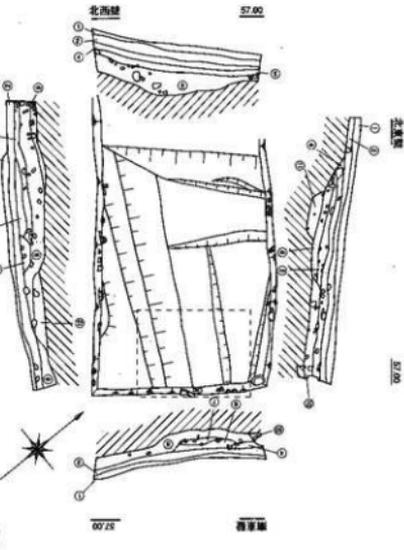


第46図 富崎千里古墳群9号墳 調査概要図及びエレベーション図 (1/250)、主な遺物の出土位置 (1/8)

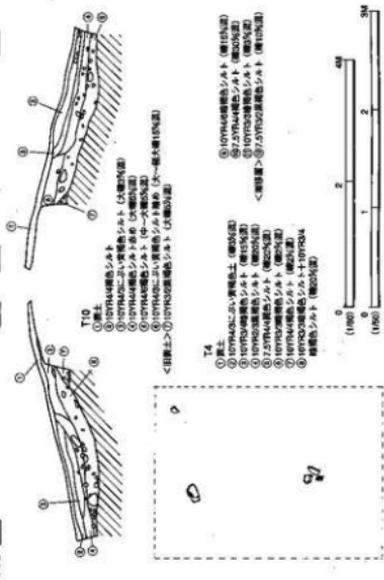
T3 北西壁



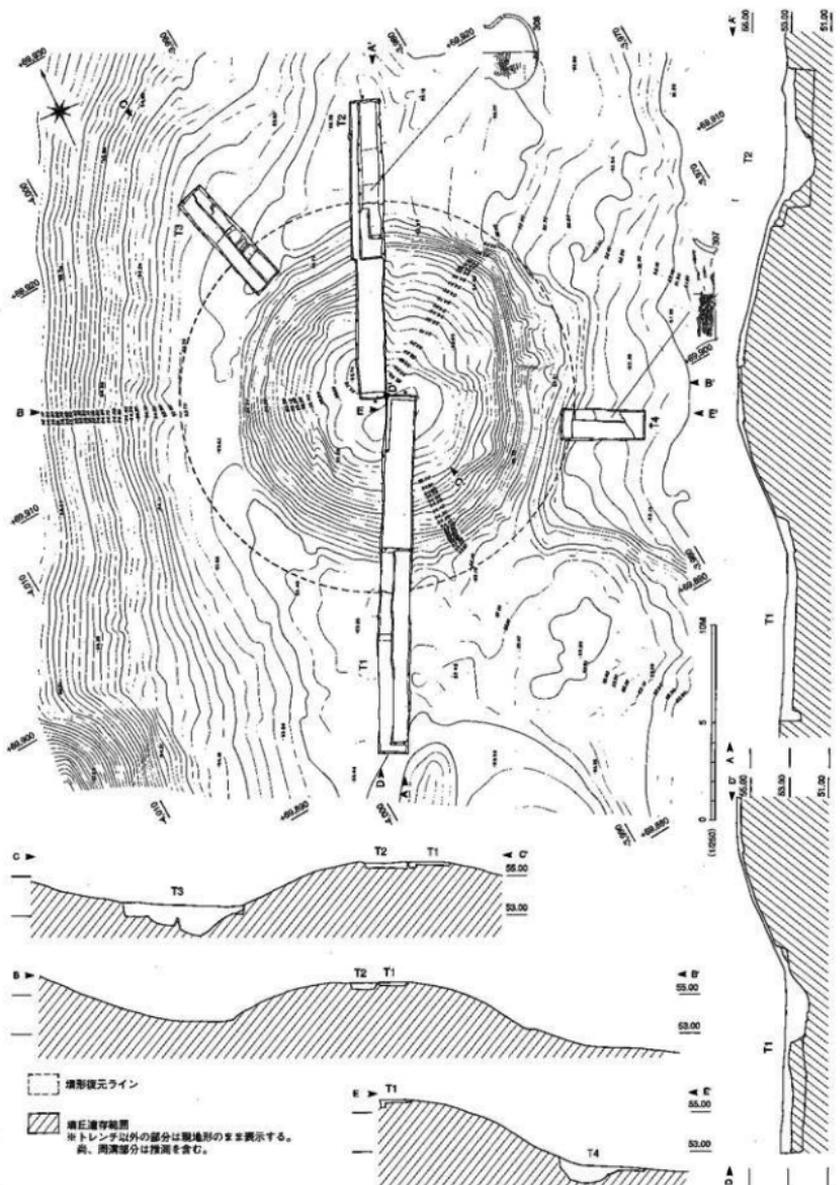
T4



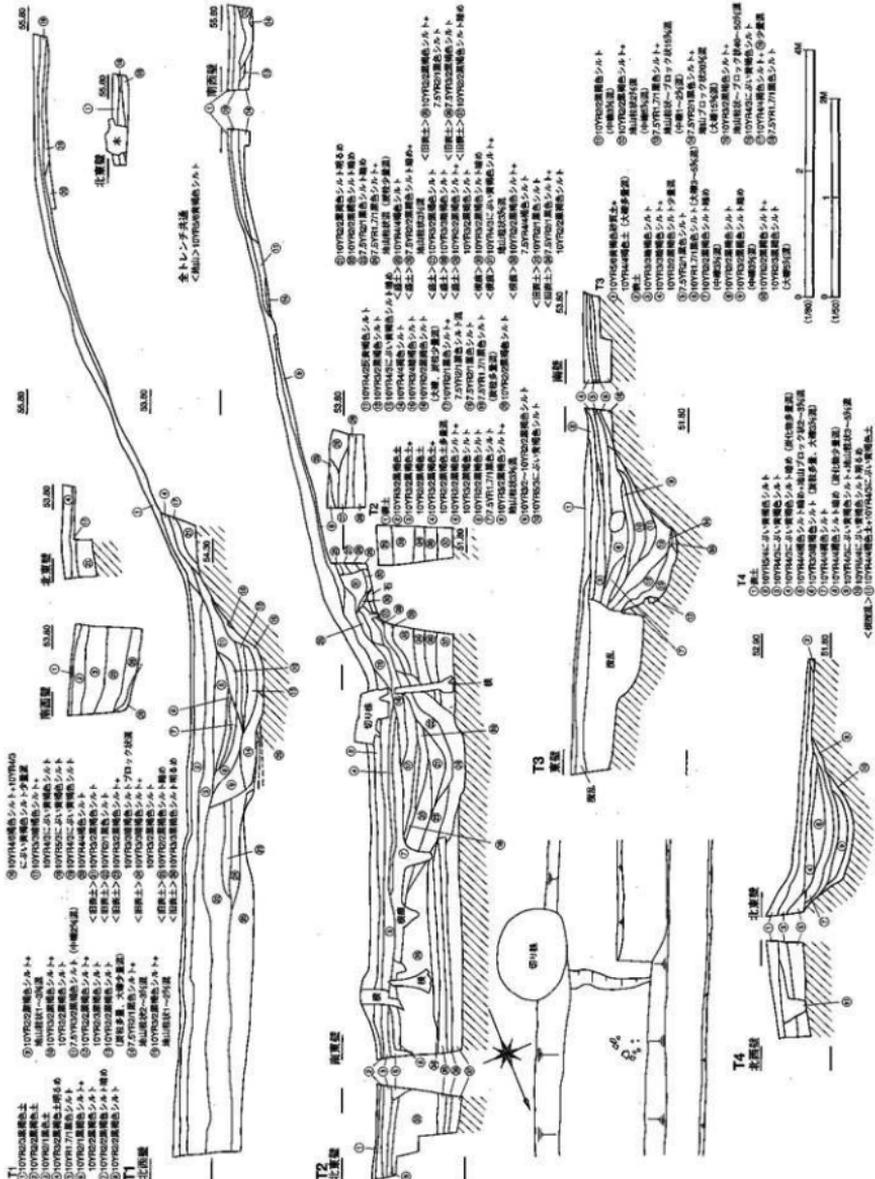
T10



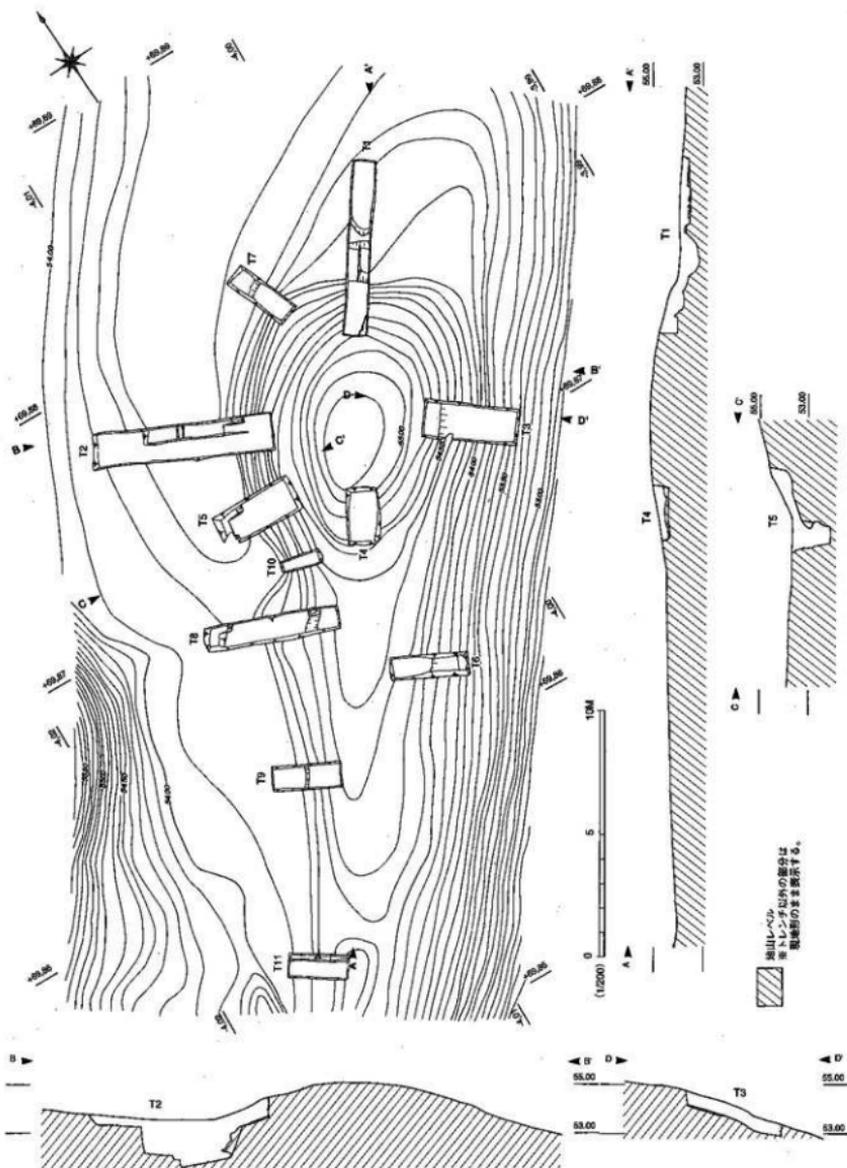
第46図 富崎千里古墳群9号墳 土層断面図T3-T4-T10(1/80)及び平面図T4(1/80)、遺物出土状況図T3-T4(1/50)



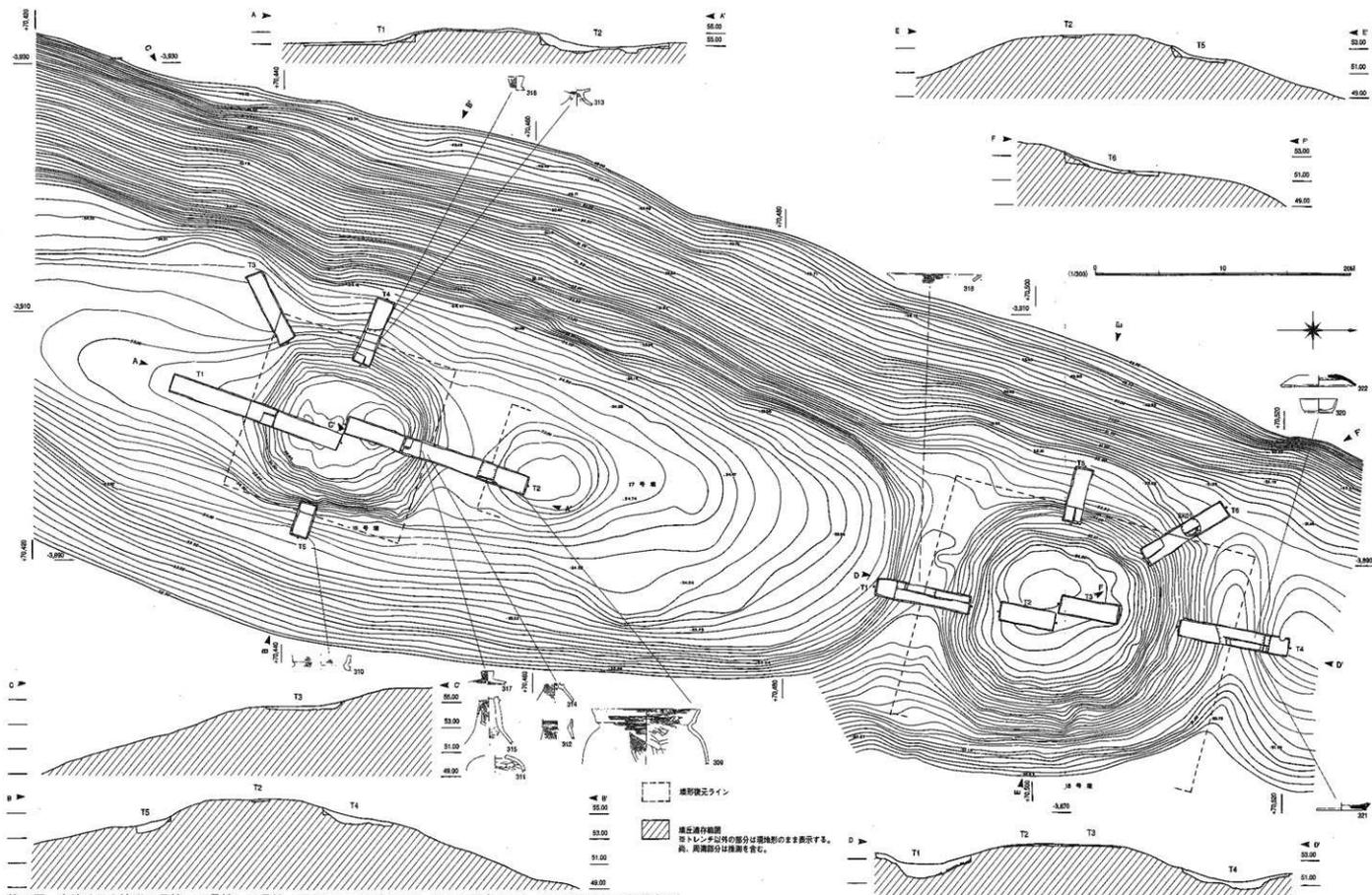
第47図 富崎千里古墳群10号墳 調査概要図及びエレベーション図(1/250)、主な遺物の出土位置(1/8)



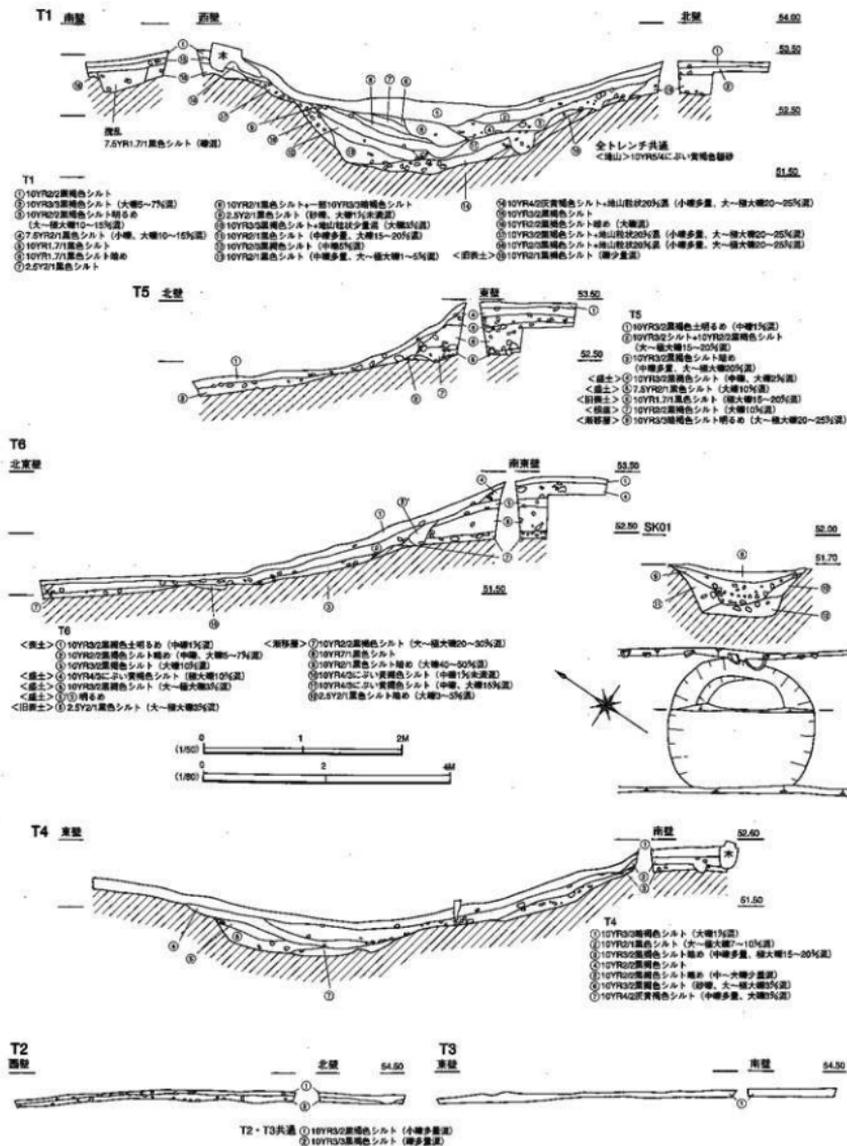
第48図 藤崎千厩古墳群10号墳 土層断面図T1~T4 (1/80) 及び遺物出土状況図T2 (1/50)



第49図 富崎千里古墳群12号墳推定地 調査概要図及びエレベーション図 (1/200)



第52図 富崎千里古墳群16号墳・17号墳・18号墳 調査概要図及びエlevation図 (1/300)、主な遺物の出土位置 (1/8)



第53図 富崎千里古墳群18号墳 土層断面図T1~T6 (1/80) 及びT6SK01断面図 (1/50)

2号墳 (288・289・4号墳)



288



289

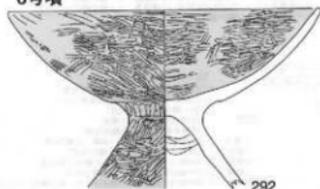


290

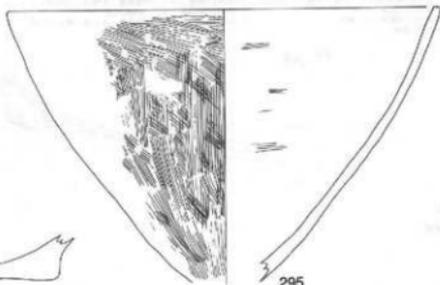


291

6号墳



292



295



293

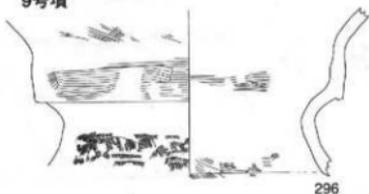


294

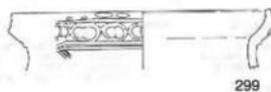
赤彩

0 5 10 15cm

9号墳



296



299



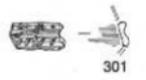
300



303



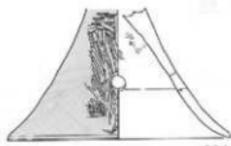
297



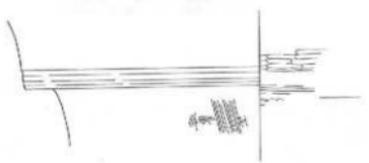
301



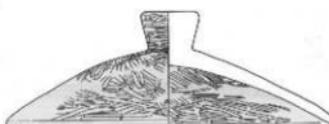
302



304

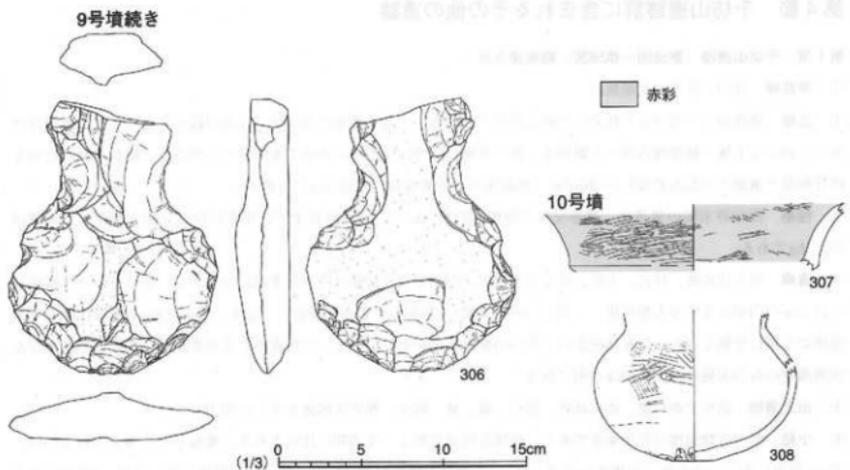


298

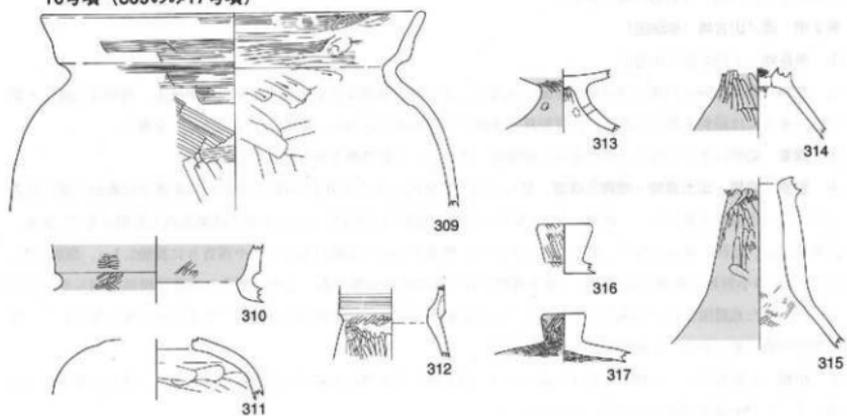


305

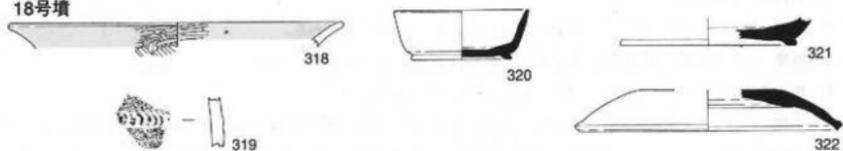
第54図 富崎千里古墳群2号墳・6号墳・9号墳 出土遺物(1/3)



16号墳 (309のみ17号墳)



18号墳



第55図 富崎千里古墳群10号墳・16号墳・18号墳 出土遺物(1/3)

第4節 千坊山遺跡群に含まれるその他の遺跡

第1項 千坊山遺跡(第56図～第58図、観察表⑧⑨)

(1) 所在地 長沢・新町・羽根地内

(2) 立地 標高34.7～52.0mの独立した河岸段丘上に立地し、北・西側は谷を挟んで河岸段丘となり、更に西側は丘陵へと続いて王塚・勅使塚古墳へと繋がる。南・東側には井田川とその支流である辺呂川が流れ、婦負平野が広がる。段丘裾部と遺跡との比高差は8.7～26.0m(標高26.0m～標高34.7～52.0m)を測る。

(3) 性格 弥生終末期の集落跡。遺跡全体の規模は約14.4haで、うち現在までに堅穴住居の分布を確認した面積は約4.1haである。

(4) 遺構 堅穴住居跡、柱穴、土坑、溝などを検出した。堅穴住居跡は段丘北半部に24棟が見つかっており、直径8～11.5mの円形を呈する大型住居、一辺7、8mの(長)方形を呈する中型住居、一辺4、5mの(長)方形を呈する小型住居の3種に分類できる。分布状況から、大小の堅穴住居がセットになって構成される世帯が、3箇所想定できる。試掘調査のみの実施の為、詳細は不明である。

(5) 出土遺物 弥生土器の甕、壺、高杯、器台、蓋、鉢、匙が、堅穴住居跡を中心に出土した。

(6) 小結 県内有数規模の弥生集落であり、帰属年代は月影Ⅰ・Ⅱ式期に比定される。墓地として考えられるのは、350m南西にある六治古塚(四隅突出型墳丘墓)や270m南西にある向野塚(前方後方形墳丘墓)の他、約200m北方にある添ノ山古墳(方形墳丘墓)がある。

第2項 添ノ山古墳(第59図)

(1) 所在地 下呂字添ノ山地内

(2) 立地 標高約50mの独立河岸段丘南端に立地し、北・南・西側は谷を挟んで河岸段丘が続き、西側は丘陵へと繋がる。東方には婦負平野が広がる。丘陵裾部と遺跡との比高差は26.0m(標高23.0～50.0m)を測る。

(3) 調査 昭和41年に土取り工事に先立ち岡崎卯一氏によって緊急調査が行われている。

(4) 形態・規模・出土遺物・埋葬主体部 地元の荒木宗男氏によると国道359線としらとり養護学校敷地の境に位置していたが土取り工事によって消滅した。文献によると、四隅がほぼ方位と合致する2段築成の方形墳丘墓で、北東・南西辺26m、北西・南東辺24m、高さ約3mを測り、埋葬主体部には墳頂部中央やや西寄りに長軸2.1m、短軸1.3m、深さ1.7mの小判形の墓壇が存在した。出土遺物には土師器や須恵器があったが、墳丘との共存関係は明らかでないという。また地籍図からは周溝が巡っていたことが推測されている。規模的には南西にある六治古塚と似ており、四隅突出型墳丘墓であった可能性もあるかもしれない。

(5) 小結 基盤集落として最も可能性が高いのは、谷を挟んで南側にある千坊山遺跡であり、この遺跡と併行する時期と考えると帰属年代は月影式期に比定されるか。

第3項 富崎遺跡(第60図)

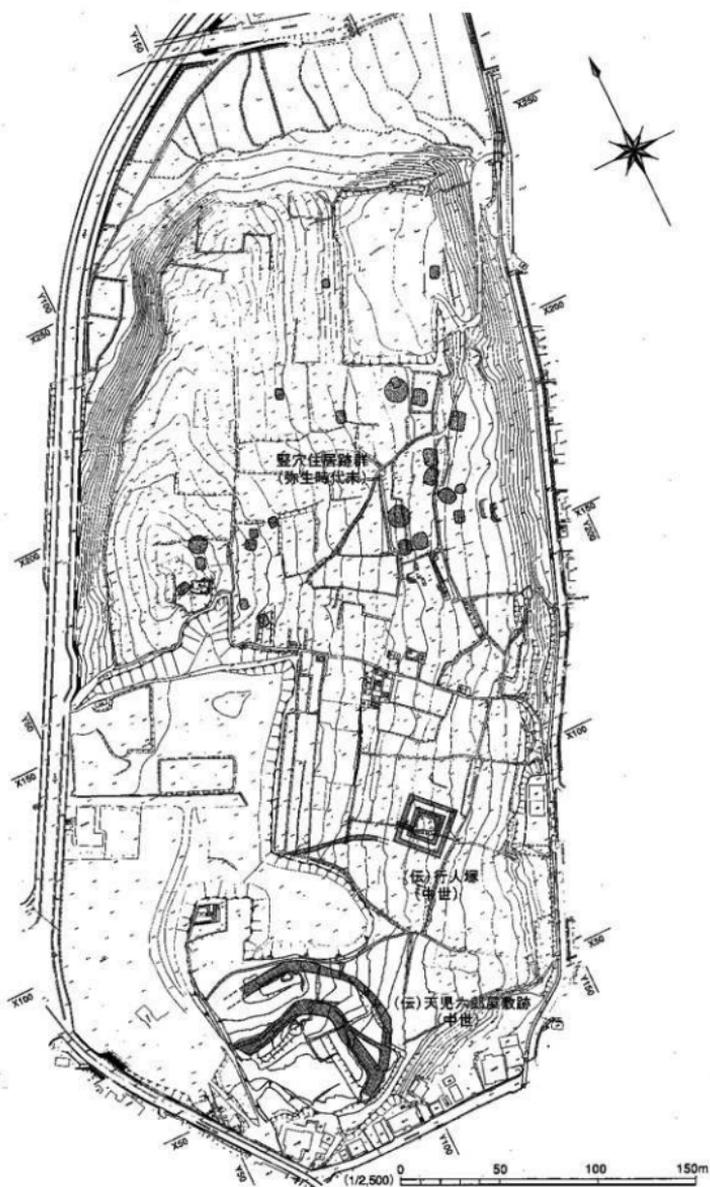
(1) 所在地 富崎地内

(2) 立地 標高26mの山田川右岸の平野に立地し、西側には富崎丘陵がある。

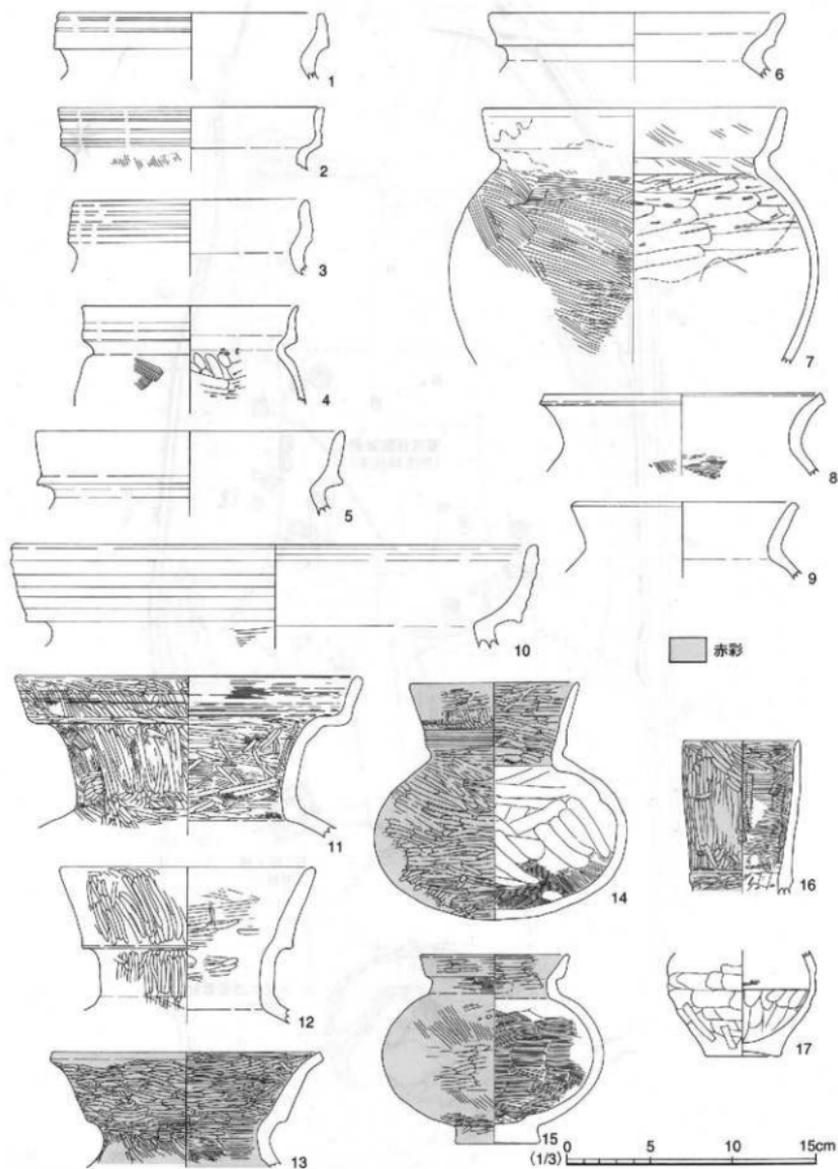
(3) 性格 弥生終末期の集落跡で、遺跡南部で弥生土器が集中して採集されている。

(4) 出土遺物 弥生土器の甕、壺、高杯、器台、碗などが採集された。

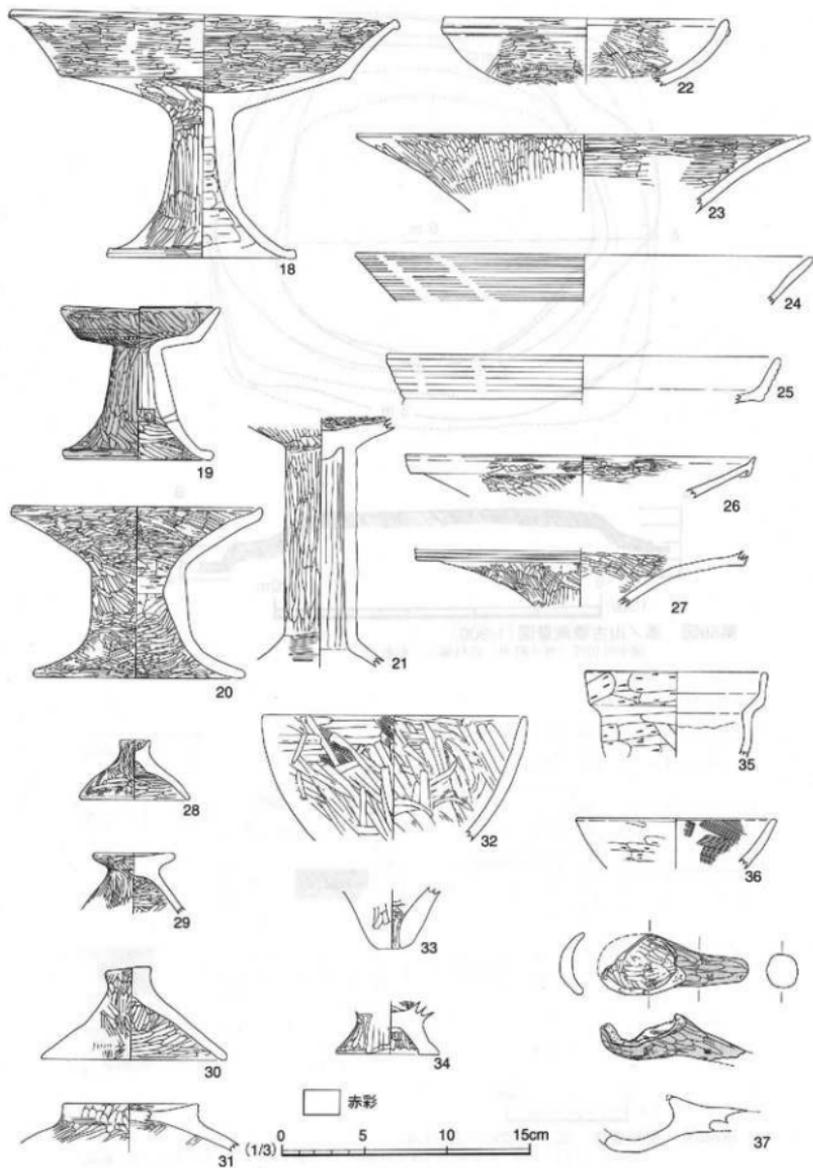
(5) 小結 帰属年代は月影Ⅰ・Ⅱ式期に比定される。昭和57年～61年の県営圃場整備事業の際に亀田正夫氏によって遺物が採集された。しかし、弥生時代の遺構・遺物の存在が推測される範囲での発掘調査は実施しておらず、詳細は不明である。墓域として考えられるのは、170m北西の丘陵上にある富崎墳墓群(四隅突出型墳丘墓)がある。



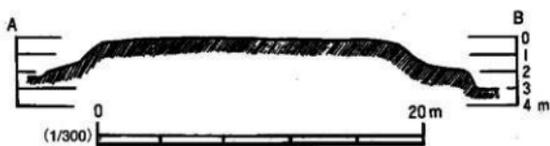
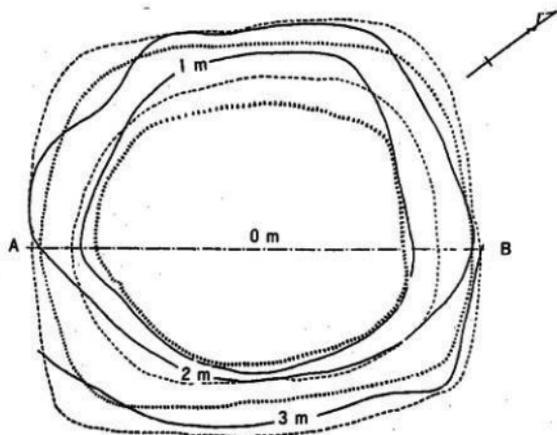
第56図 千坊山遺跡概要図 (1/2,500)



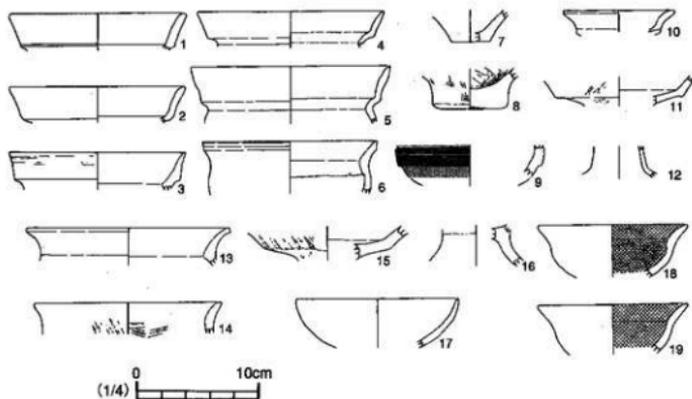
第57図 千坊山遺跡 出土遺物の一部(1/3)



第58図 千坊山遺跡 出土遺物の一部(1/3)



第59図 添ノ山古墳測量図(1/300)
 婦中町1997「婦中町史」資料編より転載



第60図 富崎遺跡 出土遺物の一部(1/4)
 岡本淳一郎1991「婦中町富崎地内採集の遺物」【大境】13号 富山考古学会より転載

第4項 王塚古墳(第61図)

(1) 所在地 羽根字下平

(2) 立地 標高130mの丘陵東縁辺部尾根上に立地する。南方は谷を挟んで400m地点にある勸使塚古墳が立地する尾根へと繋がり、東方は婦負平野が広がる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は101.2m(標高30.0~131.2m)を測る。

(3) 調査 平成2~3年に富山大学人文学部考古学研究室による測量調査が行われており、奈良県桜井市箸墓古墳(前方後円墳)の5/1規模相似墳と復元された(富山大学人文学部考古学研究室 1990)。

(4) 形態と規模 前方後方墳。墳丘規模は、現状で、全長58m、後方部長31m、前方部長27m、後方部幅33m、前方部幅26m、くびれ部幅15mを測り、墳丘裾部と後方部頂部の比高差は約7.6m(標高131.2~138.8m)を測る。現在県下4位の規模の前方後方墳である。前方部は後方部に比べ小さく、くびれ部から先端部にかけて傾斜して高まりながら細く開くもので、くびれ部と後方部頂部の比高差は約5mと大きいなど、出現期古墳の様相を呈する。墳丘西側には周溝らしき幅の広く浅い窪みが認められる。墳丘の主軸は真北から41°東に振る。

(5) 埋葬主体部・出土遺物 未調査の為不明。

(6) 小結 国指定史跡(昭和23年.1.14)。古墳時代初頭の築造。勸使塚古墳と類似する形態であり、前後する時期と考えられる。細い道を挟んで北側の富山市には長辺約13m、短辺約10m、高さ約2mの方墳(王塚古墳陪塚)がある。

第5項 勸使塚古墳(第61図)

(1) 所在地 羽根字上前割

(2) 立地 標高130mの丘陵北東縁辺部尾根上に立地する。北方は谷を挟んで王塚古墳が造られる尾根へと繋がり、東方には婦負平野が広がる。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は97.8m(標高30.0~127.8m)を測る。

(3) 調査 平成10年度に文化振興財団理蔵文化財調査事務所による試掘調査が行われており、本報告が待たれる。

(4) 形態と規模 前方後方墳。墳丘規模は、全長66m、後方部長35m、前方部長31m、後方部幅37m、前方部幅24m、くびれ部幅11mを測り、墳丘裾部と後方部頂部の比高差は約8.8m(標高127.8~136.6m)を測る。前方部は後方部に比べ小さく、くびれ部から先端部にかけて傾斜して高まりながら細く開くもので、くびれ部と後方部頂部の比高差は約6m(標高130.0~136.0m)と大きいなど、出現期古墳の様相を呈する。墳丘の造成方法は、丘陵側には浅い周溝を巡らせ、平野側にはテラスを作り盛土を施す。主軸は真北から60°東に振る。

(5) 埋葬主体部 後方部中央に、長軸に並行した長さ6.2m以上幅6.1mの長方形の墓坑が検出されている。また、地表面から約2m下層で郭の痕跡が確認され、木棺が安置されていると推測されている。

(6) 出土遺物 土師器(壺、高杯、甕)が墳頂部及び周溝内から出土している。

(7) 小結 県指定史跡(昭和40年.10.1)。県内最古の定型化した大型前方後方墳であり、県下第2位の規模を誇る。古厩ケルビ式期に比定される。

第6項 鍛冶町遺跡

(1) 所在地 長沢字鍛冶町地内

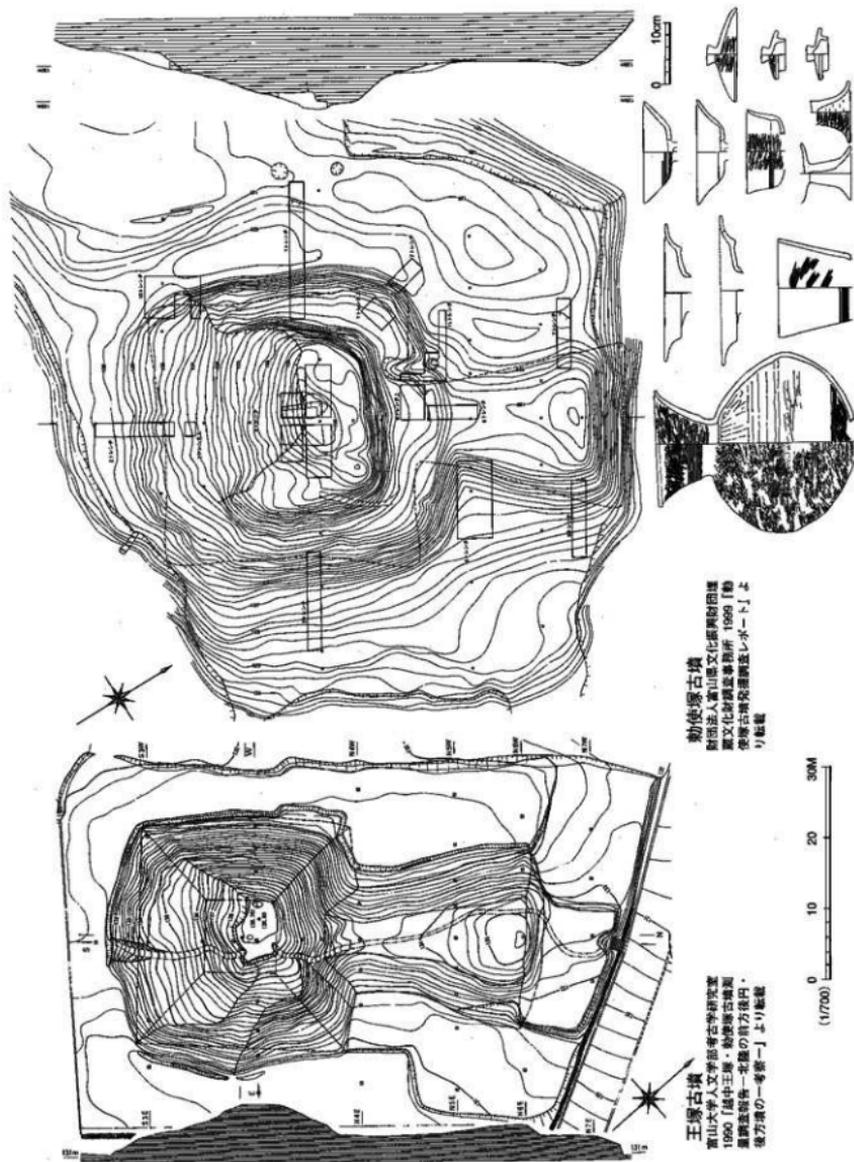
(2) 立地 標高30mの平野上に立地し、西側は河岸段丘になり、東方には婦負平野が広がる。

(3) 性格 弥生時代後期~古墳時代前期の集落跡。

(4) 遺構 竪穴住居跡、柱穴、土坑、溝などを検出。竪穴住居跡は3棟確認しており、平面形が直径6m以上のもの、一辺約8mの隅丸方形のもの、一辺約6mの隅丸方形のもの3種類を本調査している。

(5) 出土遺物 弥生土器・土師器の甕、壺、高杯、器台、鉢、蓋などが出土した。

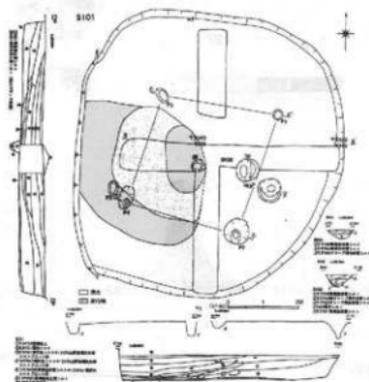
(6) 小結 帰属年代は法仏式期~高島式期に比定される。墓地としては、南西にある鏡板墳墓群が考えられる。詳細については平成14年度発行予定の鍛冶町遺跡発掘調査報告書で報告したい。



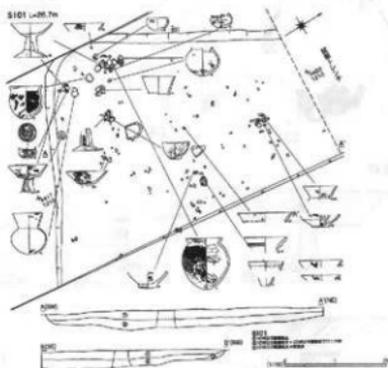
第61図 王塚古墳及び勅使塚古墳測量・復元図(1/700)、勅使塚古墳の遺物実測図(1/8)

第7項 南部Ⅰ遺跡 (第62図～第65図)

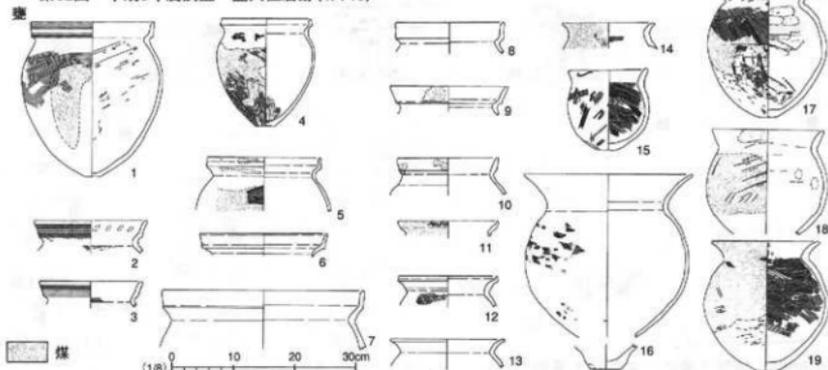
- (1) 所在地 鳥田、熊野道地内
- (2) 立地 標高27～30mの井田川扇状地上に立地し、東は西高吉川と西は鈴川に挟まれた場所に位置する。
- (3) 性格 弥生終末期から古墳時代にかけての集落跡で、北は上吉川Ⅰ遺跡(月影Ⅱ式期の集落)に、南は翠尾Ⅰ遺跡(八尾町、法仏式～白江式期の集落)に隣接する。
- (4) 遺構 竪穴住居跡、柱穴、土坑、溝などを検出した。竪穴住居跡は、直径8.4m、深さ70cmの円形を呈するもの、一辺6m、深さ30cmの隅丸方形を呈するもの2種類を本調査している。一帯の試掘調査では、同期の遺構・遺物の分布を広いエリアで確認している。
- (5) 出土遺物 弥生土器の甕、壺、高杯、器台、蓋、鉢、椀、古墳時代の土師器の甕、壺、鉢、高杯などが出土した。遺跡存続期間を通して外来系土器の影響が弱く、古墳時代前期(高島式期)になっても布留甕の定着は認められない。
- (6) 小結 埴輪年代は月影Ⅰ式期～高島式期に比定される。弥生時代の墓域は不明。古墳時代の墓域は、西方1.8kmの高崎丘陵にある富崎千古墳群の可能性がある。



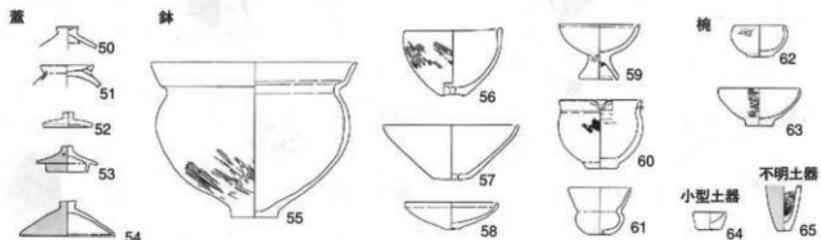
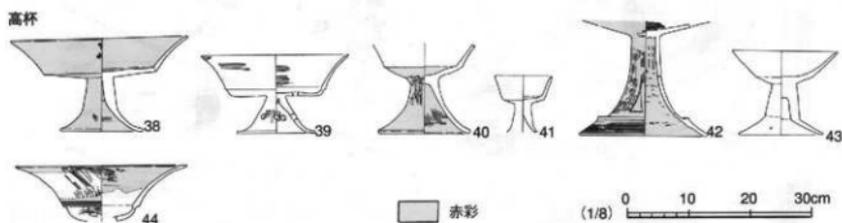
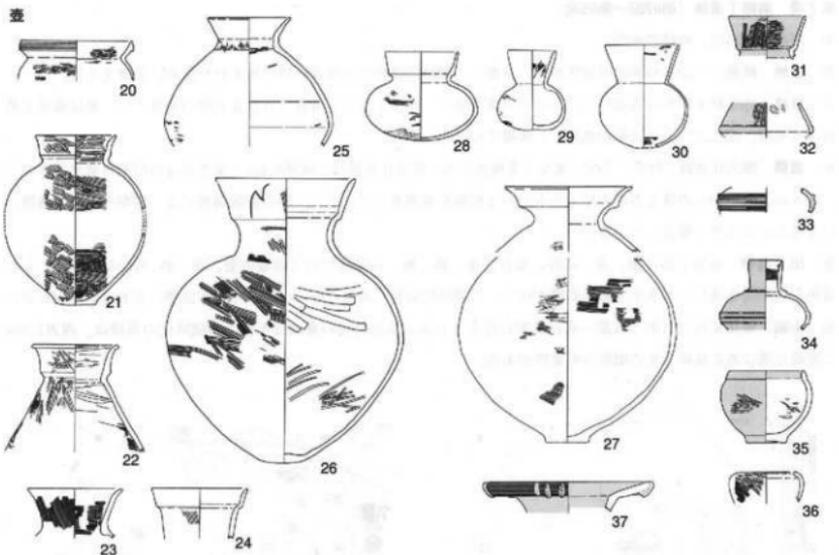
第62図 平成9年度調査 竪穴住居跡(1/140)



第63図 平成11年度調査 竪穴住居跡(1/100)



第64図 主な出土遺物(1/8)



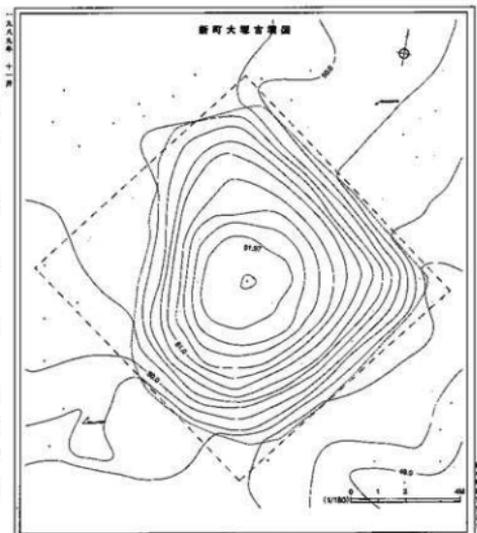
第65図 南部I遺跡 主な出土遺物(1/8)

※ 26は上吉川I遺跡より出土

第8項 墳丘墓・古墳の可能性ある遺跡

(1) 新町大塚古墳 (別称チンチン山)

- ① 所在地 新町字大塚
- ② 立地 標高50mの河岸段丘東縁部に立地する。西方には王塚・勅使塚古墳が、東方には添ノ山古墳があり、南方には千坊山遺跡、六治古塚、向野塚がある。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は26.0m (標高23.0~50.0m)を測る。
- ③ 調査 平成元年に婦中町教育委員会が測量調査を実施している。
- ④ 形態と規模 方墳か。墳丘は、西側を中心に後世の開発によって削平を受けている。規模は、北西・南東辺11m、北東・南西辺10.5m、高さ2.5mを測り、墳頂部の平坦面は狭い。主軸は北から53°西に振る。墳頂部には梵字“バン”が彫り込まれた安山岩製の板石塔婆があり、中世の塚に転用された可能性もある。
- ⑤ 埋葬主体部・出土遺物・築造時期 未調査の為不明。



第66図 新町大塚古墳測量・復元図(1/180)
1999年11月婦中町教育委員会測量図に基き

- ⑥ その他 本古墳南西方には小さな土饅頭状の高まりがいくつか存在するが、地元住民によると、これは明治時代から大正時代に瓦粘土採掘のため表土を掘削して盛り上げた際の残土であり、墳丘ではないということである。

(2) 小長沢古墳群

- ① 所在地 小長沢字宮ノ高
- ② 立地 標高51mの河岸段丘東縁部に立地する。千坊山遺跡の北方約1.2kmにある。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は約33m (標高18~51m)を測る。
- ③ 調査 1号墳は、平成3年度に富山県埋蔵文化財センターによる発掘調査が実施されている (県埋蔵センター1992)。
- ④ 形態と規模 6基の古墳で構成されていたと伝えられているが (婦中町史1997)、現在遺存するのは3号墳のみである。3号墳は方墳と考えられ、長軸17m、短軸14m、高さは2mを測る。現在、頂部には社殿が建つ。1号墳は平成3年度の調査の結果、直径14~15m、高さ1.5mを測る円墳と推測され、周囲に深さ20~40cmの溝が巡っていたという。江戸時代の骨壺の破片が発見されており、後世の墓に転用された可能性が推測されている。
- ⑤ 埋葬主体部・出土遺物・築造時期 不明。

(3) 小長沢北塚

- ① 所在地 小長沢字宮ノ高
- ② 立地 標高40mの河岸段丘東縁部に立地する。千坊山遺跡の北方約1.5kmにある。丘陵裾部と墳丘裾部との比高差は約22m (標高18~40m)を測る。
- ③ 形態と規模 円墳か。墳丘は、直径23m、高さ1.9mを測り、西側には幅6.4mの周溝が観察できる。
- ④ 埋葬主体部・出土遺物・築造時期 未調査の為不明。

墳丘墓・古墳は、この他にも、不確実なものがあり、また把握していないものもあると思われる。

Ⅲ ま と め

第1節 千坊山遺跡群の変遷と様相

この地域には、弥生時代に入ってから後期前半に至るまでの遺跡は殆どみられない。唯一、富崎丘陵裾に弥生時代中期（小松式期）の小規模集落である千里C遺跡があるのみである。弥生時代後期後半（法仏式期）になると、富崎丘陵に高地性集落が出現し、その後井田川・山田川合流域において広く遺跡が分布するようになる。そしてそれらは月影式期から古府クルビ式期に最盛期をむかえ、高島式期には衰退する（表4）。ここでは、本遺跡群を集落と墓地のセット関係によって、千坊山・鍛冶町・富崎・南部の4つの集団にグルーピングし、その変遷と様相をまとめてみたい。

第1項 弥生時代

(1) 時期別変遷

千坊山遺跡群の成立・発展期である弥生時代後期から終末期は、以下の3期に細分できる。各グループの分布状況と一覧は第67図、表5のようになる。

I 期（法仏式期） 富崎・鍛冶町グループ

山田川右岸の富崎丘陵上に高地性集落（富崎赤坂・廻山砦遺跡）が出現し、丘陵縁辺部に県内初の四隅突出型墳丘墓（富崎3号墓）が築造される。また、富崎グループと同時期もしくは少し後の時期には鍛冶町グループが出現し、山田川左岸の丘陵裾の平野に集落が営まれる。当期に造られた四隅突出型墳丘墓は、大型の四隅掘り残しタイプである。

II 期（月影I式期） 千坊山・鍛冶町・富崎・南部グループ

I期に出現した富崎グループ、鍛冶町グループに加え、新たに2箇所に集落（千坊山遺跡、南部I遺跡）が出現する。これら4つのグループの集落・墓の規模には大きな格差は認められず、等質的である。集落の立地は、富崎グループは富崎丘陵上から裾部の平野に移り、鍛冶町グループはI期のまま、南部グループは富崎丘陵から1.8km離れた井田川左岸の平野に、千坊山グループは山田川左岸・辺呂川左岸の独立河岸段丘上にある。墓地には、四隅突出型墳丘墓が引き続き造られ、I期で造られた大型の四隅掘り残しタイプ（鏡坂1号墓）に加え、周溝が全周し、独特の形態の突出部を持つ中型墓（富崎2号墓）と小型墓（鏡坂2号墓）が丘陵縁辺部に築造される。

遺 跡 名	時 代	弥 生 時 代				古 墳 時 代		
		後 期		終 末 期		前 期		
		前 半 猫橋式	後 半 法仏式	月影I式	月影II式	白江式	古府クルビ式	高島式
富崎グループ	富崎赤坂遺跡・廻山砦遺跡							
	富崎遺跡							
南部グループ	富崎墳墓群							
	南部I遺跡							
鍛冶町グループ	富崎千里古墳群							
	鍛冶町遺跡							
千坊山グループ	鏡坂墳墓群							
	千坊山遺跡							
	六治古塚							
	向野塚							
	添ノ山古墳							
移谷グループ	駒鞍塚古墳							
	王塚古墳							
	移谷古墳群・移谷A遺跡							

表4 千坊山遺跡群の消長 は集落

※移谷グループは富山市呉羽丘陵

Ⅲ 期（月影Ⅱ式期） 千坊山・鍛冶町・富崎・南部グループ

Ⅱ期に営まれた等質的な4つのグループがそのまま存続する。墓地には引き続き四隅突出型墳丘墓が造られ、周溝が全周する大型墓（六治古塚）と中型墓（富崎1号墓）が丘陵縁辺部に築造される。また、千坊山グループでは県内最古の前方後方形墳丘墓（向野塚）も出現する他、方形墳丘墓（添ノ山古墳）もこの時期と推測される。南部グループの墓域は不明であり、西方の富崎丘陵に未確認の墳丘墓が存在する可能性がある他、県内の上市町飯坂遺跡や大門町布目沢北遺跡などの例から集落の傍に墓域が位置する可能性も考えられる。

(2) 集落

遺跡群出現期に高地性集落が短期間造営されて以後、各グループ毎に推移した。集落構成については、竪穴住居は直径8～11.5mの円形を呈する大型住居、一辺6～8mの(長)方形を呈する中型住居、一辺4、5mの(長)方形を呈する小型住居の3種に分類できる。各種の竪穴住居がセットになって一つの世帯を構成していたものと推測される。しかし、掘立柱建物や水田跡などはまだ確認していない。出土遺物は土器のみで、竪穴住居周辺や土器廃棄場を中心に出土する他、南部Ⅰ遺跡では赤彩土器などが溝に一括廃棄されていた。農耕に関連する祭祀が行われていたことが推測される。

(3) 墓地

各グループが共通して、突出部が特形円形に肥厚する独特の四隅突出型墳丘墓を造る特徴がある。また前方後方形墳丘墓も1基存在し、系譜の異なる墓が一地域に共存する特徴もみられる。本遺跡群の北方約2.4kmの具羽丘陵上にある高山市の杉谷古墳群と杉谷A遺跡（第69図）では、四隅突出型・方形墳丘墓と周溝墓群の並存が確認されており、本遺跡群でも未調査地区に周溝墓が存在する可能性があるだろう。

さて、本遺跡群の四隅突出型墳丘墓は次の4タイプに分類できる。

- A. 大型（側辺部一辺22～24.1m、高さ3.9～4.8m）・四隅掘り残しタイプ……………富崎3号墓、鏡坂1号墓
- B. 大型（側辺部一辺24.5m、高さ5.1m）・周溝全周タイプ……………六治古塚
- C. 中型（側辺部一辺21.7m、高さ3m）・周溝全周タイプ……………富崎1・2号墓
- D. 小型（側辺部一辺13.7m、高さ3m）・周溝全周タイプ……………鏡坂2号墓

Aタイプは造墓年代が古く周溝を四隅のみ掘り残すもので、伝統的な周溝墓の形態を踏襲する。他の周溝全周タイプのうちB、Dについては厳密には半円周溝ではなく削り出しのみとなっているが、突出部にも溝を巡らせて区画することを基本としており、周溝墓の形態から伸展した在り方として評価できる。グループ別に墓地構成をみると、富崎グループはA・Cタイプ、鏡坂グループはA・Dタイプと、大型と中型、小型がセットになる。一方最も新しい千坊山グループは、Bタイプとそれと同規模の前方後方形墳丘墓と方形墳丘墓という3基の大型墳丘墓によって構成

位置	グループ	集 落			墓 地					
		名 称	立 地	時 期	四隅突出型 墳 丘 墓	前方後方 形墳丘墓	方形墳丘墓	周 溝 墓	立 地	時 期
南 ↓ 富 ↓ 鍛 ↓ 千 ↓ 坊 ↓ 山 ↓ 北	南 部	南部Ⅰ遺跡	平野	月影Ⅰ・Ⅱ				未 確 認		
	富 崎	富崎赤坂・権山谷遺跡	丘陵	法仏、月影Ⅰ	富崎墳墓群 (1・2・3号墓)	—	—	未確認	丘陵	法仏、 月影Ⅰ・Ⅱ
		富崎遺跡	平野	月影Ⅰ・Ⅱ						
	鍛 冶 町	鍛冶町遺跡	平野	法仏、月影Ⅰ・Ⅱ	鏡坂墳墓群 (1・2号墓)	—	—	未確認	段丘	月影Ⅰ
	千 坊 山	千坊山遺跡	段丘	月影Ⅰ・Ⅱ	六治古塚	向野塚	添ノ山古墳	未確認	段丘	月影Ⅱ
杉 谷	?	?	?	杉谷古墳群 (4号古墳)	—	杉谷古墳群 (8・9号古墳他)	—	段丘	月影Ⅰ ～白江	
				—	—	—	杉谷A遺跡 (方形17、円形1)	段丘	月影Ⅱ	

表5 綿負丘陵における弥生時代後期～終末期のグループ別遺跡一覧 ※杉谷グループは富山市具羽丘陵で古墳時代を含む

された。その基盤集落である千坊山集落の堅穴住居跡群は3群にまとまりをみせる為、群毎に墓域があった可能性が高い。各グループの大型墳丘墓には突出した差は認められないが、時期を追うごとに大規模化する傾向がある。

全墳丘墓に共通する属性には、①葺石、貼石が存在しない、②単葬である、③在地系土器を祭祀儀礼に使用する、④造成方法は丘陵側を中心に削り出しもしくは周溝を巡らせて盛土を施すもので、埋葬主体部は盛土の後に掘り込まれたと推測される、⑤周溝は、突出部側や前方部・後部先端側が浅くて狭く、台状部側辺側は深く広くなり、墳丘側の立ち上がりが急傾斜になる。例えば、四隅突出型墳丘墓A・Bタイプの平均では、台状部側辺側が幅8.2m、深さ119cm、突出部側が幅4.1m、深さ30cmを測り、前方後方墳丘墓では、台状部側辺側が幅3.7m、深さ48cm、前方部・後部先端側が幅1.4m、深さ27cmを測る、⑥対角線にある突出部、前方部と後部を結んだラインの延長線上に集落がある、⑦各グループに2～3基のみの築造であるなどが挙げられる他、四隅突出型墳丘墓については更に、⑧突出部が楕円形に厚層する、⑨規模が大きく盛土を高く盛るなどが挙げられ、各グループに2、3人の特定個人の墓として、他地域の系統の墓でありながら在地的な属性をもつ墓が築かれている。墳丘規模はグループ内で分化しており、特殊な墓に埋葬される立場にあった被葬者層の内にも階層差が存在したことが窺われる。

墳丘墓における出土遺物は、現在のところ土器のみである。出土状況は、a 埋葬主体部上での集中的出土、b 周溝覆土出土、c 盛土内混入、d 土坑内出土などがある。bの多くは墳頂部より転落したものと考えられるが、意図的なものと推測できるものもある(鏡坂2号墓突出部先端周溝出土壺など)。c、dは、築造時期が最も古く土器出土量が群を抜いて多い富崎3号墓のみ見られ、墳丘造成の際盛土に多量の土器破片を混入したり、土墳周囲に壺を据えたり、土坑底部に壺や甕を数個体据えるなどの行為が確認でき、土器を用いた多様な葬送儀礼が行われていたことが考え得る。なお副葬品の組成は、埋葬主体部が未調査の為不明である。土器については第2節第2項で述べる。

第2項 古墳時代

(1) 時期別変遷

本遺跡群の最盛期から衰退期までの古墳時代前期前半は、以下の2期に細分できる。Ⅲ期との間には、社会構造が激変し、墓制の変化、集落の再編など大きな変遷がある。各グループの分布状況と一覧は第68回、表6のようになるが、集落と墓地の対応関係を裏付ける材料が得られていない為、現段階でグルーピングすることは難しい。

Ⅳ期(白江式・古府古式期) 鍛冶町・南部グループ

集落はⅢ期までに形成された4箇所から、平野に立地する南北2箇所(鍛冶町・南部グループ)に整理される。墓地には、県内最古且つ県東部最大の初期大型前方後方墳である勅使塚古墳や王塚古墳が、平野との比高差約100mの丘陵尾根上に築造される。その一方で、平野との比高差20～30mの丘陵縁辺部には、小型の前方後方墳、方墳、円墳で構成される共同墓地(富崎千里古墳群)が造営され、地域一帯の階層分化が進む。現段階では古墳と集落の対応関係は不明確であり、王塚・勅使塚古墳を築いた拠点集落も不明である。

Ⅴ期(高島式期) 鍛冶町・南部グループ

この時期のものには、南部Ⅰ遺跡では堅穴住居跡1棟を確認し、鍛冶町遺跡では土器が出土しているが、その量は前の時期に比して激減する。墓地については不明である。未調査部分を含めても衰退方向にあったものとみられる。

(2) 集落

弥生時代以来の集落が集約され、より広域な共同体に再編成される。ただし集落構造は明らかでなく、掘立柱建物や水田跡なども確認していない。

(3) 墓地

墳形は、円墳が少数あるものの基本的には方墳や前方後方墳など方形を指向する。弥生墳丘墓との築造方法の共通点は、丘陵側を中心に周溝を掘り平野側は広く削り出すことなどがある。一方相違点は、周溝は墳丘側の立ち上がり



第68図 千坊山遺跡群における古墳時代初頭の遺跡分布図(1/20,000)

が緩やかで小型前方後方墳では側辺部が浅くて狭く後部先端が広くて深くなるなど在于方が逆になることや、周溝と墳丘の間に盛土崩落防止のテラスを設けるものがある他、前方後方墳では後方を南西（牛岳方面）に側辺部を平野に向け、主軸方向決定の際に意識する点に変化するなどの異なる造墓原理が働く。また、土器についても、器種構成比率が変化すると共に、祭式土器を中心に東海系・畿内系土器が波及するなどの変化が認められる（第2節第2項）。

婦負を含む富山平野には、千坊山遺跡群の他にも富山市の金谷龜山古墳群や杉谷古墳群など（第69図）内部に階層性を孕む集団が数箇所あり、これらを束ねた首長の墓が王塚・勅使塚古墳と考えられる。富崎千里古墳群は少なくとも4群に分けられ、内部に階層性がある。平野を細分した小地域をまとめ首長を支えたリーダー層とその関係者が計画的に葬られた共同墓地と考えられる。

前方後方墳丘墓から前方後方墳への変遷については赤塚次郎氏によって整理されており、それによると前方後方墳丘墓を逸早く定型化し普及させた地域は東海地方であり、初源が陸橋部をもつ周溝墓型墳丘墓（B1型）で、そこから発展し前方部が整い（B2型）、周溝が全周するもの（B3型）が出現して、前方後方墳（C型）が誕生した（赤塚1992）。北陸地方の前方後方墳丘墓は、基本的には全長30m以下の小規模な墳丘をもち周溝で区画するもので、向野塚もこれにあたる。向野塚は東海地方においてB3型墳丘墓が普及した直後に造られたと見られるが、能登・加賀では若干それに後出するようである。県内では向野塚と類似した古墳に全長30mの高岡市石塚2号墳があり、勅使塚古墳に後続する古墳には水見市柳田布尾山古墳（第69図）がある。全長に対する前方部の比率では、古いものから順に向野塚0.40、石塚2号0.40、富崎千里0.41、勅使塚0.47、王塚0.47、柳田布尾山0.47となり、後方部幅に対する前方部幅の割合では、向野塚0.49、石塚2号0.58、富崎千里0.72、勅使塚0.65、王塚0.79、柳田布尾山0.93となり、前方部が発達していく過程が分かる。なお、墳丘墓・古墳には円形土坑を伴うものがあり（富崎3号墓、六治古塚、向野塚、富崎千里古墳群6・18号墳）、なかには焼土もあるが出土遺物はなく性格は分からない。

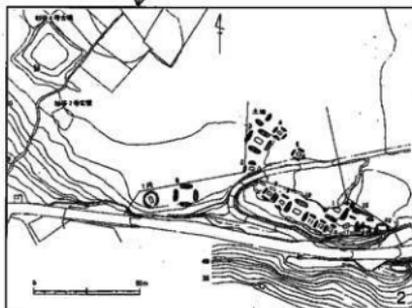
出土遺物は現在のところ土器のみであるが、古墳での出土量は弥生墳丘墓に比べ減少する。富崎千里古墳群では墳頂部にトレンチを浅く掘削したが墓塚ラインは検出できず、主体部を埋めた後墳丘全体に盛土をしたことが推測される。富崎千里9号墳では破砕された赤彩土器が墳頂部中央の一部に撒かれており、埋葬主体部上において供獻土器破砕儀礼が行われたと考えられる。それに対し富崎千里6・10・16・18号墳では墳頂部には土器が殆ど出土せず、9号墳との儀礼の差が窺える。副葬品の組成は埋葬主体部が未調査であり、不明である。土器については第2節第2項で述べる。

位置	集落			墓 地					
	名称	立地	時期	前方後方(円)墳 ※金谷龜山のみ円	四隅突出墳	方 墳	円 墳	立地	時期
南 ↓ ↓ ↓ ↓ 北	南部1遺跡	平野	白江～高島	?	?	?	?	?	?
	?	?	?	富崎千里古墳群 (9号墳)	-	富崎千里古墳群 (2・4・6・16・17・18号墳)	富崎千里古墳群 (10号墳)	丘陵	白江～ 古府クルビ
	諏訪町遺跡	平野	白江～高島	?	-	?	?	?	?
	?	?	?	-	-	-	五ツ塚古墳群 (1～5号墳)	丘陵	?
	?	?	?	勅使塚古墳	-	?	-	丘陵	古府クルビ
				王塚古墳	-	王塚陪塚	-	丘陵	古府クルビ?
	?	?	?	杉谷古墳群 (1番塚古墳)	杉谷古墳群 (4号古墳)	杉谷古墳群 (2番塚古墳他)	杉谷古墳群 (3番塚古墳)	丘陵	白江～ 古府クルビ
?	?	?	金谷龜山古墳群 (兵羽反塚No16古墳)	金谷龜山古墳群 (兵羽反塚No18古墳)	金谷龜山古墳群 (兵羽反塚No17古墳)	-	丘陵	白江～ 古府クルビ?	

表6 婦負丘陵における古墳時代前期の遺跡一覧

※杉谷古墳群、金谷龜山古墳群、王塚陪塚は、富山市兵羽丘陵

杉谷古墳群（富山市）

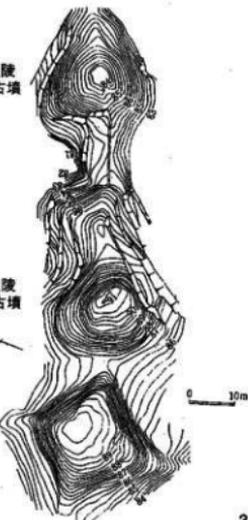


杉谷A遺跡（富山市）

奥羽丘陵
No.17古墳

奥羽丘陵
No.16古墳

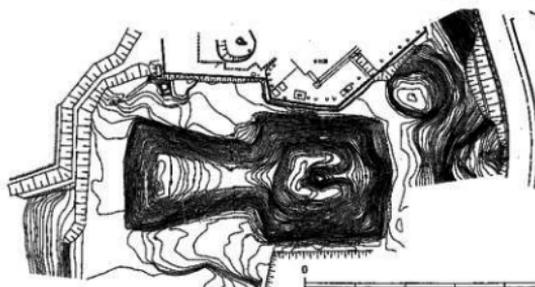
奥羽丘陵
No.18古墳



金屋龜山古墳群（富山市）



上：奥羽丘陵・柳井丘陵の古墳分布図



左：柳田布尾山古墳
（水見市）

第69図 <参考>県内の関連遺跡

1・3・4は柳中町1997「柳中町史」、2は富山市教育委員会1975「富山市杉谷(A・G・H)遺跡発掘調査報告書」、5は水見市教育委員会2000「柳田布尾山古墳」より、抜粋、一部加筆

第2節 出土遺物

第1項 器種細別型式分類

今回の調査で出土した弥生時代後期から古墳時代初頭の土器の形態はバラエティーに富むが、ここでは各器種を簡潔な細別型式に分類した(第70図・第71図)。器種の後に付くべき「形土器」は省略した。なお、千坊山遺跡群全体としての土器の分析は、遺物が多量に出土した鍛冶町遺跡の整理を待って行いたい。

(1) 甕

(甕A) 有段口縁甕。口縁部外面に擬凹線・凹線を施すもの(Aa類)と無文のもの(Ab類)がある。

Aa(Ab) 1 長く外反する頸部に付加状口縁部が付くもの。

Aa(Ab) 2 長く外反する頸部に外反する短い口縁部が付くもの。擬凹線は殆どが2条のみ。

Aa(Ab) 3 長く外反する頸部に外傾する短い口縁部が付くもの。擬凹線は殆どが2条のみ。

Aa(Ab) 4 外反する頸部にやや短めの口縁部が付くもの。擬凹線は殆どが2条のみ。受け口状のものも含む。

Aa(Ab) 5 短く外反する頸部に直立・外傾、外反する口縁部が伸展したもの。段の屈曲が強いもの。

Aa(Ab) 6 短く外反する頸部に外反する口縁部が伸展したもの。段の屈曲が弱い。長浜甕を含む。

Aa(Ab) 7 短く外反する頸部に、段の屈曲が弱く、外面下端が肥厚する程度の口縁部が付くもの。

(甕B) 「く」の字状口縁甕。

B1 口縁部断面が三角形を呈するもの。

B2 口縁端部を面取りするもの。

B3 口縁端部を丸く仕上げるもの。

(2) 壺

(壺A) 広口壺。

A1 長く外傾する頸部を持ち、口縁端部を面取りないしは丸く仕上げるもの。

A2 長く外傾する頸部を持ち、口縁端部を上方に短く拡張するもの。

A3 長く外傾もしくは外反する頸部に外傾する有段口縁を持つもの。

A4 外傾もしくは外反する頸部に外反する長めの有段口縁を持つもの。

(壺B) 有段壺。口縁部外面に擬凹線・凹線を施すもの(Ba類)と無文のもの(Bb類)がある。

Ba(Bb) 1 外傾ないしは内湾する口縁部を持つもの。

Ba(Bb) 2 外反する口縁部を持つもの。

Ba(Bb) 3 外反する口縁部を持つもので、小型のもの。壺C1の可能性あり。

(壺C) 裝飾壺を総括する。胴部に突帯がめぐる。小型のもの(C1)と脚が付く大型のもの(C2)がある。C1は胴部が丸いものと胴部で屈曲しそろばん玉状になるものがある他、口頸部の形態で更に細分化される。

(壺D) 外來系の影響が窺えるもの。

(壺E) 肩の張る体部から、短い口縁部が直立するもの。

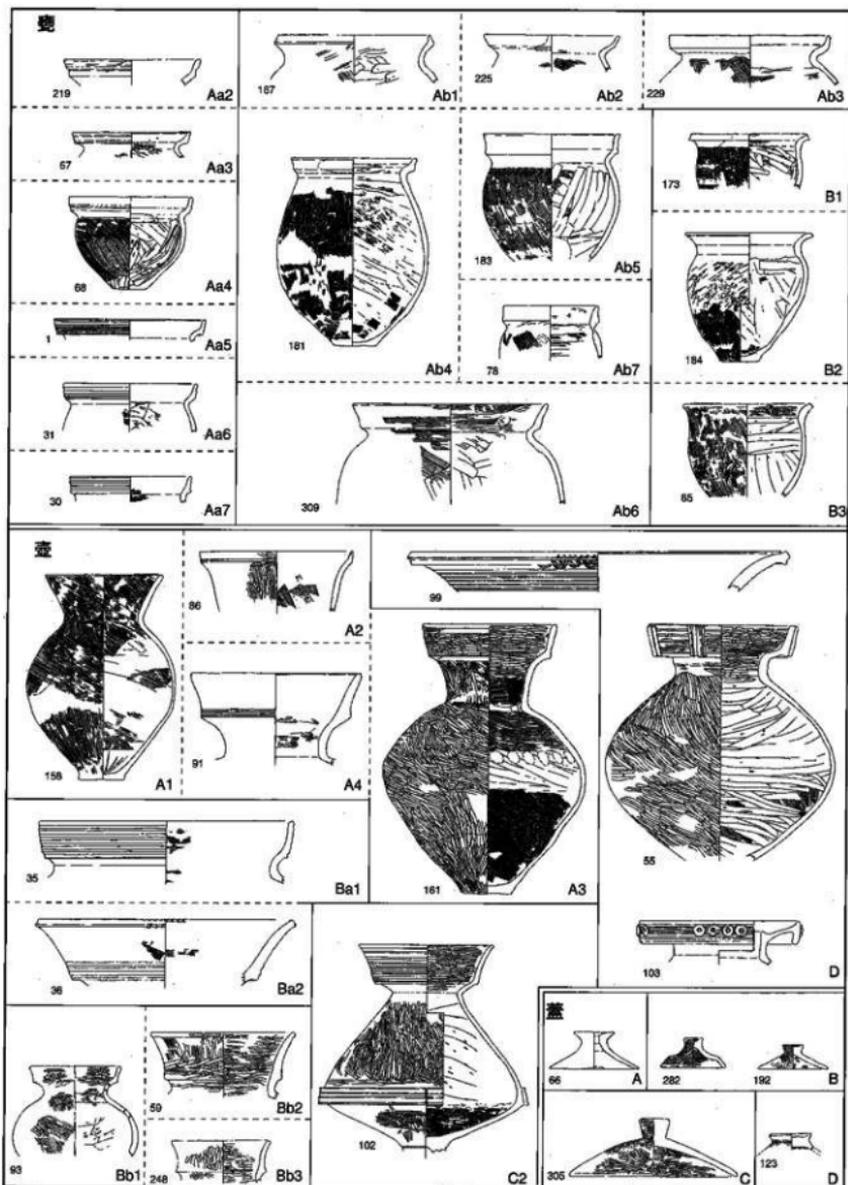
(壺F) 直口壺。球形の体部に長い口縁部をもつ小型の壺。

(3) 蓋

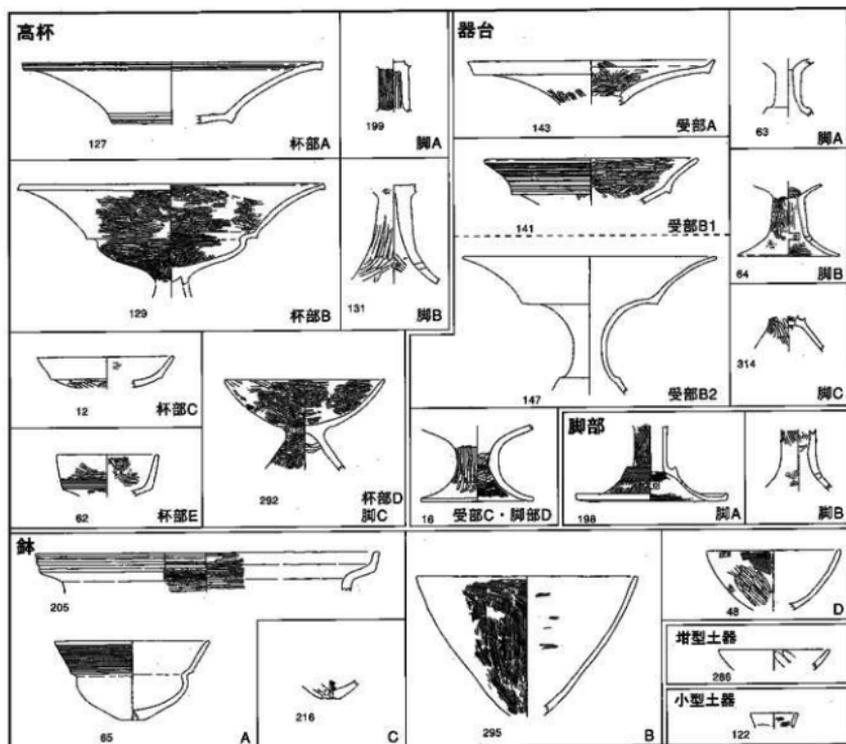
(蓋A) 摘みに頂部から孔を穿つもの。体部は直線的に伸びる。

(蓋B) 摘み頂部が窪む。体部は直線的に伸びるもの、端部に段をもつものがある。

(蓋C) 摘み頂部が平坦で、高さのある逆台形になるものが多い。体部は内湾する。



第70図 器種分類図(1/6)



第71図 器種分類図(1/6)

(蓋D) 摘み部の径が大きい。

(4) 高杯

(杯部A) 杯底部が水平ないしは外側上方へ伸び、口縁部が底部境で屈曲し、外反して伸びる。288のみ、他と比べると外反が弱く立ち気味である為深く見える。

(杯部B) 杯底部が碗形を呈し、口縁部が底部境で屈曲し、外反して伸びる。

(杯部C) 杯底部が内湾気味に伸び、口縁部が底部境で屈曲し、外傾ないしは内湾して立ち上がる。

(杯部D) 碗形を呈する。

(杯部E) 鉢形を呈する。

(脚部A) 棒状有段脚。

(脚部B) 脚部が握部途中で屈曲し、外へ開く。

(脚部C) 脚部が杯底部から「ハ」の字状に開く。

(5) 器台

(受部A) 強く外反し、口縁端部を短く上方に伸ばす。

(受部B) 有段口縁。擬凹縁を施すもの(B1)と無文のもの(B2)がある。

(受部C・脚部D) 受部から脚部にかけてX状に開く小型のもの。

(脚部A) 棒状有段脚。

(脚部B) 脚裾部で屈曲し、外へ開く。屈曲はなだらかなものと、強いものがある。

(脚部C) 杯底部から「ハ」の字状に開く。小型器台。

〔6〕 脚部 高杯か器台の脚部であるがどちらにも分類できないもの。

(脚部A) 棒状有段脚。

(脚部B) 脚裾部で屈曲し、外へ開く。

〔7〕 鉢

(鉢A) 有段口縁。直径40cmを超える大型品もある。

(鉢B) 体部から口縁部にかけて直線的に開く。

(鉢C) 底部に孔を穿つ有孔鉢。

(鉢D) 碗形鉢。

その他、埴型土器、小型土器などがある。

第2項 考察

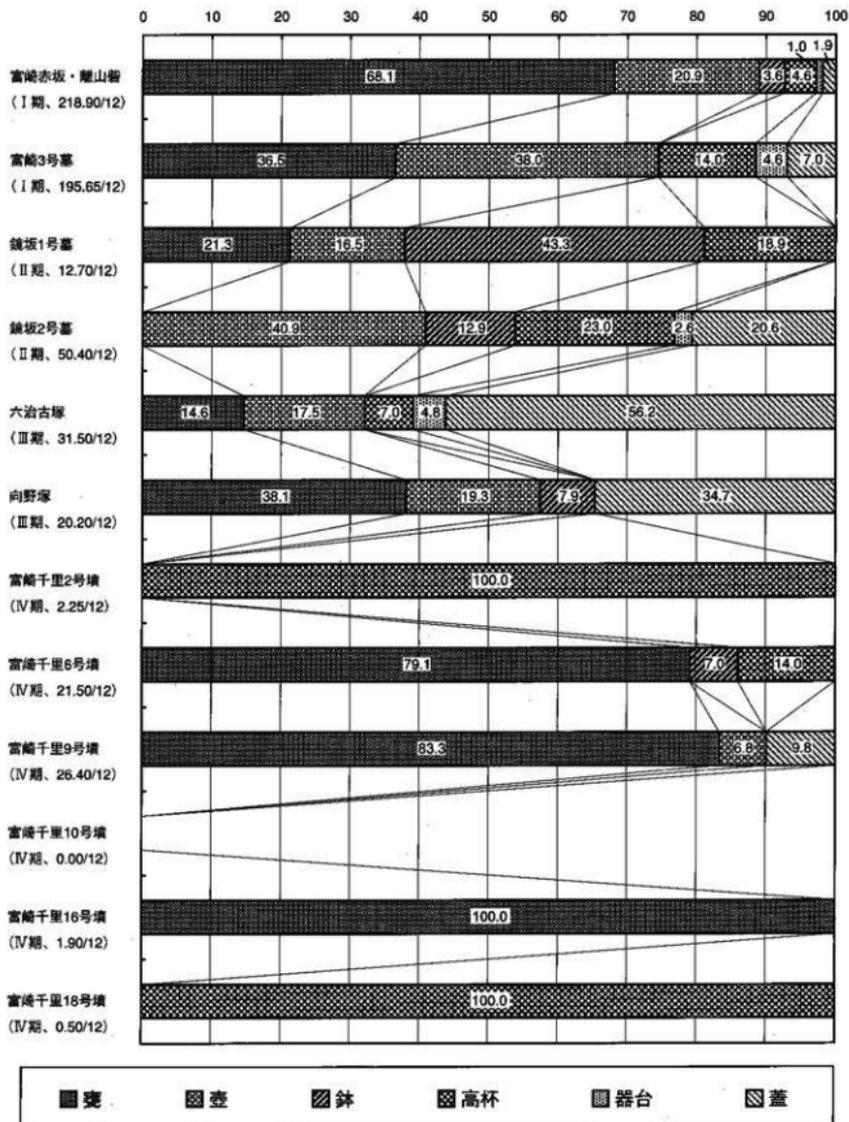
県内では、これまで埴型土器や古墳に伴う土器の出土例は少なく、今回の調査で出土した土器は富山県の古墳出現期における土器編年と様相を考える上で好資料となるものである。ここでは、先述の器種分類に基づいて計量分析を行い、千坊山遺跡群の土器を概観したい。土器の出土量は、口縁部計測法によって算出した(宇野1992)。ただし、個体識別法を併用していない為、グラフでは個体が存在しても口縁部が残存しない場合には比率が数値として表れない。

〔1〕 器種構成比率 (第72図)

集落遺跡のデータは、法仏一・月影Ⅰ式期の高地性集落(高崎赤坂・離山岩遺跡)のみであるが、遺跡の性格上当然壺が多い。一方、法仏一・月影Ⅰ・Ⅱ式期の四隅突出型埴型土器(富崎墳墓群、鏡坂墳墓群、六治古塚)における出土土器では、基本的な器種構成は集落と同じであるが、祭式土器である壺・高杯・器台の割合が高い。なかでも壺を多用するのが特徴であり、塗彩加飾した独特の台付裝飾壺を始めとして多種多様のものがある。また、集落で日常容器として使用されるものとなら変わりがない壺・壺・鉢・蓋なども出土している。他地域の四隅突出型埴型土器の土器組成と比べると、壺や蓋が使用される比率が高く、器台よりも高杯が多い傾向がある。ただし蓋は器形が小さく口縁部が残存しやすい為グラフでは実際よりも比率が高くなっている可能性が高い。古墳時代直前の前方後方形埴型土器(向野塚)では、壺が減少傾向となり移行期的な器種構成を示している。白江一古府ルビズ式期の古墳(富崎千里古墳群)では、土器出土量が少ない為一定した特徴は捉えにくいものの、壺の多用が認められなくなるなど、祭儀儀礼に使用した土器の器種構成比率は変化している。

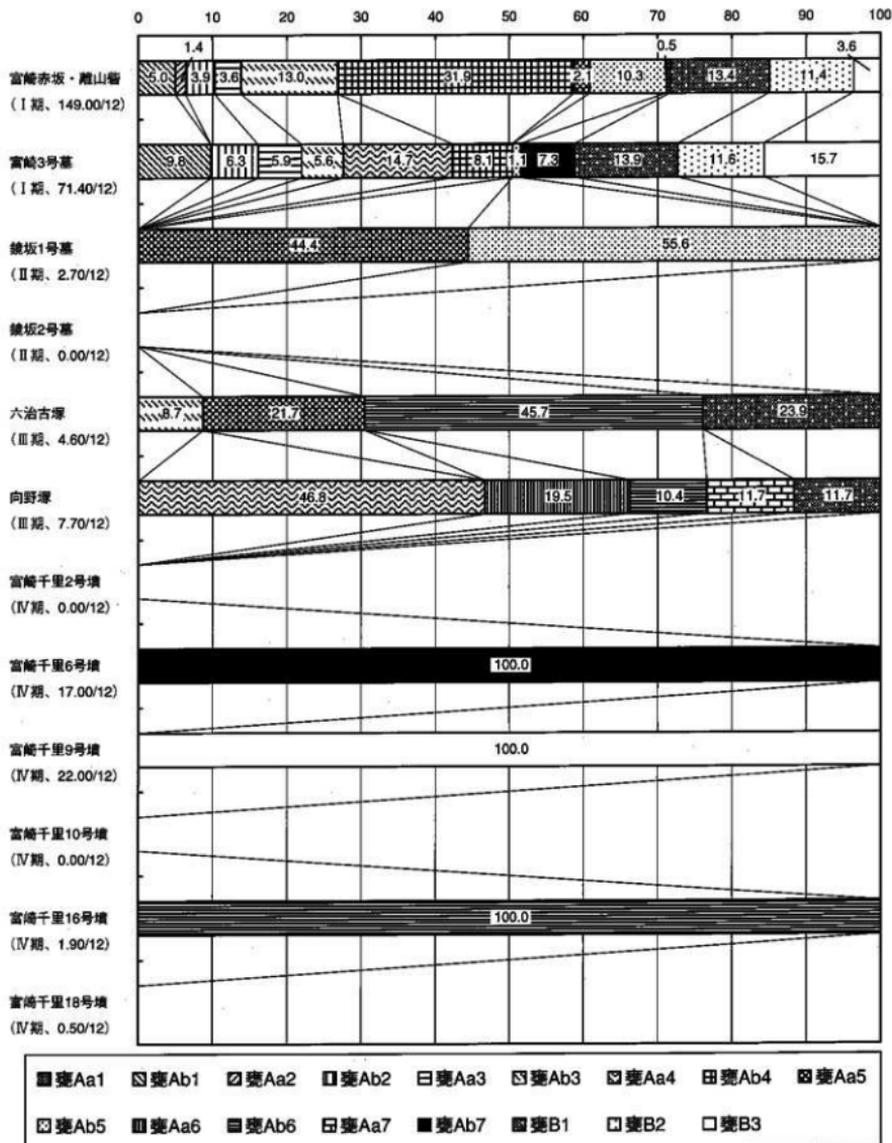
〔2〕 細別型式構成の時期別推移と系譜

先学の研究成果を基礎として概観する。なお壺については口縁部の形態類別構成比率を載せた(第73図)。法仏式期は、壺の口縁形態はく字口縁(壺B1・2・3)が多い。有段口縁壺は短い口縁部に長い頸部をもつものが多く、条数の少ない擬凹縁を施すもの(壺Aa1~3)も一定量含まれるものの、無文(壺Ab1~3)のものが多くを占める。高杯・器台は棒状有段脚(脚部A)が多い。広口壺を中心として、煮沸に用いたと考えられる煤の付着する壺が僅かに認められる。また富崎3号墓出土の祭式土器を始めとして、スタンプ文や浮文、突帯、赤彩など加飾性に富む。この時期には山陰・東海を中心とした外来系土器の影響がみられるが(特に壺、蓋)、全て在地化したものである。月影式期は、壺は有段口縁が多く、口縁部が伸長しはじめ擬凹縁の割合が高くなり条数も多くなる(壺Aa4~7、



第72図 遺跡別器種構成比率

※出土量の算出は口縁部計測法による(宇野1988、1992)。存在するが、比率が数値として表れないものもある。



第73図 形態類別構成比率 (甕口縁部)

※出土量の算出は口縁部計測法による(宇野1988, 1992)。存在するが、比率が数値として表れないものもある。

表 Ab4～7)。特に向野塚では過半数が有文となる。在地化し変質した外来系土器（山陰系甕、東海系壺など）の影響が僅かにみられるものの、基本的に在地色が強い。白江～古府クルビ式期には、甕は段が緩やかな有段無文口縁をもち（表 Ab6・7）、北近江系の長浜甕が含まれるが、布留系甕は普及しない。また祭式土器を中心に東海系土器（小型器台・高杯等）・畿内系土器（二重口縁壺・直口壺等）が波及する。白江式期は加賀・越前では外来系土器が波及するが、越中では独自性を維持する為月形式との区別がそれほど明確ではない。古府クルビ式期に外来系土器が波及しても全体的には月形式の系譜をひく在地系土器の比率が依然として高く、勅使塚古墳でも僅かに畿内系二重口縁壺が存在する程度である。量比では東海系が多い段階から畿内系に移り変わるようである。

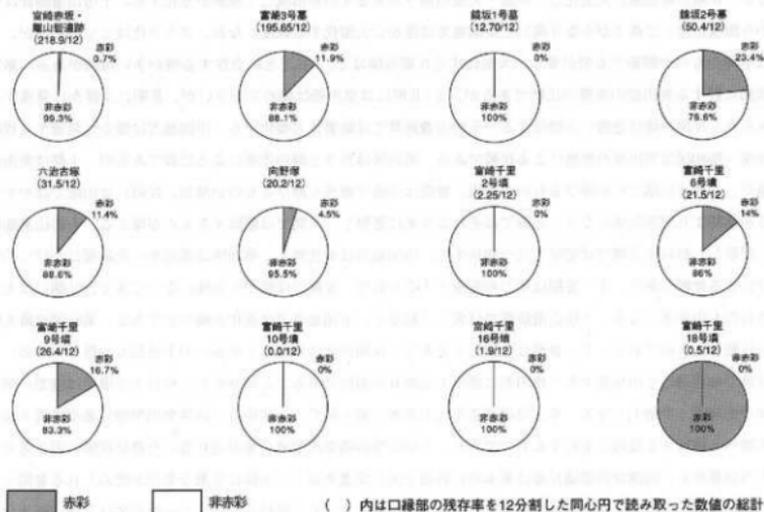
全体に共通する特徴に祭式土器としての台付裝飾壺の使用があり、法仏式期は山陰的要素が強い胴部が屈曲するもの、月形式期は丸い胴部のもの、白江～古府クルビ式期には器形は分からないが富崎千里9号墳の破砕土器がある。

(3) 赤彩の比率（第74図）

口縁部が残存していないものも含めるとほぼ全ての遺跡に赤彩品が確認されるが、口縁部が残存するものが少ないこともあり、遺跡の性格や時期差による一定した傾向はよく分からない。

(4) その他

本遺跡群の墳丘墓・古墳における土器出土量は全体的には少ないが、法仏式期の富崎3号墓では多量に出土し且つ多様性があり（時期的な特徴ともいえるが）、その特殊な出土状況や祭祀遺構とともに当期における葬送・祭祀儀礼の盛行を示していると考えられる。白江～古府クルビ式期になると富崎千里古墳群9号墳、勅使塚古墳において土器を破砕する行為が認められており、この時代の共通した儀礼と考えられる。



第74図 遺跡別赤彩比率 ※ 出土量の算出は口縁部計測法による（宇野1988、1992）

第3節 四隅突出型墳丘墓の地域性

四隅突出型墳丘墓は日本海沿岸に広まった特色ある墓制で、弥生時代中期後半に中国地方山間部で発生し山陰地方に定着して普及、盛行期には北陸の一部に広まり、弥生時代終末期に終焉を迎える。本遺跡群の四隅突出型墳丘墓は、その後半期から終末期にかけて造られたものである。ここでは、四隅突出型墳丘墓の特徴から地域性を見ていきたい。

第1項 数量分析(第75図～第82図)

第81図・第82図は、四隅突出型墳丘墓の時間的推移と形態の変遷を概観する為、渡辺貞幸氏の時期別分布図(渡辺1997)を基礎として作成したものであり、以下それに従い数量分析を行う。グラフに使用した時期区分は氏の四隅突出型墳丘墓の時期区分に従い、渡辺Ⅳ期を北陸土器編年の法仏式Ⅰ月影Ⅰ式期、渡辺Ⅴ期を月影Ⅱ式Ⅰ白江式期として考えた。なお、表7・表8には各報告書を始めた文獻で公開されている数値を引用したが、グラフ化にあたっては突出部の計測位置を統一する為、図から新たに測った。

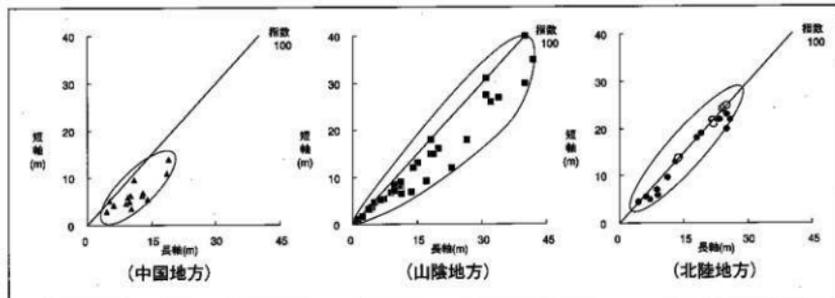
第75図～第80図は、地域別・時期別に墳丘の規模や形態を比較するものであり、先学で分析されてきたことを含め、グラフ化することで視覚的にまとめたものである。なお、富山市杉谷4号墳については、千坊山遺跡群に隣接し関連性が推測される為、グラフでは本遺跡群に含めた。

第75図は台状部の平面形による比較であるが、中国地方では殆どが長方形を呈し、山陰地方では長方形と方形が混在、北陸地方では福井は長方形、石川・富山は方形を呈している。各々の伝統的墓形態を素地としていることが推測できるが、福井では「四隅」の基本形を比較的忠実に守っている(前田1995)といえる。

第76図・第77図は規模による比較である。第76図は台状部の規模の比較であるが、Ⅰ～Ⅲ期は殆ど小型のもののみであるが、Ⅳ期以降急激に大型化し、中型・大型の高さがあるものが出現して規模が分化する。千坊山遺跡群は受容当初から面積に対して高さかなり高い。中国地方は僅かに大型化する程度。なお、グラフ化はしていないが、Ⅰ～Ⅲ期は小型のものが群集する例が多く、大型化するⅣ期以降は2、3基ごとに点在する例が多い傾向がある。第77図は台状部に対する突出部の規模の比較であるが、Ⅰ・Ⅱ期には突出部は極めて小さいが、Ⅲ期には僅かに発達する傾向がみられ、Ⅳ期以降は急激に大型化する。千坊山遺跡群では顕著に大型化する。中国地方は僅かに発達する程度。

第78図～第80図は突出部の形態による比較である。第78図は長さとの比率による比較であるが、Ⅰ期は突出部が未発達で、Ⅱ期は山陰でやや伸びるものが出現、Ⅲ期は山陰で細長く伸びるものが増加、Ⅳ期には山陰ではやや長めであるが前期より肥厚気味になり、北陸ではそれより更に肥厚し、Ⅴ期では肥厚するものが増える。千坊山遺跡群は著しく肥厚し、杉谷4号墳では肥厚し且つ伸長する。中国地方は変化無し。第79図は基部から先端部にかけての拡がり具合による比較であり、Ⅰ～Ⅲ期は殆どが細細りするもので、Ⅳ期には拡がり気味になってきて、Ⅴ期には大きく誇張されたものが増える。千坊山遺跡群では著しく拡がる。中国地方では変化が緩やかである。第80図は最大幅の位置を比較したものであり、Ⅰ～Ⅲ期は先端近くであり、Ⅳ期以降は先端近くが多いが中央部も少数みられる。千坊山遺跡群では共通して中央部であり楕円形に肥厚する固有の形態であることが分かる。杉谷4号墳では撥型に開きながら伸び先端近くで最大となる。本古墳は築造年代が北陸で最も新しく、婦中町で四隅突出型墳丘墓が終焉を迎え前方後方墳へと移行する段階と並行するものであり、千坊山型四隅突出型墳丘墓が当着いた最終段階の姿と考える。

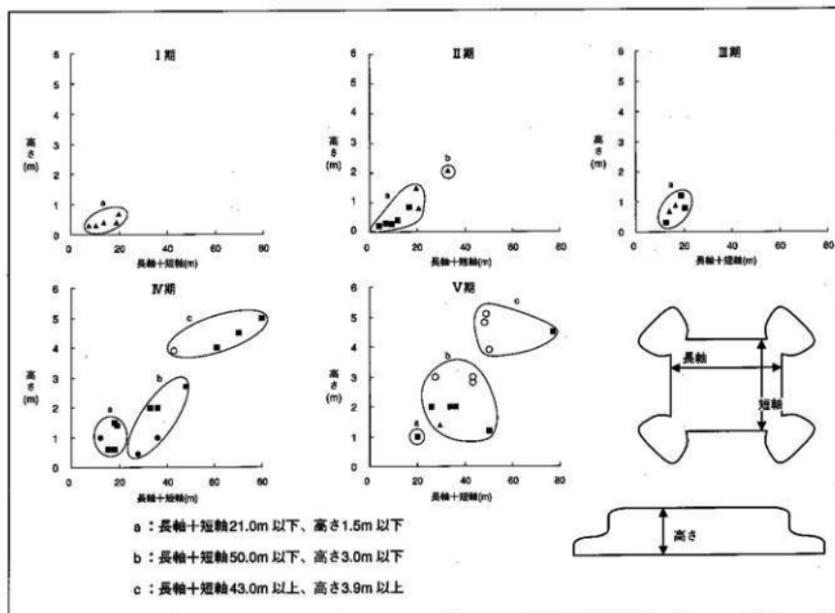
以上の結果から、四隅突出型墳丘墓は基本的に各地で同じ変遷を辿り、全体に急激な変化が認められるⅢ期とⅣ期の間に画期が設定できる。墳丘は、古墳時代に向け大型化するとともに規模が分化する。突出部は次第に肥大化し、墳丘内部への通路としての機能から葬送祭祀の場としてそれ自体に意義を認めるようになる。北陸で四隅突出型墳丘墓が受容されたのは山陰・中国地方で大型化が開始した時期であり、当初からそれに同調したものが築かれ、影響を受けながら変遷したと考える。一方で、各地域にはグラフに表れた相違を始めとした地域色があつたといえ、山陰で



第75図 台状部の形態

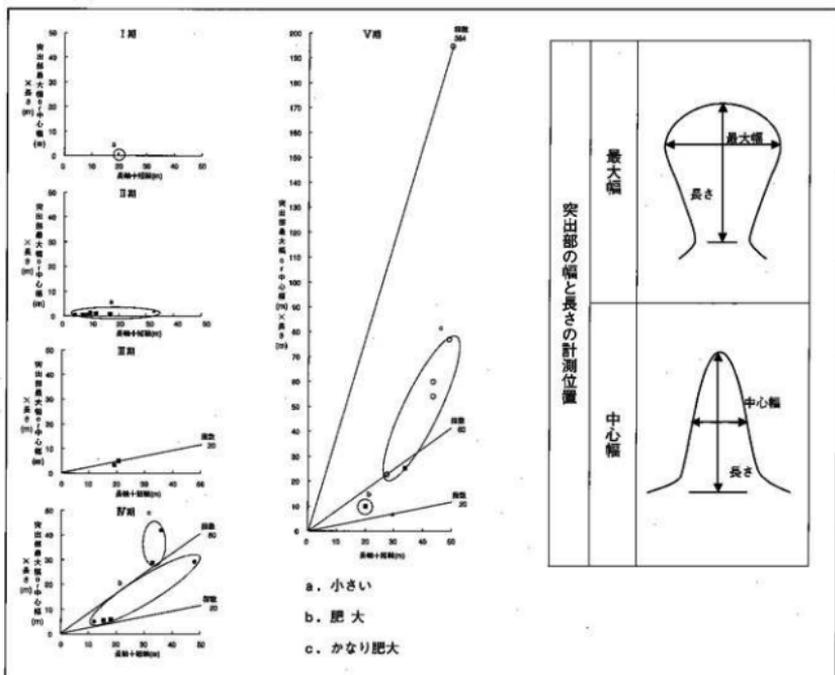
※全てのグラフ(第75図~第80図)に共通して

- ① ▲中国地方 ■山陰地方 ●北陸地方 ○千坊山遺跡群とする。
- ② 指数 = $\frac{\text{短軸}}{\text{長軸}} \times 100$ とする。
- ③ 杉谷4号墳は富山市であるが、千坊山遺跡群に含む。

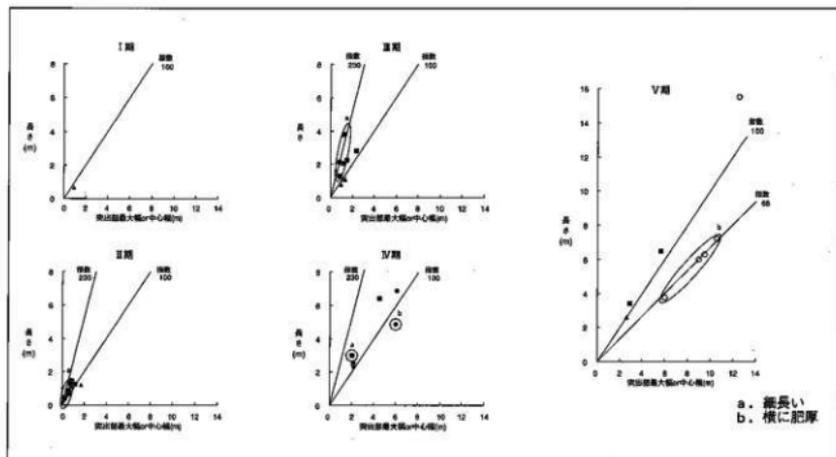


- a : 長軸+短軸21.0m 以下、高さ1.5m 以下
- b : 長軸+短軸50.0m 以下、高さ3.0m 以下
- c : 長軸+短軸43.0m 以上、高さ3.9m 以上

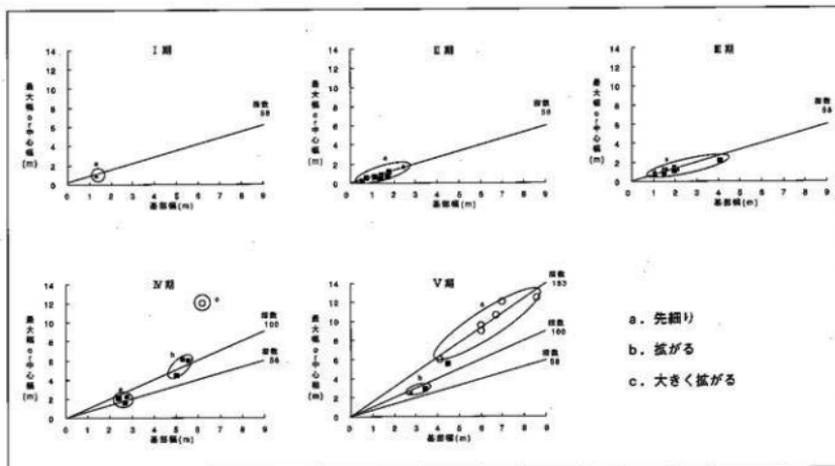
第76図 台状部の規模



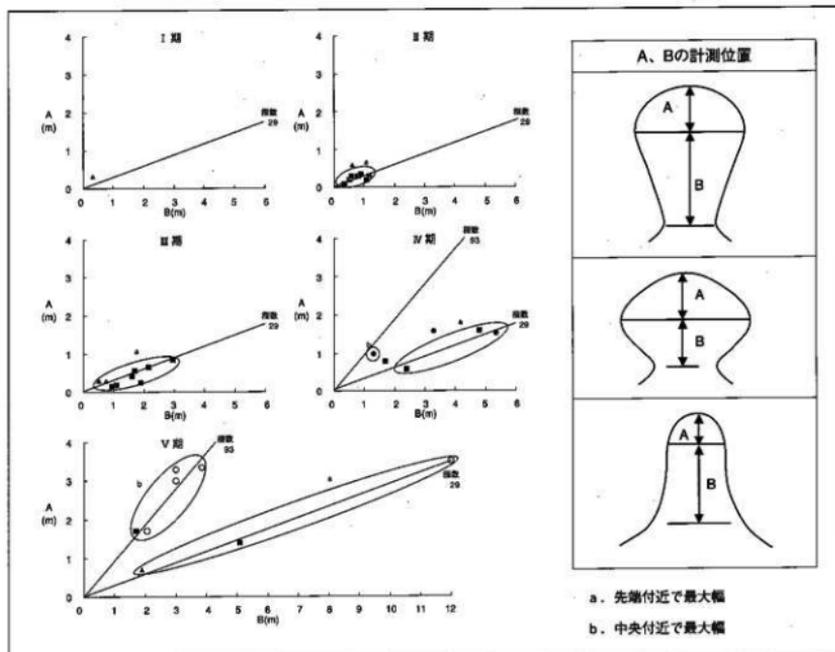
第77図 台状部に対する突出部の規模



第78図 突出部の形態① (長さとの比率)



第79図 突出部の形態②（基部からの拡がり具合）

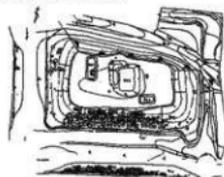
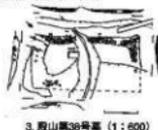


第80図 突出部の形態③（最大幅までの長さの比率）

I 出現期 (弥生Ⅳ期)



1. 宗法池西第1号墓 2. 陣山第1号墓～第5号墓
3. 殿山第38号墓



II 第1次拡張期 (弥生Ⅴ期前葉)



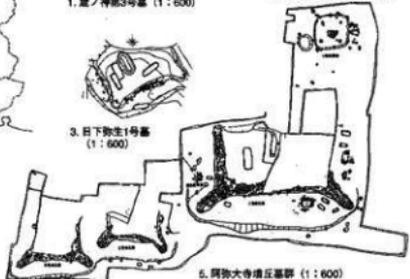
1. 田尻山第1号墓 2. 佐田谷第1号墓 3. 尾高浅山1号墓
4. 栗ノ原墳墓群 5. 竹田6号墓



III 定着期 (弥生Ⅴ期中葉)



1. 鹿ノ神第3号墓・第4号墓 2. 厩鹿原1号墓
3. 日下弥生1号墓 4. 仙谷1号墓・2号墓
5. 阿弥大寺1号墳丘墓～3号墳丘墓
6. 柴栗墳丘墓 7. 西内1号墳丘墓



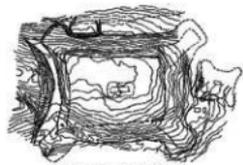
第81図 四隅突出型墳丘墓の時期別分布(1)

(渡辺貞幸1997「四隅突出型墳丘墓研究の諸問題」『四隅突出型墳丘墓とその時代』山陰考古学研究会より引用・加筆)

Ⅳ 第2次拡張期 - 王朝の出現 (弥生Ⅴ期後葉)



1. 西谷1号基~4号基 2. 間内結1号基 3. 未見1号基
4. 仲仙寺9号基・10号基 5. カウカツE-1号基 6. 西桂見弥生墳丘墓
7. 小羽山墳墓群 8. 寺井山6号基 9. 一塚墳墓群 10. 宮崎3号基



7. 小羽山30号基 (1:1000)



7. 小羽山22・23号基 (1:1000)



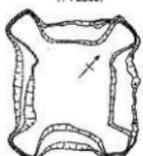
7. 小羽山24号基 (1:1000)



1. 西谷3号基 (1:2000)



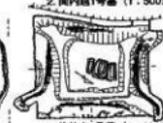
6. 西桂見弥生墳丘墓 (1:2000)



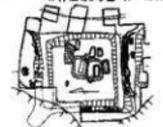
9. 一塚21号基 (1:1000)



2. 間内結1号基 (1:500)



4. 仲仙寺9号基 (1:1000)



4. 仲仙寺10号基 (1:1000)

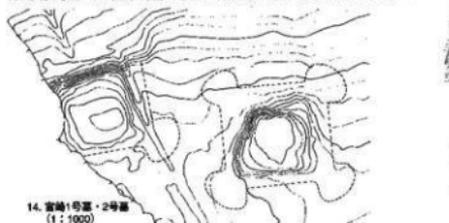


10. 宮崎3号基 (1:1000)

Ⅴ 終末期 (弥生Ⅴ期)



1. 矢谷MD1号基 2. 西谷6号基・9号基 3. 南鏡波小淵 4. 大木樺湖山1号基
5. 安養寺1号基・3号基 6. 宮山4号基 7. 下山墳墓 8. 父塚1号墳丘墓・2号墳丘墓
9. 橋本方墳 10. 藤和岡隅突出型墳丘墓 11. 糸谷1号基 12. 船木湖山
13. 杉谷4号墳 14. 宮崎1号基・2号基 15. 鏡坂1号基・2号基 16. 六治古塚



14. 宮崎1号基・2号基 (1:1000)



1. 矢谷MD1号基 (1:1000)



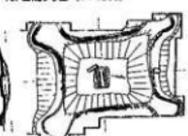
8. 父塚1・2号墳丘墓 (1:1000)



15. 鏡坂1号基 (1:1000)



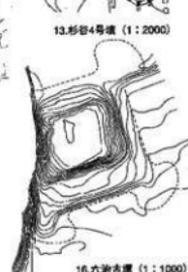
15. 鏡坂2号基 (1:1000)



6. 宮山4号基 (1:1000)



13. 杉谷4号墳 (1:2000)



16. 六治古塚 (1:1000)

第82図 四隅突出型墳丘墓の時期別分布 (2)

(渡辺貞幸1997「四隅突出型墳丘墓研究の諸問題」『四隅突出型墳丘墓とその時代』山陰考古学研究会より引用・加筆)

名称	所在	时期	規模 (m)				基石	列石	埋葬施設	副葬品	時期	参考図	
			穴状態	突出部	幅	高さ							
陣山1号	広島県三次市御前町	備後	約9.5×約5.2		0.30		○	土壇墓2		弥生中期後葉	①		
陣山2号	広島県三次市御前町	備後	約12.7×約6.3		0.40		○	土壇墓9		弥生中期後葉	①		
陣山3号	広島県三次市御前町	備後	約9.2×約3.7 -5.0		0.30	0.30	○	土壇墓3		弥生中期後葉	①		
陣山4号	広島県三次市御前町	備後	約9.0×約4.7		0.40	0.30	○	土壇墓3(掘出状施設に土壇墓)		弥生中期後葉	①		
陣山5号	広島県三次市御前町	備後	約4.5×約2.9		0.30	0.30	○	土壇墓1		弥生中期後葉	①		
分館1号	広島県三次市御前町	備後					○	土壇墓1		弥生中期後葉	①		
分館2号	広島県三次市御前町	備後					○	土壇墓1		弥生中期後葉	①		
墓山30号	広島県三次市大田町	備後	約13.0×約6.6		0.70		○	土壇墓1	石鏡	弥生中期後葉	①		
矢野M4-1号	広島県三次市西原町	備後	約18.5× 約10.0-12.0		1.30- 1.60		○	土壇墓1 貯水石壇1 須石土壇1	刀子 ガラス小玉 碧玉土器 鉄製片、鍍金管	弥生終末	①		
弥生西園1号	広島県三次市西園町	備後	約10.0×約5.0				○	土壇墓3		弥生中期後葉	①		
弥生西園2号	広島県三次市西園町	備後	3.8×7								①②		
北畑谷第1号	広島県庄原市高町	備後	約18.0×約11.0		2.10	1.50	1.50	○	石壇二重溝造1 堀		弥生後期前期	①	
相模山1号	広島県庄原市山内町	備後	約10.9×約6.6		(0.80)		○	土壇墓1 石式石壇1 (溝形に溝状石壇)		弥生後期前期	①		
鹿ノ神3号	広島県千代田町南方	安芸	約10.3×(約)6.6		(0.70)	1.30	1.35	○	石式石壇2 (溝下に土壇墓)	瓦製土器 灰灰石土器	弥生後期前期-中期古墳	①	
鹿ノ神4号	広島県千代田町南方	安芸	約10.3×(約)6.4		(0.80)	1.00	1.00	○	石式石壇6 (溝下に土壇墓)		弥生後期前期	①	
西谷1号	鳥取県西成郡大津町	出雲	11.8m×8.8m± 15.8×7	3.8m×9.8m± 25.0×7	2.40			○	土壇墓4 中川IV		中川IV-V	①	
西谷2号	鳥取県西成郡大津町	出雲	15.8×7		1.00			○	土壇墓2以上		中川IV	①	
西谷3号	鳥取県西成郡大津町	出雲	約40.0×約30.0	約10.0× 約40.0以上	4.50	7.00	5.00以上	○	階梯二重溝造1 土壇墓7	ガラス製管玉 短玉 小玉 碧玉製管玉 鉄製	中川IV	①	
西谷4号	鳥取県西成郡大津町	出雲	約34.0×約27.0	約40.0×約39.0	4.00			○	不明		中川V	①	
西谷5号	鳥取県西成郡大津町	出雲	約17.0×7		1.00			○	不明		中川IV(中層-新相)	①	
西谷6号	鳥取県西成郡大津町	出雲	31.0×31.0		2.00			○	不明		不明	①②	
西谷7号	鳥取県西成郡大津町	出雲	42.0×35.0	6.8m±×3.8m±	4.50			○	不明		中川IV(中層-新相)	①	
西谷8号	鳥取県西成郡大津町	出雲	42.0×35.0	6.8m±×3.8m±	4.50			○	不明		中川IV(中層-新相)	①	
大庭遺跡	鳥取県西成郡	備前										③	
大谷1号	鳥取県西成郡志志	出雲	10.7×7.4									③	
大谷2号	鳥取県西成郡志志	出雲										③	
大谷3号	鳥取県西成郡志志	出雲										③	
カカフズ1	鳥取県石見郡大田町	出雲	約11.4×約6.5	(18.5×7.9)	1.50			○	不明		中川V	①	
大木嶺山1号	鳥取県東出雲郡出雲町	出雲	33.0×12.0									②	
岡内遺1号	鳥取県松江市矢野町	出雲	8.8×6.87	(11.0×8.0)	0.80	2.15	2.70	○	不明		中川IV(新相)	①	
泉見1号	鳥取県松江市矢野町	出雲	約10.0×8.0	13.5×10.5	0.80	2.00	2.00	○	土壇墓4 木棺墓1		中川IV	①	
石見1号	鳥取県島根町下島分	石見	10.75×8.25		1.20	1.25- 1.50	2.0- 2.25	○	石式石壇5 木棺墓1	ガラス製小玉14 ガラス製小玉の 算玉3	中川IV-V併行(Ⅱ中心)	①	
安曇守1号	鳥取県安曇市西赤川	出雲	約20.0×16.0		2.00			○	不明		中川IV(中層-新相)	①	
安曇守2号	鳥取県安曇市西赤川	出雲	30.0×30.0		2.00			○	不明		中川IV(中層-新相)	①②	
下山	鳥取県安曇市西赤川	山陰	33.0×17.0		2.50			○	不明		中川IV-V	①	
伊佐寺10号	鳥取県安曇市西赤川	出雲	18.0×18.0	(21.0×21.0)	2.00			○	不明		中川IV	①	
伊佐寺8号	鳥取県安曇市西赤川	出雲	18.0×14.0									③	
伊佐寺9号	鳥取県安曇市西赤川	出雲	18.0×15.0	(27.0×22.5)	2.00			○	不明		中川IV	①	
伊佐寺4号	鳥取県安曇市西赤川	出雲	約18.8×15.0	28.8×24.5	2.00			○	不明		中川IV(新相)	①	
陣山山10号	鳥取県西成郡赤白町	出雲	32.0×26.0	(40.0×30.0)	6.00	5.00	5.00	○	不明		弥生後期後葉	①②	
陣山山6号	鳥取県安曇市赤白町	出雲	31.0×27.5			先期約 8.00	約6.00					弥生後期後葉	③
御守1号	鳥取県大山町富岡	出雲	13.0×(12.8)		0.80			○	不明		弥生後期中期(中川IV, 青木墓台)	①②	
御守2号	鳥取県大山町富岡	出雲	7.4×7.1		0.50			○	不明		弥生後期中期(中川IV, 青木墓台)	①②	
御守10号	鳥取県大山町富岡	出雲	(1.95)×(1.6)		0.13	0.40	0.30	○	不明		不明	①②	
御守18号	鳥取県大山町富岡	出雲	(1.12)×(0.48)		0.20			○	不明		弥生後期中期(中川IV, 青木墓台)	①②	
御守7号	鳥取県大山町富岡	出雲	4.4×(4.0)		0.37	1.20	0.70	○	不明		弥生後期中期(中川IV, 青木墓台)	①②	
御守6号	鳥取県大山町富岡	出雲	4.9×4.4		0.26	1.30	1.00	○	不明		弥生後期中期(中川IV, 青木墓台)	①②	
御守9号	鳥取県大山町富岡	出雲	(2.0)×(1.11)		0.10	0.30	0.20	○	不明		弥生後期中期(中川IV, 青木墓台)	①②	
御守	鳥取県大山町富岡	出雲	19.0×18.0		2.00				不明		弥生後期中期(中川IV, 青木墓台)	①	
御守	鳥取県倉吉市上神	出雲	(9.5×7.1)		0.50			○	不明		弥生後期中期(中川IV, 池井VI)	①	
河原大寺1号	鳥取県倉吉市下郷田	出雲	33.8×(7.0)		0.80	3.50	0.0	○	土壇墓2		弥生後期中期(中川IV, 池井VI)	①	
河原大寺2号	鳥取県倉吉市下郷田	出雲	4.4×7		0.30	2.00	0.0	○	土壇墓1		弥生後期中期(中川IV, 池井VI)	①	

表7 西陽突出型墳墓一覧